

the
15th



大阪医科薬科大学看護学部15周年
大学院看護学研究科10周年記念誌

the
10th



大阪医科薬科大学看護学部15周年 大学院看護学研究科10周年記念誌

■ 第1章 ご挨拶・祝辞

学校法人大阪医科薬科大学	名誉理事長・相談役	植木 實	2	
	同上	理事長・学長	佐野 浩一	3
	同上	看護学部長・大学院看護学研究科長	鈴木 久美	4
大阪医科薬科大学病院	病院長	勝間田敬弘	5	
	同上	前看護部長	中山サツキ	6
	同上	看護部長	松本 加奈	7
学校法人大阪医科薬科大学	看護学部 PA会会長	小田 綾子	8	
	同上	同窓会会長	西ヶ峰晴奈	9

■ 第2章 看護学部15周年・大学院看護学研究科10周年記念行事 13

■ 第3章 沿革・あゆみ

沿 革			16
1. 学部開設の経緯と準備			
大いなる希望：大阪医科大学看護学部発展に向けて		田中 克子, 林 優子	18
2. 大学院看護学研究科設置の経緯と準備			26
3. 看護学部・看護学研究科のあゆみ	初代学部長・研究科長	林 優子	28
	第2代学部長・研究科長	道重 文子	30
	第3代学部長・研究科長	赤澤 千春	32

■ 第4章 教育・研究活動

1. カリキュラムとその改正			36
2. 多職種連携教育			39
3. 特色ある実習			45
4. 国際交流			50
5. 新入生合宿・研修			55
6. 市民看護講座			58
7. カムカムサロン			61
8. 看護研究会			63
9. リカレント教育			66
10. 大学院			68
11. コロナ禍への対応			74

■ 第5章 寄稿

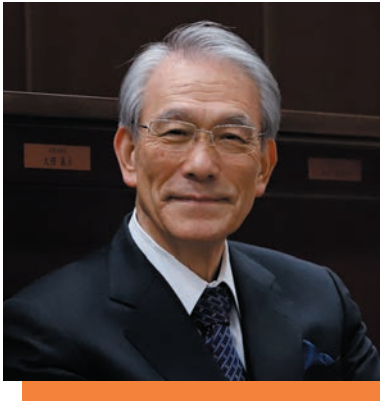
看護学部・在学生			80
看護学部・看護学研究科 教員			81
看護学部・看護学研究科 元教員			86
看護学部・卒業生			91
看護学研究科 修了生			94

■ 第6章 資料

看護学部看護学科			98
大学院看護学研究科	博士前期課程		103
同上	後期課程		104

第1章

ご挨拶・祝辞



看護学部開設15周年ならびに 研究科10周年記念祝詞

－看護学部のさらなる飛躍へ－

学校法人大阪医科薬科大学 名誉理事長・相談役

うえき みのる
植木 實

この度、大阪医科薬科大学看護学部が開設から15周年、そして同看護学研究科は10周年を無事に迎えられましたことは、本学法人ならびに本学にとりまして大きな慶びであり、この設置を計画されました田中忠彌元理事長、國澤隆雄元理事長をはじめ、当時の元学長諸氏ならびに看護学部開設準備室長で初代学部長の林 優子先生、二代目の道重文子先生、三代目の赤澤千春先生、そして四代目であり現学部長の鈴木久美先生および関係各位に御祝と心からの感謝を申し上げます。

大阪医科薬科大学の前身である大阪医科大学は、開校間もない昭和4年に看護基礎教育施設を設置し、附属看護専門学校として2012年（平成24年）の閉校まで80年間にわたり4千人余の優秀な看護師を輩出してきました。しかし、進歩の著しい医療界ではより高度な知識を有し、様々な領域で力を発揮する看護師が求められており、本学内や地域社会の要望に加えて文部科学省の指導もあり、4年制の看護学部の設置に至りました。開学後は入学応募者が多く高い倍率になり、卒業生の看護師国家試験の合格率もほぼ100%の方が合格されています。これには看護学部の実習施設が特定機能病院・大学病院であることに加え、予防医学を実践する健康科学クリニックを併設していることなどが良い結果として反映しています。

一方、看護学研究科は、2014年（平成26年）に本邦における私立看護系大学では初の快挙となる博士前期・博士後期課程の同時開設を果たし、高度化する医療看護の専門家としての高度実践看護専門職や指導者、看護学教員の育成を目的としています。この課程への入学者は、本学の卒業生のみならず近隣の医療機関の看護師も対象としており、地域の医療の高度化にも寄与すると考えられます。これまで、博士前期課程は69人、博士後期課程では44人が卒業され、年々ここから専門看護師や看護大学教員が数多く誕生し、それぞれの領域で指導者あるいは教育者として成長しつつ活躍されていることは、本学部の将来にとって大きな希望となります。

本学法人は、本学で学んだ学生を医師、薬剤師、看護師として育成した後も、本学の大学院や多くの研究室ならびに大学病院・分院において学位や専門医、専門資格の取得などの Added value を付与し、さらに高度な医療技術を身に付けた人間性豊かな医療人、所謂、学是の『至誠仁術』を備えた医療人に成長するよう指導しています。

本学法人は、2年後の2027年（令和9年）に旧大阪医科大学の創立100周年を迎えます。これからも最優の医療系大学・学園を目指し、医学・薬学・看護学各学部およびそれぞれの大学院、ならびに設置する高槻中学校・高槻高等学校における教育・研究および医療が地域社会や社会に根付き、それらが Center of community としてその使命を果たせるよう、教職員一同、一層の努力をしてまいります。

結びにあたり、今後の看護学部と看護学研究科の益々の充実と飛躍を祈念いたしますとともに、ご指導とご助力をいただいております文部科学省高等教育局医学教育課、大阪府看護協会、高槻市ならびに本学の関係各位に厚く御礼申し上げます。



看護学部開設15周年・ 大学院看護学研究科開設10周年に際して

学校法人大阪医科薬科大学 理事長
大阪医科薬科大学 学長

さの こういち
佐野 浩一

大阪医科薬科大学看護学部開設15周年・大学院看護学研究科開設10周年記念を迎えるに際し、開設および運営に深い御理解と御協力を賜りました多くの皆様に心より感謝いたします。

本学の看護学教育は100年近くの歴史があります。その歴史の中で昭和23年頃には甲種看護婦を大学教育にて養成する構想を立てましたが、様々な事情で実現に至らず、長年に亘って、大学看護学部の構想を温めてまいりました。その間、看護婦学校や看護専門学校の校長は、主として病院長が務めておりましたが、看護教育の大学化を目指して、看護師である校長として勢川瑠美子先生が着任されました。平成14年に看護専門学校改革準備委員会が発足し、目前の課題の解決に加え、将来構想の議論を再開し、その構想の下、4年制大学を念頭に置いた校舎が建築されました。私立医科大学では看護専門学校において看護師を養成するところが多く残っていた頃のことです。平成17年（2005年）に私が看護専門学校長を拝命し、改革準備委員会が検討した内容を参考にして、看護教育の大学化へと動き出しました。しかし、大学化への支援に当たってくださっていた勢川先生が急逝されたため、南裕子先生のアドバイスで、本学医学研究科より博士の学位を授与された小島操子先生を介して、キーパーソンとして林優子先生を紹介いただき、特別職務担当教員（教授）の本学第1号として着任いただき、設置準備室長に就任いただくと同時に田中克子先生には特別職務担当教員（教授）の第2号として副室長に就任いただき、開設準備の緒につきました。理事長の下にある大阪医科大学新学部設置準備委員会に林先生と田中先生が加わり活気づいたことを覚えております。設置認可申請に対して本学看護学部が全国で唯一留意事項なしで認可され、林優子先生を学部長として、平成22年（2010年）に看護学部が開設されたのでした。その後、平成26年（2014年）に学部の完成年を待って皆様のご協力の下、博士前期・後期課程同時設置いたしました。

看護学部が開設時に教育理念として掲げた「高い知性と豊かな感性を兼ね備え、変化する社会に積極的に対応し得る能力と生涯を通じて最新の医学医療知識を摂取し、最新の医療技術を保持しようとする意欲を有し、最善の医療を目指す創造性に富む人材を育成する」を振り返り、改めて関係の皆様のご理解とご協力を心より感謝いたしますとともに引き続き一層のご理解とご支援をいただき、教員・職員・学生が歴史を踏まえて新しい時代の看護学部を目指して進むことを祈念し、ご挨拶といたします。



看護教育の歩みと未来への飛躍

－看護学部15周年・大学院10周年の軌跡－

大阪医科薬科大学 看護学部長・大学院看護学研究科長

すずき くみ
鈴木 久美

本学看護学部が開設15周年、大学院看護学研究科が10周年を迎えましたことは、誠に嬉しい節目でございます。これまで教育・研究活動を支えてくださったすべての皆様に、心より深く感謝申し上げます。

本学の看護教育の源流は、1929年に設置認可された大阪高等医学専門学校附属看護婦学校に遡ります。幾多の変遷を経て2010年に看護学部を、2014年には大学院看護学研究科を開設し、看護教育の充実に努めてまいりました。さらに2021年には大阪医科大学と大阪薬科大学が統合し、「至誠仁術」を学是とする大阪医科薬科大学として新たな歩みを始め、医学・薬学・看護学の三学部を擁する医療系総合大学として発展を続けています。

看護学部では、倫理観を備え、多職種と協働できる看護実践力を有する人材の育成に力を注ぎ、これまでに1,000名を超える卒業生が地域医療や高度医療の現場で活躍しています。ある卒業生は「大学で学んだ経験が今の仕事の土台となっている」と語り、また別の卒業生は「実習での患者さんとの出会いが自分の支えになっている」「大学で学んだ経験が自分の活動の源になっている」と述べています。病院での指導的立場を担う者、助産所や訪問看護ステーションを開業する者、さらには海外で活躍する者など、その歩みは多彩であり、私たちの誇りであります。

大学院看護学研究科においては、臨床現場に根ざした教育研究活動を展開し、博士前期課程より69名、博士後期課程より44名の修了生を輩出してきました。修了生の一人は「大学院で培った知識と経験をもとに教育研究者として社会に貢献したい」と語り、また臨床に進んだ修了生は「学びを生かし患者さんやご家族の生活を支える看護を提供している」と述べています。教育・研究・臨床の各分野において、修了生は確かな役割を果たしています。

この15年、10年の歩みは決して平坦ではありませんでした。特に2020年以降の新型コロナウイルス感染症の拡大は、教育・研究に大きな影響を及ぼしました。しかし、大学病院や地域医療機関との強固な連携のもと、臨地実習や高度実践実習・研究活動を継続し、学生の学びを止めることなく推進できたことは大きな成果です。さらにICTの活用やオンライン教育の導入を通じて、教育の質の改善にも取り組んでまいりました。

今後、看護を取り巻く社会的ニーズはますます多様化・複雑化し、2040年には超高齢者人口の急増と生産年齢人口の減少が同時に進行することが予想されます。医療・介護需要の増加、人材不足の深刻化、AI技術の進展、地域包括ケアや在宅医療の充実など、看護職にはこれまで以上に高度で柔軟な実践力が求められる時代が到来します。

看護学部・研究科は、これまでの歩みを礎とし、持続可能な未来に向けてさらなる飛躍を目指します。教育においては倫理観と実践力を兼ね備えた看護職者・高度実践者・教育研究者を育成し、研究においては現場に根ざした課題発見解決型の研究を推進し、地域社会ならびに国際社会に貢献できる学術拠点としての役割を果たしてまいります。

これまで本学を支えてくださったすべての皆様に、改めて深く感謝申し上げます。今後とも、変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



看護学部創立15周年・大学院看護学 研究科創立10周年をお祝いして

大阪医科薬科大学病院 病院長

かつまたたかひろ
勝間田敬弘

看護学部の皆様におかれましては、創立15周年、看護学研究科創立10周年を迎えられるにあたり、心よりお祝い申し上げます。併せて、その創立にご尽力された先達の皆様への敬意と感謝を表します。貴学部の創立以来1,000名余の卒業生が社会に輩出され、そのうち563名が当院に入職されました。実に、半数以上の卒業生が当院に入職されたこととなります。大阪医科薬科大学病院は、貴学部を卒業した優秀で献身的な人材によって支えられていると言っても過言ではありません。当院の目指す“温かい医療”の実現には、従来から看護部の行動指針にある“患者さん中心の医療”は無くてはならない要素であります。第一期の卒業生の看護師さんが、現在では、病院各部署の中堅・幹部として部下の指導に当たっており、患者さんへの奉仕のみならず、多職種連携における鎧としての役割も担っていただいております。

大阪医科薬科大学病院は、2025年7月に病院新本館のグランドオープンを迎えました。臓器別に再編成されたユニット外来や入院予定の患者さんに入院中から退院後への総合的な療養計画をone stopで提示する患者サポートエリアでは看護師さんを中心に“部署横断的な連携”が達成され、業務の効率化が進んでいます。病棟では、看護記録・認証・実施入力を補助するスマートデバイスの大量導入、患者誤認を防ぐ検体認証システムの導入など、医療の安全性と看護活動における利便性の双方を向上させる取り組みも進んでいます。一方で、コロナ禍で衰退した患者さんと意志を疎通し情報を交換する能力の向上にも病院を上げて取り組んでいます。大阪医科薬科大学病院はこれからも、看護の精神に満ち、患者さんを大切に作る優秀な人材を数多く世に送り出すことに協力し、支援いたします。看護学部の益々のご発展を祈念いたします。



看護の種を蒔かれた方々へ 感謝と敬意をこめて

大阪医科薬科大学病院 前看護部長

なかやま さつき
中山サツキ

看護学部創立15周年、ならびに大学院看護学研究科創立10周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

看護学部が開設されました当時、私は大阪医科大学附属病院にて看護部の教育担当副部長を務めておりました。振り返りますと、看護学部の先生方と連携し効果的な実習環境について検討させていただいたことが、昨日のことにように思いだされます。実習発表会に参加させていただいた際には、学生の皆さんが実習を通じて真摯に学び、患者さんに寄り添う姿勢を育んでいる様子を実感することができ、大変嬉しく思いました。同時に、そのように導かれた先生方の指導力にも感銘を受けました。

また、看護学部と病院看護部とは、先生方による臨床研修・研究セミナー等の講師、看護師による技術演習支援等の人的交流を通じて、「ユニフィケーション」の理念のもと、教育と実践が密接に連携する体制が構築されました。これは看護教育の質向上のみならず、専門的知識・技術の深化や双方の信頼関係の醸成にも大きく寄与したと考えます。

そして、何よりも15年の歳月の間に多くの優秀な看護師を育成してこられたことに、心より感謝申し上げます。とりわけ印象深いのは、2020年のCOVID-19パンデミック下において大阪コロナ重症センターが設置された際、卒業生の方々が自ら志願し最前線に立たれた姿です。当時はいまだワクチンもなく、日々多くの命が失われていた極めて厳しい状況の中で、看護の使命感を胸に人々の命を守るため尽力された姿は、私たちに深い感動と勇気を与えてくれました。

看護学部の先生方が蒔かれた貴重な看護の種は、年月とともに素晴らしい人材として確実に成長し、15年を経た現在、医療・看護のさまざまな場面でかけがえのない存在となって活躍しています。今後も引き続き、優れた実践力と人間性を兼ね備えた看護師の育成にご尽力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

最後に、看護学部・看護学研究科のさらなるご発展と、教職員の皆様、学生の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



「患者中心の看護」を支える教育連携 の歩み、そして未来へ ～看護学部創設15周年・看護学研究科開設 10周年記念を祝して～

大阪医科薬科大学病院 看護部長

まつもと かな
松本 加奈

大阪医科薬科大学看護学部の創設15周年、ならびに看護学研究科の開設10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

2010年の看護学部創設にあたり大学病院看護部は、第3代 勢川瑠美子看護部長に始まり、歴代の看護部長を経て現在に至るまで、看護学部・看護学研究科と密接に連携しながら、看護専門職の育成にともに取り組んでまいりました。看護学部創設当初より、臨床実習の場として学生を受け入れ、教育と実践が相互に高め合う環境づくりを推進してきたことは、現場の看護師に新たな気づきをもたらし、学びの好循環を生み出しています。さらに双方で受け入れる海外看護研修生との交流は、看護の多様性を理解し、国際的視野を持つ看護職の育成につながっています。そして、2014年に看護学部第一期生が卒業して以来、2024年度までに563名の看護師（内助産師31名）が大学病院に就職し、そのうち第一期生の2名が看護主任の役割を担い、活躍するまでに成長しています。

また、2014年の看護学研究科設置により、臨床で看護を実践する私たちに学びの場と貴重な機会を提供していただき、誠に感謝しております。複雑化する医療ニーズに対応するためには、理論的根拠に基づいた判断力と看護実践力が求められます。大学病院看護部にとって看護の専門性を高める上で、高度実践者や教育研究者の育成は不可欠です。看護学研究科の設置以降、大学病院から教育研究コースに4名、高度実践コースに9名の看護師が入学し、修了しています。修了生は、看護学研究科で培った知見をもとに、看護を可視化することで、看護部の基本方針である「患者中心の看護」の質向上に大きく貢献しています。

看護職のキャリア支援や継続教育において、看護学部・看護学研究科との連携は欠かせません。15周年・10周年という節目を迎え、これまでの歩みを振り返るとともに、さらなる飛躍に向けて、大学病院看護部としてより一層の連携を深めてまいり所存です。今後とも変わらぬご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

看護学部・看護学研究科におかれましては、今後も未来社会を見据えた看護実践者および教育研究者の育成に寄与されますことを期待しております。末筆ながら、看護学部・看護学研究科の教職員の皆さまに敬意を表しますとともに、益々のご発展と在学生・卒業生の皆さまのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



看護学部15周年・大学院 10周年に寄せる祝辞

大阪医科薬科大学 看護学部PA会会長

おだ あやこ
小田 綾子

この度、大阪医科薬科大学看護学部創立15周年、ならびに大学院開設10周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、PA会を代表し、心よりお祝い申し上げます。また、このような素晴らしい記念誌に、祝辞を寄稿させていただく機会を賜り、心より感謝申し上げます。

本学看護学部が15年前、「医看融合」を掲げ良質の医療人を育成するという熱い志のもと、産声を上げた看護学部設立時を思い返すと、感慨もひとしおでございます。以来、常に時代のニーズに応え、看護の専門知識と技術はもちろんのこと、患者様一人ひとりに寄り添う温かい心を育む教育に、多大なご尽力をされてこられました。今日、多くの卒業生が医療の最前線で活躍し、人々の健康と命を守る大切な役割を担っていることは、教職員の皆様のこれまでのご努力の賜物に他なりません。

また、10年前に開設された大学院は、看護学のさらなる発展と、高度な専門性を備えた人材の育成という、新たな目標を掲げられました。これまでに多くの大学院生が、教育、研究、そして実践の各分野において、看護学の可能性を広げてこられました。

私どもPA会も、微力ながら子どもたちが安心して学業に専念できるよう、学生生活の様々な面で支援を続けてまいりました。PA会として、大学と密に連携を取りながら、国家試験対策やイベントへの協力などを通して、学生生活を側面から支えてきたことは、私たちの大きな喜びであり、誇りでございます。子どもたちが生き生きと学生生活を送り、目標に向かって努力する姿は、私たち保護者にとっても何よりの喜びであり、かけがえのない宝物です。教職員の皆様には、「多様な視点、柔軟な思考を持ち、変化に応える看護実践能力を養う」という教育理念のもと、日々の教育はもとより、学生一人ひとりの個性を尊重し、時には厳しく、時には温かく、愛情を持ってご指導いただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

在校生の皆さん、看護の道は決して平坦な道のりではありません。しかし、患者様からいただく「ありがとう」の一言は、何物にも代えがたい喜びとやりがいをもたらしてくれることでしょう。この恵まれた環境の中で、仲間と共に学び、夢に向かって邁進してください。皆様の未来が、希望に満ち溢れたものであることを心から願っております。

結びに、大阪医科薬科大学看護学部と大学院の、これまでの輝かしいご功績に心からの敬意を表しますとともに、今後のさらなるご発展を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



看護学部開設15周年、看護学研究科 開設10周年に寄せて

大阪医科薬科大学 看護学部同窓会 会長

にしがみねはるな
西ヶ峰晴奈

この度、大阪医科薬科大学におかれましては、看護学部開設15周年、ならびに看護学研究科開設10周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。この節目の年を迎えられたことは、貴学がこれまで積み重ねてこられた教育の成果と、地域医療への多大なる貢献の証であり、日々大学の運営に携わる教職員の皆様には、厚く感謝申し上げます。

私は、看護学部第2期生、看護学研究科第9期生として貴学に在学しておりました。貴学で学んだ日々を振り返れば、授業や実習を通じて、知識・技術の習得のみならず、人としての在り方を深く考える機会を数多くいただきました。患者様一人ひとりに寄り添う心、チーム医療の中での連携の重要性、そして何より「看護とは何か」を問い続ける姿勢を、教員の皆様から学びました。これらの学びは、看護師としての礎となっただけでなく、現在の教育者としての私の原点でもあります。

大学卒業後は、臨床現場での経験を経て、現在では大学教員として看護教育に携わっております。大学教員として学生達と向き合う中で、学生時代に学んだ理論が実践にいかに関わりついているかということを実感し、改めて実践と理論を統合することの大切さを強く感じました。このような気づきを得られたのは、在学当時にご指導くださった恩師の皆様の導きがあったおかげであると、深く感謝しております。今後は私自身が、学生達が自らの学びに誇りと希望を持つことが出来るように、そして「看護を学んでよかった」と思えるような教育が出来るように、日々研鑽を重ねてまいります。

在学中に学んだ知識と経験は、今の私の礎となっております。これからも、多くの学生が貴学で成長し、社会に羽ばたいていかれることを願っております。

改めまして、大阪医科薬科大学のさらなるご発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

第2章

看護学部15周年
大学院看護学研究科10周年
記念行事

看護学部15周年・ 大学院看護学研究科10周年記念行事



記念式典・祝賀会ワーキンググループ

くさの えみ こ
草野恵美子

大阪医科薬科大学看護学部15周年・大学院看護学研究科10周年を記念して、これまでの教育研究活動や卒業生・修了生の活躍を振り返り、看護学教育・研究機関としての安定的な存在感と魅力を学内外に発信することを目的として、2025年度に記念行事を挙行いたしました。本学での看護教育の出発点は大阪医学高等専門学校が1927年に開校した2年後に設置認可された附属看護婦学校に遡ります。約100年の歴史の重みを感じつつ、次なるステージに向けて決意を新たにす機会となりました。



1. 記念式典・記念講演

2025(令和7)年11月1日(土)10時から、本部北キャンパス看護学部講堂にて、日頃大変お世話になっている多数の御来賓をお迎えし、総勢110名(オンライン1名含む)のご列席のもと「看護学部15周年 大学院看護学研究科10周年記念式典」を挙行しました。記念式典では、鈴木久美 看護学部長・看護学研究科長の式辞に続き、佐野浩一 学長が告辞を述べられました。その後、濱田剛史 高槻市長より祝辞を頂戴しました。



記念講演の様子

また式典では記念講演として京都大学理学研究科 特定准教授の寺田昌弘 先生から「宇宙での健康生活に向けた看護職への期待」という演題でご講演いただきました。将来的には有人宇宙分野での看護職の活躍も期待されるとともに、単なる宇宙人材の育成ではなく、宇宙開発で得られた成果を地上の医療分野に活用するなど、可能性は様々に大きく広がると感じました。

式典の最後には、これまでの「看護学部・看護学研究科のあゆみ」をまとめた記念映像の上映を行い、1期生の入学式、合宿などの写真を皆さんと懐かしみつつ、記念式典を閉式しました。

2. 記念祝賀会

同日13時より、ホテルアベスタグランデ高槻に会場を変えて、「看護学部15周年 大学院看護学研究科10周年祝賀会」を挙行了しました。祝賀会では高槻市長をはじめ89名のご出席をいただきました。佐野学長からの開会のご挨拶に続き、学校法人大阪医科薬科大学 植木 實名誉理事長、文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 加藤 治実様、公益社団法人 大阪府看護協会 会長 弘川 摩子様より祝辞を賜りました。その後、初代看護学部長・看護研究科長であり、本法人評議員の林 優子先生より、乾杯のご発声をいただきました。余興では、看護学部・看護学研究科に纏わるクイズで各テーブルとも盛り上がり、終始和やかな雰囲気祝賀会が進行しました。卒業生・修了生からのメッセージ動画の上映では、1期生をはじめとして、大学病院で引き続き頑張っている姿、開業や海外での活躍等についての話を聞くことができ、卒業生・修了生を誇らしく思いました。最後に、鈴木看護学部長・看護学研究科長より閉会のご挨拶を行い、盛会のうちに幕を閉じました。



植木 實 名誉理事長



林 優子 初代学部長／研究科長

3. 在学生対象記念プログラム



看護学部15周年・看護学研究科10周年を記念して在学生向け歴史継承プログラムを企画しました。在学生が看護専門学校から続く本学看護学教育のこれまでの歩みを振り返ることで、本学への理解と愛着を深めるとともに、卒業生からのメッセージ等を通じて、将来のキャリアパスを思い描きながら、これまでの歴史と未来をつなぐ機会とすることを趣旨としました。これまでの本学看護学教育の歴史を振り返りつつ、卒業生のメッセージ動画からはその活躍にふれ、様々な可能性を感じてもらえたらと思います。

学教育の歴史を振り返りつつ、卒業生のメッセージ動画からはその活躍にふれ、様々な可能性を感じてもらえたらと思います。

4. 特設ページ

企画・広報課の多大なご協力のもと、周年記念特設ページをホームページ内に開設できました。記念式典や祝賀会では紹介しきれなかった在学生や教員からのメッセージも掲載しました。



■ 記念式典・祝賀会ワーキンググループメンバー

氏名	所属・職位	備考
草野 恵美子	看護学部・教授	統括
鈴木 美佐	看護学部・教授	
真継 和子	看護学部・教授	
川北 敬美	看護学部・准教授	
山内 彩香	看護学部・講師	
土井 智生	看護学部・助教	
日高 朋美	看護学部・助教	2025年度～
寺口 佐與子	看護学部・教授	研究科同窓会より
西ヶ峰 晴奈	博士前期課程修了生	学部同窓会より
上久保 純	看護学事務課・課長	2025年度～
森川 健太	看護学事務課・担当主任	2025年度～
川端 由夏	前看護学事務課・課長	～2024年度まで

おわりに

本企画は約2年前の2023年度から前学部長の赤澤 千春名誉教授のもと企画を開始しました。総勢12名の看護学部教員と看護学事務課職員、同窓会メンバーにてワーキンググループを結成して予算確保をはじめ、内容の検討・様々な関係者との調整などを行い、無事に終えることができました。ご列席の皆様には「看護学部らしい、温かみのあるアットホームな式典だった」との嬉しいお言葉を多数頂戴しました。

改めまして、本企画にご理解くださいました理事長・学長、多様な調整・サポートをいただきました鈴木看護学部長・研究科長に深謝しますとともに、ワーキンググループの皆様をはじめとする看護学部教員の皆様、学務部・看護学事務課、企画・広報課、学内の関係の皆様にご挨拶申し上げます。

今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



第3章

沿革・あゆみ

大阪医科大学・ 大阪医科大学薬科大学 のあゆみ

看護学部・ 看護学研究科のあゆみ

社会のできごと

1927
昭和2年

- 2月 財団法人大阪高等医学専門学校設置認可
- 4月 大阪高等医学専門学校開校認可(修業年限5年)

1月 健康保険法施行

1929
昭和4年

- 3月 大阪高等医学専門学校附属看護婦学校設立認可

11月 近鉄花園ラグビー場が開場

1946
昭和21年

- 3月 大阪医科大学設置認可(旧制大学)
- 4月 大阪医科大学予科設置

5月 極東国際軍事裁判所設置

1951
昭和26年

- 3月 学校法人大阪医科大学認可(組織変更による)

1月 NHK紅白歌合戦スタート

1952
昭和27年

- 2月 大阪医科大学設置認可(新制大学)
- 3月 大阪高等医学専門学校廃校

4月 サンフランシスコ講和条約発効、日本の占領解除

1959
昭和34年

- 3月 大阪医科大学大学院医学研究科設置認可

12月 南極条約に調印

1965
昭和40年

- 1月 大阪医科大学進学課程設置認可

12月 名阪国道開通

1978
昭和53年

- 4月 大阪医科大学附属看護専門学校設置認可

5月 新東京国際空港(現在の成田国際空港)が開港
8月~ インバーダーゲーム流行

1982
昭和57年

- 12月 大阪医科大学附属看護専門学校3年課程(全日制)設置認可

2月 ホテルニュージャパン火災

2005
平成17年

- 3月 大阪医科大学附属看護専門学校新校舎竣工(現 看護学部棟)

2009
平成21年

- 6月 大阪医科大学健康科学クリニック開設

10月 大阪医科大学看護学部設置認可

5月 裁判員制度開始
新型インフルエンザ流行

2010
平成22年



- 3月 看護学部研究棟竣工
- 4月 大阪医科大学看護学部開設
看護学部長に林 優子教授が就任
- 5月 看護学部開設記念式典

6月 小惑星探査機「はやぶさ」7年ぶり帰還

2011
平成23年

3月 大阪医科大学看護研究雑誌第1巻発行

3月 東日本大震災 福島第一原子力発電所事故発生
7月 FIFAワールドカップ日本女子代表なでしごジャパン優勝

2012
平成24年

- 3月 大阪医科大学附属看護専門学校閉校

- 4月 第1次カリキュラム改正(保健師選抜制等)
- 9月 3年生医看融合カンファレンス開始

5月 東京スカイツリー開業

2013
平成25年



- 4月 第2次カリキュラム改正
- 7月 4年生医看融合ゼミ開始
- 10月 大阪医科大学大学院看護学研究科設置認可
- 12月 第33回日本看護科学学会(学会長 林 優子)

6月 富士山が世界文化遺産として登録

2014 平成26年	4月 学校法人大阪医科大学と学校法人高槻高等学校の法人合併  看護学部第1期生謝恩会	3月 卒業式(第1期生) 4月 大阪医科大学大学院看護学研究科開設 看護学研究科長に林 優子教授が就任 博士前期課程高度実践コース(慢性・精神・母性・小児)設置 6月 看護学研究科開設記念式典 7月 台北医学大学との国際交流開始	4月 消費税が5%から8%に増税
2015 平成27年	1月 大阪医科大学訪問看護ステーション開設 7月 大阪医科大学三島南病院開設	4月 第3次カリキュラム改正(1年生医療人マインド開講等)	3月 北陸新幹線開業 10月 マイナンバー制度が運用開始
2016 平成28年	1月 中央手術棟竣工 4月 学校法人大阪医科大学と学校法人大阪薬科大学の法人合併、学校法人大阪医科薬科大学が設立	8月 高知県での地域医療実習開始(医学部・大阪薬科大学と合同)	3月 北海道新幹線開業 4月 熊本地震 11月 バリ協定発効
2017 平成29年		4月 看護学部長・看護研究科長に道重文子教授が就任 4月 第4次カリキュラム改正(2年生専門職連携医療論開講等)	3月 任天堂「Nintendo Switch」が発売 12月 新名神高速道路 高槻JCT・IC 併用開始
2018 平成30年	6月 大阪医科薬科大学関西BNCT共同医療センター開院	4月 博士前期課程高度実践コースがん看護学設置	6月 大阪府北部地震
2019 令和元年		6月 看護学部長・看護学研究科長に赤澤千春教授が就任 9月 ミネソタ州立大学マンケート校との国際交流開始	5月 新元号「令和」 10月 消費税が8%から10%に増税
2020 令和2年		4月 コロナ禍による授業停止、国際交流派遣・受入中止(～2021年)、地域医療実習中止(～2022年) 4月 博士前期課程高度実践コース老年看護学設置	3月 WHOがCOVID-19のパンデミックを宣言 4月 大阪を含む7都府県に緊急事態宣言
2021 令和3年	4月 大阪医科大学と大阪薬科大学の統合により大阪医科薬科大学に名称変更	4月 医看融合科目等を、3学部による多職種連携論1～4に改編 4月 博士前期課程高度実践コース ナースプラクティショナー(NP)設置 9月 国際交流オンラインプログラム(CRISIIS)参加開始	2月 COVID-19 ワクチン接種開始 7月 東京オリンピック・パラリンピック開催(1年延期)
2022 令和4年	5月 病院新本館A棟竣工 	4月 第5次カリキュラム改正 7月 看護キャリアサポートセンター開設(大学病院・三島南病院・訪問看護ステーションと共同)	2月 ロシアがウクライナ侵攻し戦争が始まる 4月 民法改正により、成人年齢が18歳に変更
2023 令和5年		3月 一般財団法人日本看護学教育評価機構による看護学教育評価適合認証	3月 ワールド・ベースボール・クラシックで日本優勝 5月 COVID-19の感染症法上の位置づけが5類へ変更
2024 令和6年		6月 看護学部長・看護学研究科長に鈴木久美教授が就任 9月 トマス・モア応用科学大学との協定締結	1月 能登半島地震
2025 令和7年	5月 病院新本館B棟竣工 7月 第1研究館竣工 7月 病院新本館A棟及び病院新本館B棟を「病院本館」に、病院7号館を「病院東館」に名称変更	11月 看護学部15周年・大学院看護学研究科10周年記念式典及び祝賀会	4月～10月 日本国際博覧会(大阪関西万博) 10月 ノーベル生理学・医学賞を坂口志文氏、化学賞を北川進氏が受賞

1 学部開設の経緯と準備

看護学部開設について詳しく記された記録として、看護研究雑誌第1巻に掲載された論文「大いなる希望」を、著者のご承諾を得て再掲します。

田中克子、林 優子(2011)：大いなる希望：大阪医科大学看護学部発展に向けて，大阪医科大学看護研究雑誌，1，81-87.

大いなる希望：大阪医科大学看護学部発展に向けて

Considerable Hope; Toward Development of The Osaka Medical College Faculty of Nursing

田中 克子，林 優子
Tanaka Katsuko, Hayashi Yuko

キーワード：看護学教育，看護学教育カリキュラム，看護学教育の発展

Key words：nursing education, nursing curriculum, development of nursing education

1. 看護学部開設の経緯

本学に看護基礎教育を大学教育として設立する構想は10年に及ぶ。しかし、夢がかなうまでの道のりは必ずしも順調ではなかった。当初、厳しい財政状況の中で本学、関西大学と大阪薬科大学が共同学部を設置し、そこに看護学科を置く構想をたて、2008年1月9日付で締結した「共同学部設置に関する協定書」に基づいて、3大学共同学部設置協議会を設け、協議を行ってきた。しかし、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が公布（平成21年3月1日から施行）され、更に同省令の内容と大阪医科大学が構想していた計画との間に懸隔が生じたため、構想内容を大幅に見直すこととなり、看護学部看護学科の単独設置に変更した。学校法人大阪医科大学新学部設置準備委員会規程に沿って、設置準備委員会と委員会内教学部会と事務部会を組織し、設置準備に当たり、設置準備室には特別職務担当教員として採用を決め、平成21年4月1日付で2名の教員が着任した。それに伴い、準備室長を配置し、通称を「看護学部設置準備室」とした。

着任して早々の最初の4月7日の医学教育課

からの指導で教育内容に関して準備が遅れているとの指摘をうけ、設置準備室一同真っ青になった。申請書提出期限は昨年より1カ月早まり6月であったのに、カリキュラム対比表は未完成であり、実習の展開も白紙の状態であった。申請書提出までの作業スケジュールを設置準備室で計画したが、実習の展開に関して、保健師受験資格取得に関する実習と助産師受験資格に関する実習については、実習先として事業所、助産院の確保がさらに必要であった。保健師受験資格の実習は特に厳しく、大阪府庁からは、保健師養成にかかる実習生473人（平成21年）が1,060人（平成25年）と急増するため実習先の確保ができないという理由から、保健師実習に関して選択制導入の意見が出された。文部科学省の指導もあり統合カリキュラムで申請を予定していたので、医学部公衆衛生学教室のバックアップを得、かなり無理を承知で事業所での実習を取り入れるため各事業所に向いて実習を依頼した。

看護学教育における実習場の確保は、教育の質を確保する意味でも非常に重要な課題であることは今さら言うまでもない。附属病院をもつ

1 学部開設の経緯と準備

本学においては実習場の確保の面では、恵まれているが、保健師教育、助産師教育を行うとすれば、看護系大学が急増している現在、実習場の確保はたやすくはない。さらに、看護学部の教育カリキュラムに応じた実習場の確保となると厳しいというのが実情である。

文部科学省の折衝では、現存する看護専門学校を閉じ、大学教育である看護学部を開設することに関して、その理由を何度も問い返され、本学が看護学部を開設することの設置趣旨を看護系教員自身が自らの言葉で明確に述べることを求められた。そのことは、看護学部を開設するための準備として、大学の理念、カリキュラム、それに伴う設備・資金面の準備、教員配置とすべて一貫していることを問われていることになる。医学教育課からは、歴史ある医科大学が看護学部を設置するので、その特徴を前面に出すようにという指導を何度も受けた。

看護学部を開設する設置趣旨に関して、準備室として一致した見解を構築するために、膨大な時間を費やして話し合いを重ねた。並行して本学看護学部の特徴を明らかにするため、大阪医科大学の歴史に関する資料をできるだけ収集し、医学部の先生方とも意見交換を重ねた。さらに、看護学部開設経験者から準備に関する知見を得るため、他の大学に出かけて設置のための情報収集を行った。こうした毎日の中で、文部科学省から問われている「本学においてなぜ看護学部開設が必要なのか」は、大阪医科大学としてはどうなのかということの説明を明確に作れということである。それが、文部科学省の問う看護学部開設準備性である。その説明は、日々の書籍・物品の準備、実習場の確保と交渉、看護学部開設にむけた各種委員会活動を通じて、準備室で推敲し作成できたと考える。それと並行して、看護学部の将来のビジョンを描くために、時間をやりくりして聖路加国際病院と京都大学付属病院を見学し、訪日していたアメリカ合衆国で活躍しているナースプラクティ

シヨナー、クリニカルナーススペシャリストの講演を聴講に行った。設置準備室の仕事は山積みであったが、本学の看護学部でどのような人材を育成したいかを考えた時、それは世界を視野に入れた大きな視点でなければ意味はないと考え、当然のことながら高度専門職者育成のための修士・博士課程の開設も視野に入れて準備を進めていた。さらに、看護学部広報・入試委員会を立ち上げ広報・入試の具体的準備を進める中で、本学の特徴を示すコンセプトは何かと考えた時に生まれたのが「医看融合教育」である。この言葉はチーム医療をさらに進めた教育を本学は目指したいという設置準備室の夢でもあった。開設準備にあたっては、会議が連日目白押しであった。例えば、教育内容に関する準備を新学部設置準備委員会教学部会、各種委員会及び規定整備新学期準備等を新学部設置準備室委員会、2年間同じ学舎で共同生活を送るための調整機関として看護専門学校・看護学部連絡会、看護学部研究棟新築に向けて建築会社との建築打ち合わせ会、事務体制が円滑に進むように看護学部事務体制打ち合わせ会、ホームページ委員会、新学部の電話・LANの情報システムに関する打ち合わせ会があげられる。このように、看護学部開設準備に忙殺された毎日ではあったが、準備室では、いつも「Think Globally, Act Locally」を合言葉としていた。一方、医学部単科大学であった80有余年にわたる長い歴史の中で、看護学部を開設することについて真の意味で学内の賛同を得なければならない。そのために、なぜ必要なのかに関して、準備室が、大阪医科大学の関係各位にきちんと説明しなければならない。その課題を達成するための方法の一つとして、平成21年4月に看護専門学校の教員を対象に、平成22年2月に附属病院看護部の看護部及び師長を対象に開設の意義と目的の説明会、12月に教職員対象に看護学設置準備室主催の設置認可記念講演を施行した。

表2 授業科目一覧 (2010.10.1 現在)

		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	
基礎科目	人間理解	○心理学2	△セクシュアリティと看護1	△教育学2		
		△生物学2				
		△化学2				
		△物理学1				
		△くらしの中の倫理と法律1				
	社会理解	△大阪を学ぶ1				
		△哲学1				
		△くらしと文学2				
		△*医学概論2				
		○キャリアマネージメント1	△くらしと安全・危機管理2			
異文化理解	○*健康科学概論2					
	○情報リテラシー1					
	○統計学2					
	△くらしと社会・環境2					
	△くらしと経済2					
専門基礎科目	人間理解	○英語Ⅰ1	○英語Ⅲ1			
		○英語Ⅱ1	○英語Ⅳ1			
		△国際言語文化2				
		○人間関係論1	○からだとくすりの働き2	△食生活論1	△遺伝とカウンセリング1	
		○からだの仕組みと働きⅠ2	○病気の成り立ち2			
	社会理解	○感染と免疫1	○病気の診断2			
		○からだと栄養2	○病気の治療2			
		○からだの仕組みと働きⅡ2				
		○こころの仕組みと働き1				
		○フィジカルエグザミネーション1				
異文化理解	○保健医療福祉概論2	○公衆衛生学・疫学2	○医療倫理学1	○リスクマネージメント1		
			△地域救命救急1	△医療をとりまく社会環境1		
			△ヘルスプロモーション論1			
			○医療英語1	○原著講読1		
				○看護管理1		
専門科目	看護の基礎	○看護学概論2	○看護アセスメント1		○看護教育1	
		○日常生活援助技術3	○治療過程に伴う援助技術2			
		○基礎看護学実習Ⅰ1	○基礎看護学実習Ⅱ2			
	生活支援	○老年看護学概論2	○老年看護学概論2	○老年看護学援助方法1		
		○老年看護学地域実習1	○老年看護学実習2	○老年看護学実習2		
		○老年看護学援助論1	○慢性看護学援助論1	○慢性看護学援助方法1		
		○母性看護学概論2	○母性看護学援助論1	○母性看護学援助方法1		
		○母性看護学実習2	○成人看護学概論2	○急性期成人看護学援助方法1		
	療養支援	○急性期成人看護学援助論1	○急性期成人看護学実習2	○急性期成人看護学実習2		
		○慢性期成人看護学援助論1	○慢性期成人看護学実習2	○慢性期成人看護学実習2		
○慢性期成人看護学援助方法1		○小児看護学援助方法1	○小児看護学援助方法1			
○小児看護学概論2		○小児看護学実習2	○小児看護学実習2			
○小児看護学援助論1		○精神看護学援助方法1	○精神看護学援助方法1			
地域支援	○精神看護学概論2	○精神看護学実習2	○精神看護学実習2			
	○精神看護学援助論1	○在宅看護学援助方法1	○在宅看護学援助方法1	○地域看護学実習Ⅱ1		
	○在宅看護学概論2	○在宅看護学実習2	○在宅看護学実習2			
	○在宅看護学援助論1	○地域看護学援助方法2	○地域看護学援助方法2			
	○地域看護学概論2	○地域看護管理論2	○地域看護管理論2			
統合	○地域看護学援助論2	○地域看護学実習Ⅰ2	○家族看護学2	○看護研究法1		
		○家族看護学2	○チーム医療論1	○総合実習5		
		○在宅看護学援助論2	○看護実践と理論の統合2	○卒業演習4		
		○在宅看護学実習2	△災害看護論1	△異文化看護入門2		
		○在宅看護学実習2	○助産学概論1	○助産診断・技術学Ⅱ2		
助産師科目		○助産学実習1	○助産診断・技術学Ⅰ1	○助産管理1		
				○助産学実習7		

(注)○必須科目、△選択科目、◎自由科目、数字は単位数を示す。*は共同開講科目を示す。

準備室の雰囲気は経験したものでなければ分からないとは聞いていたが、看護学部開設にあたっての準備には熱情ではなく使命感がなければやり遂げることはできないことを実感した。準備室のメンバーのもつ何が何でもやり遂げるぞという強い意思が大きな波となって周囲を巻き込み、看護学部開設に向けて大学としての大きな力を生み出せるものだと考える。文部科学

省から、11月に45校の申請認可のうち本学のみ「留意事項なし」と設置認可の申請の答申がでた時の喜びはたとえようがない。これで着任予定の教員や今まで準備されるにあたって尽力された大阪医科大学の関係各位に顔向けできると準備室の看護系教員2人で手を取り合った。合計3回の入学試験では事務局、就任予定教員、担当理事以外に医学部から延べ12人、看

1 学部開設の経緯と準備

護専門学校から延べ6人という多くの皆様のご協力を頂き、第一期生88名を決定することができた。準備室は看護学部の開設にむけて大きな夢と希望をもっていた。

2. 教育課程編成の経緯

本学の教育理念から、優れた看護実践能力を備えた看護職者を育成することを目指す教育カリキュラムとした。したがって、看護師課程と保健師課程の統合カリキュラムとして構成し、さらに助産師（選択制5名以内）課程を自由科目として配置した。

教育目的、目標と並行し、教育課程は、20年度中に教授就任予定者を中心に4回の「看護教育高度化 関する研究会」で繰り返し検討を重ねた。「基礎科目」、「専門基礎科目」、「専門科目」に区分し、基礎科目と専門基礎科目を「人間理解」「社会理解」「異文化理解」に分類し、専門科目を「看護の基盤」「生活支援」「療養支援」「地域支援」「統合」に分類して配置した。豊かな人間性や地域貢献能力を育成するために、基礎科目と専門基礎科目では看護の対象となる人間そのものへの理解を深める「人間理解」、その人間の生活の場である社会への理解を深めるための「社会理解」、地元地域だけでなく国際的に如何なる地域においても活動できる受容性を育むための「異文化理解」に分けて配置した。

「基礎科目」「専門基礎科目」においては医学部、附属病院と連携し、現在臨床の第一線で活躍している専門家を講師として配置し、看護実践育成の観点からできる限り教育の質を担保するように努めた。このように看護学部の教育において医学部の協力を得る過程において、重要な役割をしたのが学長主導で設置された医学部・看護学部調整委員会であった。この委員会は竹中学長初め、教育機構長の芝山教授、窪田教授、佐浦教授、開設準備担当理事でもある佐野教授、開設準備室の看護系教員2名で構成さ

れ、看護学部開設に伴い大阪医科大学の学則、各種規定の改定等、看護学部開設に向けていわゆる心臓部の役割を担っていたといってもよい。したがって、医学部・看護学部調整委員会で看護学部の教育目的、教育目標及びカリキュラムについて何度も話し合いを重ね、最終的には医学部教授会の承認を得ることができ、ようやく科目担当者を決定することができた。専門科目は、その基礎となる「看護の基盤」を配置し、その基盤を応用するための「生活支援」「療養支援」「地域支援」、さらにそれらの学びをまとめるための「統合」を配置し、病める人の生活面に配慮できる豊かな人間性と学生が生涯を通して自ら学ぶ研究的態度を身に付けることができるように構成した。

さらに、第1年次に開講する基礎科目必修の「健康科学概論」、基礎科目選択科目である「医学概論」は大阪医科大学、関西大学、大阪薬科大学の3大学共同開講科目として配置し、現在e-learningを実施している。さらに、平成23年度からは共同開講科目である大阪薬科大学及び関西大学開講の「バイオメカニクス」「社会環境適応材料」「福祉工学概論」「生薬学」「応用放射化学」「機能形態学」等を選択科目として配置する予定である。

本学の教育編成では、基礎科目、専門基礎科目における選択科目は決して多くはない。したがって、他大学との共同開講科目、医学部との共学を行うことによって、幅広い教養と倫理観に基づく対人関係形成能力を備えた人間性豊かな人材を育成することを目指していきたい。

教育目標は以下の通りである。

- 1) 豊かな人間性と倫理観を身につけた人間性を養う。
- 2) 健康の維持増進、高度医療から在宅療養まで幅広く、さまざまな人々を対象にさまざまな健康レベルに創造的に対応するための看護実践能力を養う。
- 3) 地域社会に貢献するために、保健・医療・

福祉チームの多職種と連携・協働し、自ら看護の課題を発見し、解決できる能力を養う。

3. 大阪医科大学看護学部の特徴

本学の看護学部は、医学部を設置する大学等における看護系学部の設置としては、全国80大学中72番目で、看護系大学としては180番以降であり、近年の看護系大学開学ラッシュから見ると、どちらかという遅くに開学した大学である。しかし、医学部を設置する全国80大学中、看護学部として設置している大学は本学を加えて10校である。

医学部単科大学において、看護学が一つの学問体系として教育・研究に活かされるような形態として、看護学部としての開学を英断したことは、大阪医科大学の看護学への期待の表れといつてよい。

大阪医科大学看護学部の特徴は、80年以上優れた医師と看護師を多く輩出してきた大学として培ってきた教育基盤と、さらに特定機能病院としての高度な専門性と中核市の市民病院的な一般性を兼ね備えている附属病院を主たる実習施設として活用できることである。しかも、医学部、附属病院、看護学部が同一キャンパスにあることは、極めて恵まれた教育環境といえよう。また、日常生活の中で将来のモデルとなる医療職者、多職種の人と身近に接することができる。さらに、総合大学である関西大学、チーム医療の重要なメンバーである薬剤師を養成している大阪薬科大学と授業で共同参画できる機会をもつことは、学生の交友範囲を広げ、広い知識を得ることが期待される。何よりも、学生時代から治療に責任をもつ医師と机を並べて学び、クラブ活動をともしする経験は、対象者中心の医療を実現するために大きな推進力になるに違いないと考える。医師と看護職者が専門職としてのアイデンティティを保ちながら、お互いを尊重しつつ異なる領域の課題に対する

取り組みを学び、理解することによって、いろいろな視野・視点から科学的にとらえることができる力を養うことができる。それが結果として、良質で創造的な医療を対象者に提供できる、これはまさしく本学が目指す医療人育成であると考え、現在も医学部と協働してよりよい教育課程作成のために取り組んでいる。

4. 本学流の看護学教育の構築に向けて

米国の社会学者であったエスター・ブラウンは、「『ブラウンレポート=これからの看護』, (1948)」のなかで、専門職業を目指す看護師教育は大学教育で行うべきであると高度の教育機関の必要性を述べた。その結果、米国では大学及び大学院での看護学教育が着実に進められてきた。我が国は、平成5年に、高度化・多様化する国民の保健医療サービスへの需要に対応するための「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が制定されて以降、看護教育の大学化が加速的に進んできた。

諸外国を問わず、我が国においても、看護の役割や看護学教育は、常に社会や医療の変化の中で、社会的要請を受けながら時代につれて変遷してきた。今日、看護を取り巻く環境は、急速な少子高齢化、医療の高度化・複雑化、医療の専門分化により大きな変貌を遂げている。さらに、安全と安心の医療の保証、疾患や障がいなどで病む人が納得のいく医療、健康増進や予防推進など医療に対する国民のニーズがますます高まっている。そのような環境の変化や国民のニーズを的確に把握し、リーダーシップを発揮して、状況に適切に対応できる看護職の資質向上が求められている。その結果が看護学教育の大学化に向けた動きであった。

ここで、大阪医科大学の歴史を紐解いてみる。本学は看護教育を4年制の大学教育として考えていた時代があった。昭和23年頃のことである。初代学長であった松本信一教授が書かれた「生物学部構想の大学概略」が本学に残さ

1 学部開設の経緯と準備

れている。その貴重な資料に、甲種看護師（今で言う正看護師）と保健師の養成機関として4年制大学構想（保健学科看護学講座）の記述がある。当時は、戦後GHQが日本の看護教育改革に力を注いだ時代でもあり、恐らくその影響があったのではないかと推察する。しかし、初代学長が准看護師学校や3年課程の看護師学校が主流であった戦後間もない時期に、看護教育を4年制の大学教育として思案していたことは、日本の医療や大阪医科大学の将来を見据えた発想であり、本学の看護教員にとって、この歴史的事実は誇りともいえよう。

それから、60年が経過し、本学に念願の看護学部が開設された。上述したように看護学教育の4年制大学の増加は顕著であり、看護職の役割も裁量権拡大を求めて動き始めている。本年度改正された保健師助産師看護師法には、「看護師国家試験の受験資格を有する者として文部科学省大臣の指定した大学（短期大学を除く）において、看護師になるのに必要な学科を修めて卒業した者」が追加された（平成22年4月1日）。さらに平成24年度からは学士課程教育の中で行われてきた看護師と保健師の統合教育から、保健師教育が助産師教育と同様、選択制へと改正されることになった。

看護学教育について述べる前に、大学教育について少し整理しておきたい。学校教育法第八十三条に、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とある。文部科学省によれば、学士課程教育では、幅広い教養を身につけ、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材である「自立した21世紀型市民」を幅広く育成することが極めて重要であるとされている（中央教育審議会答申、2008）。そして、大学教育では、「何を教えるか」ではなく「何ができるように

なるか」に力点がおかれ、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことが重視されつつある。すなわち、一方的に知識・技能を教え込むのではなく、豊かな人間性や課題探求能力や問題解決能力等の育成に配慮した教育課程の充実であり、各専攻分野を通じて培うべき能力、すなわち学士力のある人材育成である。文科省が目指す学士力のある人材育成については、前述した本学部の教育目的・目標に明確に打ち出している。さらに重要視されているのは大学の独自性である。本学流の看護学教育とは何かを明確にしなければならない。本学における看護学教育の構想についてはまだまだ不十分であるが、看護学部設置準備室時代に、そして今春4月以降、本学部将来構想検討委員会で検討してきたことと、学部長の私見を交えての大枠を述べてみたいと思う。

本学部が目指す学士課程教育は、「看護のアイデンティティ教育」と「医看融合教育」である。「医看融合教育」については医学部との協力関係なしには実現できないと考えている。その教育の構想については医学部と看護学部が共に検討する段階に来たところである。

一つ目の「看護のアイデンティティ教育」は、学生が実践科学としての看護学の基礎を学び、学問的に裏打ちされた看護実践能力を培うための教育である。看護は、人間の健康づくりから予防、治療、回復、リハビリテーション、死に至るまで、様々な健康レベルの人たちに対する実践活動である。4年間の教育では、幅広い視野で柔軟にものごとを考える力、看護の立場で患者を観る力、看護の立場で倫理的に判断しようとする力、看護の立場で援助する力など、看護のアイデンティティを身につける教育の展開を目指すものである。

二つ目の「医看融合教育」は、医療人マインドやチーム医療の基盤を学び、患者中心の医療の実践を展開していく専門職種間の連携・協働

を培うための教育である。大学病院という臨床の場で医学部と看護学部の学生が共に実践を通して、各々の専門的立場で発言できる言語能力、多くの情報を編集する能力、患者を中心に問題解決する能力、コミュニケーションをとりながらチームを調整する能力など、医療人としての複合的な能力を身につける教育の展開を期待するものである。

次に「大学院教育」をとりあげておきたい。

学校教育法第九十九条、「大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする」とある。本学の建学の精神は、国内外で活躍できる良き医療人を育成することである。したがって、大学院は、看護実践の場で活躍する高度専門職業

人を養成するための専門看護師（certified nurse specialist）のコースと、将来の教育研究者を養成するためのコース（博士前期・後期課程）を持つ大学院設置を考えている。さらに、大学病院との連携・協働、在宅支援や地域の健康づくりなども視野に入れた地域との連携・協働を通して、看護実践活動や研究活動の場が広がるように教育研究基盤を構築していきたいと考えている。

文献

- Brown, E, L 著（1948）/小林富美栄（1996）：
ブラウンレポート＝これからの看護，日本看護協会出版会，東京。
中央教育審議会：学士課程の再構築に向けて（答申）（2008），8，文部科学省。

2 大学院看護学研究科設置の経緯と準備

看護系大学院研究科の設置は、看護学部の設置当初から視野に入れられていました。2009年8月に発行された大阪医科大学学報（第81号）の「看護学部設置にむけて」という特集記事には、看護学部設置準備室に着任した林優子先生と田中克子先生の「入職のご挨拶」が含まれていますが、その中で林先生はすでに、近い将来に「修士や博士の設置を目指して」（p.10）ゆくことを明記されています。また翌年発行の「学校法人大阪医科大学 事業報告書2009/事業計画書2010」にも、看護学部開設に関連する当面の課題として、「今後は看護学部に大学院設置が求められる」（p.41）という竹中洋学長の言葉が記されています。大学院の設置は、看護学教育における大学院の必要性の高まりに応えるためのものであるとともに、大学としての質を保証し、知の拠点としての研究環境の整備にもつなげることを目指すものでした。

看護学部が開設された2010年、大阪医科大学大学協議会規程第9条に基づいて「新研究科設置検討委員会」が設置されました。この委員会は、看護学、助産学、社会医学等を含めた医療系大学院博士前期課程と看護系博士後期課程の設置について検討するものでした。委員会は、2010年12月13日の第1回委員会から2011年9月16日の第5回委員会までの検討を経て、看護学部教授会、大学院医学研究科教授会の意見を踏まえた上で最終答申をまとめ、学長に提出しています。この答申では看護学研究科について、その設置の必要性を述べるとともに、設置案として、博士前期課

程（当時の案では定員6名）と博士後期課程（定員3名）を設け、博士前期課程には専門看護師（Certified Nurse Specialist: CNS）養成コースと教育研究コースを置くことなどが提言されています。これを受けて、2012年2月14日の理事会で大学院新研究科設置について決議・承認がなされ、2014年4月の開設を予定して設置準備を進めることになりました。

2012年5月25日には新研究科設置準備委員会が設置されました。またその下部組織として設置認可申請部会と寄付行為変更申請部会が置かれました。委員会と設置認可申請部会のメンバーは次の通りです（2012年度看護学部年報より）。



看護学研究科開設記念式典（来賓者一同）



看護学研究科開設設置記念式典（教員一同）

【委員会委員】

委員長：佐野理事

委員：竹中学長、米田大学院委員会委員長、
林看護学部長、鈴木図書館長、黒岩病院
院長、磯田事務局長、大槻学務部長、
門田総務部長、中西財務部長代理、小
野看護部長

【設置認可申請部会】

統括責任者（室長）：竹中学長

室長補佐： 林看護学部長、米田大学
院委員会委員長

事務室： 出坂部長代理（学務部）、
前田課長補佐（学務部大
学院課）、有友課長補佐
（看護学部事務室）

ワーキングメンバー（看護学研究科）：
林 優子、泊 祐子、
荒木孝治、佐々木綾子
前田将昭（学務部大学院
課）

文部科学省に提出する研究科設置申請書類には、設置の趣旨、教育課程等の概要、授業科目の概要、シラバス（授業計画）、教員個人調書等が含まれます。委員会とWGは、これらの書類作成に向けて精力的に準備を進め、2012年度にWG 20回、委員会7回を開催しています。また文科省への事前相談は、佐野理事、林学部長、泊教授、前田課長補佐が出席して3回行われました。2013年3月31日の理事会で文科省申請についての議決・承認が得られ、看護学部教授会および医学研究科教授会でも承認が得られました。

予定されていた通り、2013年5月に設置申請を完了し、同年10月には文科省の設置認可が下りました（2014年4月開設）。修士、博士課程の同時開設は、私立看護系大学では初めての快挙であり、国公立大学を含めても2校目の

ことでした。博士前期課程は定員8名、博士後期課程は定員3名で、博士前期課程の高度実践コースには、慢性看護学、精神看護学、母性看護学、小児看護学の4領域が設けられました。



看護学部設置記念式典a



看護学部設置記念式典b



大阪医科大学グリー部

3 看護学部・看護学研究科のあゆみ



看護学部15周年・看護学研究科10周年によせて

初代学部長・研究科長
大阪医科薬科大学 名誉教授

林 優子

看護学部設置準備室長 2009年4月～2010年3月
看護学部長 2010年4月～2017年3月
看護学研究科長 2014年4月～2017年3月

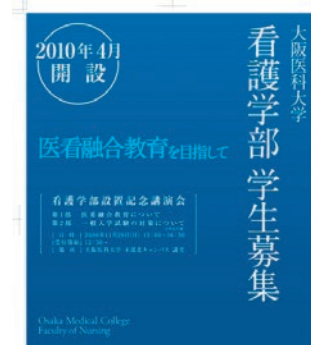
大阪医科薬科大学看護学部設立15周年ならびに大学院看護学研究科設立10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。看護学部研究棟建設後に植樹した研究棟玄関前の3本のモモの木の成長とともに、設立当初の看護学部・看護学研究科の教育理念は、時代の変化とともに新たなかたちで息づいていることを実感しております。

本学部設置前の看護系大学は180大学でありました。2025年現在では、289大学（省庁大学校を含む）307課程となり、この15年間に1.6倍に増加しています。このように看護界における大学卒の割合は飛躍的に伸びていることがわかります。大学院も修士課程219大学、博士課程135大学となっています。

新学部設置準備委員会（委員長 佐野浩一常務理事〔現 学校法人大阪医科薬科大学理事長・大阪医科薬科大学学長〕）の規程に沿って設置された看護学部設置準備室（室長 林 優子、室長補佐 田中克子）の当時を振り返りますと、設立準備に奔走した日々のことが今も鮮明に思い出されます。学部設置にあたり、どのような学部にするのか、学士力のある人材育成のための大学教育とは何か、どのような教育理念と特徴ある看護学教育を打ち出すかについて話し合いが続きました。文部科学省からは「大阪医科大学においてなぜ看護学部開設が必要なのか」を明確にするようにとの指導を受け、医

学教育課からは「歴史ある医科大学が看護学部を設置するので、その特徴を前面に出すように」との指導を受けていました。

そこで、大阪医科大学の歴史を紐解くうちに、大正末期にアジアやブラジルへの海外移民政策が推進された社会背景の中で、1927年に国内のみならず海外移民団をも視野に入れた臨床に役立つ実用医を育成するために大阪高等医学専門学校が開学したことや、卒業生を中南米の地に送り出した当時の状況を知りました。そして、「学を離れて医はない」を建学の精神として「国内外問わず如何なる地域においても活躍できる医療従事者を養成する」を目標に、医療人養成の大学を実施してきたことがわかりました。



そのことから、医科大学の歴史を継承しつつ、未来につなぐ看護学部を創るという方向性が明確になりました。本学の建学の精神のもと、「いつでもどこで

も誰に対してでも最善の看護を提供する看護実践者を育成する」という教育方針と、助産師の選択制を含む看護師・保健師の統合教育で進めることを医学教育課に報告しました。保健師・

助産師の実習場は医学部の協力を得て確保することができました。

こうして、新学部が目指す学士課程教育を、学問的に裏打ちされた看護実践能力を培うための「看護のアイデンティティ教育」と、医学部の存在を強みとした「医看融合教育」を2本柱とし、これをキャッチフレーズに広報活動を行いました。(ちなみに、医看融合教育は、現在の多職種連携教育へと引き継がれています)

受験生募集のために近畿2府4県の高校訪問やガイダンスの実施で新設学部PRを行うなどして迎えた入試、その入試を無事に終えて一期生が入学したときは、安堵と緊張と期待が入り混じっていたように思います。学生たちは生き生きとして希望に満ちていました。新入生学外合宿では、「看護ってどんなしごと?」(メディカ出版)を新入生全員に配布し、看護について話し合ったことも懐かしい思い出です。看護学部開設後は、教職員と学生の力が一つになり、看護学部の教育理念が学部の中で徐々に確かな形になっていきました。

1929年に設立された大阪高等医学専門学校附属看護婦学校、その後の大阪医科大学附属看護専門学校で看護教育を受けた多くの先輩看護師たちの看護への情熱と熱意は、看護学部へと継承されています。

その一方で、2012年5月に新研究科設置準備委員会(委員長 佐野浩一 常務理事)が設置され、竹中洋学長と4名の教授(林 優子、泊祐子、荒木孝治、佐々木綾子)を中心に新研究科設置の準備が進められました。翌年、博士前期・後期課程同時設置の文科省認可を得て、2014年に高度専門職者と教育研究者を育成する大学院看護学研究科が開設されました。

社会は近年、AIやグローバル化の進展によって、価値観が多様化し、知識や情報が増え、何もかもがスピード化しています。学びの



2010年4月15日発行
林優子／田中克子監修
中国語翻訳：カルデナス暁東
英語翻訳：野村祐香クリスティジョンソン

あり方も多様になりました。しかし、どんな時代になっても変わらないのは、「人間としての思いやり、人間としての尊厳」です。絶え間なく変化し続ける社会の中で、本学部・研究科がこれまでの歩みを礎に、学部・研究科の根底となる哲学を基盤として、未来社会へと向かっていく姿を想像しています。

学部設立の実現には多くの方々のお力添えがありました。学校法人大阪医科大学理事長、常務理事、学長、広報・入試センター長、看護部長、看護専門学校長をはじめとする医学部、大学病院看護部、看護専門学校、広報・入試センター、事務部の多くの方々に改めて感謝申し上げます。また、当時の佐野浩一常務理事から看護学部設置の相談を受けた私の恩師故小島操子先生(聖隷クリストファー大学学長)のお声かけがあって、私は設置準備室に着任することができました。このような不思議なご縁に支えられてきました。私は、今なお大阪医科薬科大学看護学部と大学院看護学研究科を心から大切に思う者として、学部・研究科設置から今日に至るまでの歩みを支えてくださいましたすべての皆様に深く感謝申し上げますとともに、開設記念日が未来に向けた創造的な歩みの第一歩となりますことを、心より願っています。



医看融合教育の始まりと思い出

大阪医科薬科大学 名誉教授

道重 文子

看護学部長・研究科長 2017年4月～2019年5月

看護学部開学15周年と看護学研究科開学10周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私は、開学時の2010（平成22）年4月から2020（令和2）年の定年退職までの10年間に在職し、開学から4年間の教育センター長を務めました。

本学は、大阪医科大学附属看護専門学校から発展的に看護学部が開設されましたが、専門学校から看護学部にて在職した教員は助教1名のみでした。各領域の教授・准教授は他大学での豊富な教育経験のある方が新しい教育構想を持ち就任されました。一方、前任校での各々の経験に基づき、本学独自の教育を構築していくためには合意が必要でした。教育センターが最初に取り組んだ検討課題のうち、特に、客観的臨床能力試験（以下、OSCE）と医看融合教育については印象深く思い出されます。

開学時のカリキュラムでは、総合実習は5単位であり内4単位は各領域が独自の実習内容を展開し、1単位は4年次に総合評価としてOSCEを実施するという構想でした。実施のための準備を進め各領域に症例のシナリオ作成を依頼するところまで構築されていました。しかし、全体での実施は困難との結論が出され、各領域各科目においてそれぞれ独自に臨床能力を高めるための教育方法、評価方法を用いて実施することになりました。

OSCEに関する検討を開始したことによって、本学における看護実践能力と卒業時到達目

標および看護師教育の技術項目と卒業時の到達度に関して全領域で協議することの必要性が増し、新たな委員会「看護学部教育のあり方委員会」が組織されました。

開学して間もない中で、全員が保健師国家試験受験資格を得ることができた統合カリキュラムが選択制となり、新たなカリキュラムの構築も必要となりました。1期生の総合実習の準備中にもかかわらず、総合実習5単位は統合実習2単位に変更することになり、その後、在職中に看護学部全体で行うOSCEは実施されることができなかったことを残念に思っています。看護教育の成果を可視化することが求められ、様々な評価方法が紹介されています。本学の教育成果を示す特色ある教育方法が検討されることを期待しています。

「医看融合教育」は、本学部の開学時の学生募集のキャッチフレーズでした。入学試験の面接時に入学動機を尋ねると、多くの学生が「医看融合教育が実施されているから」と答えていました。しかし、チーム医療の推進を目指しているにもかかわらず、カリキュラム内で医学部と合同で展開されるのは選択科目の「医学概論」のみでした。

2011（平成23）年、当時の第九代竹中学長、医学教育機構長の花房教授、医学教育センター長米田教授、林看護学部長、看護学部教育センター長道重、小林教授により、医看融合教育についての協議が始まりました。医看融合教育とは、「医学部と看護学部の各専門分野の区別を

超えた横断型教育であり、両学部の学生が同じ目線で対象理解のプロセスを踏む教育をいう」と定義し、「同じ目線で患者（利用者）理解のプロセスを踏むことによって、患者（利用者）中心の全人的・包括的医療を提供できる医療者を育成する）ことを目的とし医学部との合意を得ました。

実施可能な事業として、医看融合教育ゼミ I、新入生合同宿泊研修、医学部5年生と看護学部3年生の臨床実習中の合同症例カンファレンスの実施について検討しました。

医看融合ゼミ I は、両学部1年生を対象に、2012（平成24）年6月13日に学長の特別講「社会に期待される医療人」とグループワークが実施されました。

新入生宿泊研修は、2013（平成25）年に始まり、その後は、薬科大学学生の参加も加わったことや兵庫県からの補助もあり、グランドニッコー淡路で実施されるようになりました。

臨床実習中の合同症例カンファレンスの実施は、実習ローテーションの違いから、精神科と産婦人科であれば実施可能であり、看護学部1期生が3年生になった2012年9月から実施するようになりました。

これらの試験的医看融合の授業の成果も踏まえて、2013（平成25）年から医学部と看護学部の医看融合教育に関する委員会が合同会議を開催し、2014年から科目名「医看融合：医療人マインドを学ぶ」として位置づけられました。

医学部・薬学部・看護学部の学生が、学生のうちから「多職種連携」を学ぶ体制の礎を築くことができたことは、大変感慨深く思います。

新しくできた看護学部で、創設期に様々な取り組みができました。委員会だけでなく教員の皆様や事務の方のご支援に対して深く感謝申し上げます。今後の新たな取り組みと益々の発展を期待しています。

3 看護学部・看護学研究科のあゆみ



大阪医科薬科大学看護学部15周年・ 看護学研究科10周年に寄せて

大阪医科薬科大学 名誉教授

赤澤 千春

看護学部長・研究科長 2019年6月～2024年3月

大阪医科薬科大学看護学部開設15周年、看護学研究科開設10周年おめでとうございます。

看護学部準備室に初代学部長の林 優子先生のところに共同研究でお伺いした時に、「来年の開学部に向けて本当に大変なの」とお話しされていて、田中克子先生と二人で書類作成に取り組んでおられました。「えっ。たった二人で」と驚いたものですが、文部科学省の審査では備考のコメントゼロで認可されたとお聞きし、お二人の情熱と文章作成能力の高さに頭が下がる思いでした。それから4年、看護学研究科を修士と博士を同時に開設すると聞き、そこでも今までそんな大学なかったのではと驚きでしたが、そこもすんなりと開設となり、大阪医科薬大学（当時）の底力を痛感いたしました。

私は看護学研究科開設時から令和7年3月までお世話になりました。その間2019年から2023年までの5年間は看護学部長・看護学研究科長として勤務させていただきました。看護学部長を拝命した時は大学機関別認証評価に向けて医学部と合同のワーキングを立ち上げ作業を進めていました。看護学部は開設時から毎年度末に1年間の報告として年報を作成しておりましたので、思いのほかスムーズに進めることができていたと思います。認証評価の結果としては看護学研究科の博士後期課程の定員超過についての指摘があり、そ

の後は大学院生の在籍人数が超過することがないように取り組んでまいりました。

また、同じころに大阪薬科大学との大学統合に向けての準備が始まり、各ワーキングに分かれて進めていきました。この頃は大学機関別認証評価と重なっていたこともあり、毎週何らかの会議が開かれておりました。2021年には看護学教育評価を受審することとなりました。これも2年前から準備を整えておりましたので、特に問題なく受審することができました。

2019年12月に中国から始まった新型コロナウイルスは年を開けた1月頃になってもなかなか終息する気配を見せず、全世界で猛威を振るい始め、3月には新年度に向けてどうするかを緊急では会議を開くことが多くなりました。卒業生は謝恩会が中止となり、新入生の入学式は



大学機関別認証評価の時の写真

取りやめとなりました。ここから新入生、在学生に対して対面とオンライン授業のための時間割の作成や配布物の郵送など、教職員が一丸となって準備をしていきました。オンライン授業のためのZOOMなど初めて使用するデジタル技術に四苦八苦しながら学生のいない教室で授業をすることとなりました。新型コロナウイルス感染症は1年では終息せず、2023年まで続きました。年を経るごとに教職員も学生もだんだんと感染対策のための授業体制の急な変更にも素早く対応できるようになっていました。ただ、実習においては臨床実習が可能かどうか非常に難しい場面がありましたが、本学病院の多

大なる協力のもとほぼ全員臨床実習をすることができました。これは他の看護系大学の臨床実習の8割は学内実習・学内演習に振り替えで行う中、病院で臨床実習を認めてくださいました関係者の深く感謝する次第です。

これも看護学部と看護部との関係がうまくいっていることの象徴であると考えます。看護学開設以来、先生がたと看護部との様々な話し合いや研修、管理者の大学院入学などを通して培われてきた結果と思われます。今後もますます、地域に根差した看護の質向上に向けて看護学部・看護学研究科のご発展を祈念いたします。

第4章

教育・研究活動

15周年の節目にあたって：カリキュラムの変遷と展望

看護学教育センター長

まつぎ かずこ
真継 和子

1. カリキュラムとその改正の歩み

看護学部は2010年、「生命の尊厳と人権の尊重を基本に、人々の健康問題を創造的に解決するため、柔軟な思考力と幅広い知識と視野をもち、保健・医療・福祉を統合した看護実践能力を有する人材の育成」を目的に開設されました。以来、急速な社会の変化に対応し、専門知識と実践力を兼ね備えた看護職の育成を目標としてきました。

この15年間、看護を取り巻く環境はAI診断や遠隔医療、地域包括ケア、医療DX、感染症および災害対策などにより大きく変化し、看護職にはICT活用や地域連携能力が求められるようになりました。こうした変化に応じ、カリキュラムは教育理念を踏まえつつ柔軟に改正を重ねてきました。本稿では、開設以来の変遷と現行カリキュラムの特徴、今後の展望について述べます。

2. 初期カリキュラムの概要

医療の高度化や地域包括ケアの必要性が高まるなか、開設当初のカリキュラムは、幅広い教養と体系的な専門科目を重視し、理論と実践の統合を目指しました。そのため、初期カリキュラムでは共通教育科目を通じて柔軟な思考力と幅広い知識を身につけ、その上で専門科目群を体系的に配置し、臨床実践に直結する科目を必修とする構造が特徴でした。

看護学は、自然科学と人文・社会科学の重複領域にあることから、教養教育を専門職としての基盤として位置づけ、専門教育と連動させていました。これにより、看護専門職としての能力に加え、ICT活用力や倫理観を備え、社会と

協働できる「21世紀型市民」の育成を特色としていました。さらに、本学医学部が国際交流を積極的に推進していたことを背景に、本学部も国際的視野を育む教育を重視していました。

カリキュラムは、「基礎科目」「専門基礎科目」「専門科目」の3つの区分で構成され、基礎科目と専門基礎科目は「人間理解」「社会理解」「異文化理解」に分類、専門科目は「看護の基盤」「生活支援」「療養支援」「地域支援」「統合」に分類していました。基礎科目・専門科目では、看護の対象である人間への理解を深める「人間理解」、その人間の生活する社会への理解を促す「社会理解」、さらに国際的な活動に対応できる受容性を育む「異文化理解」を重視し、主として1年次に配置しました。特に、基礎科目の一部は専門科目の教員が担当し、基礎から専門まで一貫した教育を行う点に特色がありました。

専門科目では、看護実践の基本的知識・技術・態度を養う「看護の基盤」を第1・2年次に配置し、応用領域である「生活支援」「療養支援」「地域支援」を第2・3年次に配置しました。さらに、学びを統合・発展させる「統合」を第3・4年次に設け、助産師科目は自由科目として第3・4年次に配置していました。

外国語教育は英語に特化し、4年間を通じて必修科目として配置していました。第1・2年次で基礎力を養い、第3・4年次では医療の場や資料講読に対応する実践的英語力を育成しました。また、選択科目として「くらしと文学」「国際言語文化」「くらしと社会・環境」「くらしと経済」を開講し、教養の充実を図りました。さらに、医学部との合同授業を通じて多職

種連携・協働する力を養い、単位互換制度を活用して近隣大学の防災関連科目を履修可能とするなど、地域連携にも力を入れていました。

臨地実習と卒業演習では、本学大学病院を中心に地域での実習を行い、高度医療から在宅医療、保健まで総合的な教育を実施しました。第4年次には統合実習と卒業演習を行い、学生が自ら課題を設定し、4年間の学びを集大成するという内容でした。

開設当初のカリキュラムは、看護師国家試験、保健師国家試験、さらに助産師国家試験(5名程度)受験資格を付与する統合カリキュラムであり、幅広い資格取得を目指しながら、地域社会で活躍できる柔軟な思考力と幅広い知識・技術を兼ね備えた21世紀型の看護職者の育成を目指していました。

3. 保健師制度改正と学部カリキュラム改正の歩み：第1次～第4次カリキュラム改正

2010年4月に施行された「保健師助産師看護師法」の改正は、看護教育の方向性を大きく見直す契機となりました。改正により、保健師・助産師の教育年限の延長や国家試験の受験資格が改められ、専門職養成における質の確保が強く求められるようになり、保健師の役割も拡大しました。

本学部は開設当初、看護師・保健師双方の国家試験受験資格を全員に付与する統合カリキュラムを採用していました。しかし、制度改正や社会的要請に応えるため、教育の質担保を重視し、保健師コースについては選択制とし、定員数を設定する方針に転換しました。この背景には保健師養成に関する全国的な議論に加え、大阪府において卒業生の質を確保するため保健所実習の受け入れが制限されるなど、実習環境の変化もありました。

こうした状況をふまえ、本学部では2011年に「看護学部教育あり方検討委員会」を設置し、カリキュラム全体の見直しを開始しました。検

討は約1年間続き、その成果として2012年度入学生(三期生)から第1次カリキュラム改正を実施しました。改正の柱は、保健師養成に関する法的要件への対応と、看護師・助産師教育の質的向上でした。具体的には、保健師選択定員を60名に設定し、領域名称を「地域看護学」から「公衆衛生看護学」に改称しました。また、看護師国家試験のみを志望する学生を対象に「看護実践発展科目」を新設し、助産師選択定員を6名程度としました。これにより、国家試験受験資格を確実に担保しつつ、学生の進路選択に柔軟性を持たせる体制が整えられました。

その後も、医療環境や地域包括ケアの進展に対応するため、2013年度に第2次改正、2015年度に第3次改正を実施し、保健師選択定員は2016年度入学生から40名程度に縮小しました。さらに、2014年には大学院看護学研究科を開設し、学部と大学院の教育体系の一貫性を高める必要性が生まれました。この方針を踏まえ、2014年度から2015年度にかけて第4次カリキュラム改正案を検討し、2017年度入学生から施行しました。

第4次改正では、科目区分を大学院との整合性を持たせるため、「看護の基盤」「療養生活支援」「地域家族支援」の3区分に再編しました。科目内容も疾病動向に即して見直し、「緩和ケアと代替・補完療法」を「がん看護学総論」に変更するなど、専門性を強化しました。加えて、単位数の調整や「専門職連携医療論」の新設、開講年次の変更を行いました。特に、学部開設時から続く医看融合教育を発展させ、「専門職連携医療論」を新設しました。この科目は、医学部、看護学部の学生がともに学ぶ取り組みを基盤とし、地域包括ケア時代に不可欠な多職種連携教育の中核を担うものでした。実習科目では急性期・慢性期成人看護学実習の増単や老年看護学実習の再配置を実施しました。統合実習は「統合看護学実習」と名称を改め、看

1 カリキュラムとその改正

護実践能力の統合を明確な目標としました。

一方で、この改正過程で浮き彫りとなった課題もあります。カリキュラムマップや卒業時到達目標の評価方法の整備、初年次教育のフォロー体制、教養科目の不足、国際交流や異文化理解の方向性、医学部との融合教育のあり方、領域間の情報共有、実習方法の改善、障害学生への対応など、検討課題は多岐にわたりました。

4. 現行カリキュラムとその特徴：第5次カリキュラム改正

第5次カリキュラム改正は、文部科学省による「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」策定（2017年）、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正（2019年）、そして2021年の大阪薬科大学との統合を背景に実施されました。本学は医学部・看護学部・薬学部の医療系総合大学となり、多職種連携教育（IPE：Interprofessional Education）を特色とした教育の体系化が重要な課題となりました。

改正の基本方針は、教育目的・教育目標・3ポリシーの再構築でした。将来構想ワーキンググループやFD研修会、学部全体会議等が開催され、2022年4月、新カリキュラムの施行に至りました。教育目的では、「豊かな人間性と国際的視野を備え、人々の健康課題に取り組み、変化する社会に対応できる人材の育成」を掲げ、具体的には、多職種と協働できる人材、柔軟な思考力と看護実践力を持つ人材、探求心を持って地域・国際社会に貢献する人材の育成を目指しました。カリキュラムポリシーとして、①高い倫理観と高度な知識・技術・態度を備えた看護実践力育成教育、②多職種連携教育、③多様性を尊重した創造力育成教育、④グローバルな視点からの課題探求力の育成とキャリア形成教育、⑤学生が参画する学修成果評価の実践の5つの方針を明示し、これにより、倫理観、課題探求力、専門職としての実践力、多職種連

携力、自己研鑽力を備えた看護職の輩出が目指しました。

カリキュラムは、看護学の主要概念である「人間」「環境（社会）」「健康」「看護（実践科学としての看護）」及び、本学の理念である「多職種連携教育」を骨子として、「基礎科目」「専門基礎科目」「専門科目」を低学年から積み上げる体系で構成しました。基礎科目では、大学で学ぶ基盤となる「基盤科目」、科学的思考を養う「人間と科学」、社会や環境を理解する「人間と社会」、国際社会におけるコミュニケーション力を育む「人間と言語」を配置しました。専門基礎科目では、人間のからだやこころの仕組みを学ぶ「人間と健康」、健康を支える環境や制度を理解する「健康と環境」を設け、専門科目では、看護実践力の基礎となる「看護の基盤」、ライフステージや療養の場に応じた「療養生活支援看護」「地域家族支援看護」、さらに学びを統合する科目群を配置しました。加えて、「看護実践発展科目」「保健師科目」「助産師科目」を設け、進路選択の柔軟性を担保しました。

この改正では、初年次教育を強化し、大学で学ぶための基礎スキルを早期に習得できる体制を整えました。また、国際交流科目が体系化・単位化し、語学力強化や海外研修への関心を高めることで、グローバルな視野を持つ看護職者の育成を目指しました。さらに、医学部・薬学部との連携を強化し、IPEを本学の特色として体系化し、チーム医療に必要な協働的思考力と実践力の育成を目指しています。地域・在宅看護論の増設や数理・データサイエンス・AIデータリテラシー教育の導入も検討され、情報化時代に対応する教育が進められています。授業方法では、双方向型授業やアクティブラーニングを活用し、学生の主体性を重視した教育を展開しています。

5. 今後の展望

2040年に向けた看護学教育では、予測困難な社会変化に柔軟に対応できる看護専門職の育成が求められています。令和6年看護学モデル・コア・カリキュラム改定版では、コンピテンシー基盤型教育への転換が示され、卒業時に必要な資質・能力を明確化し、知識・スキル・態度・価値観、思考・判断・表現力を統合したパフォーマンス評価が重視されています。

本学部では、これに対応し、現行カリキュラムの自己点検評価を踏まえて、人間力やセルフマネジメント力を各学年で育成し、倫理観やプ

ロフェッショナルリズムの醸成を図ることが重要であると考えています。また、早期からの探求的な学びを促し、課題解決を高める教育の展開が必要です。さらに、科目間の連携を強化し、分野横断的な学びによる体系的理解と応用力の向上、臨地実習での実践力の確実な育成などが課題として挙げられています。

これらの課題を踏まえ、2027年度からの新カリキュラム施行に向けて準備を進めています。今後も、グローバルな視点を持ち、時代の要請に応える看護専門職の養成を進めてまいります。

2 多職種連携教育

多職種連携教育に込められた願い、そして今。

看護学教育センター長

まつぎ かずこ
真継 和子

本学部の多職種連携教育は、開設当初に掲げられた「医看融合教育」に端を発しています。本学部の設置にあたり、当時の設置準備室の林優子先生と田中克子先生は、歴史ある医科大学に看護学部を設置する意義として「チーム医療の推進」を掲げられました。そして、その理念を象徴する言葉として「医看融合教育」が誕生しました。

「医看融合教育」は、医療人マインドやチーム医療の基盤を学び、患者中心の医療を実践していくために、専門職間の連携・協働を育む教育として位置付けられています。大学病院という臨床の場で、医学部と看護学部の学生が共に実践を通じて、各々の専門的立場で発言できる言語能力、多様な情報を整理・編集する能力、患者を中心に問題解決する能力、コミュニケー

ションを取りながらチームを調整する能力など、医療人として必要な複合的能力を身につけることが期待されています。この取り組みの実現は、看護学部設置準備室の夢でもあったと両先生は述べておられます（大阪医科大学看護研究雑誌，No1，2011，83）。

このように、本学部の多職種連携教育は「医看融合教育」を原点として発展してきました。本誌では、その15年間の歩みを振り返りながら、2025年度版「多職種連携教育の今」についてご紹介します。

1. 「医看融合教育」の始まり

実際に医学部生と看護学部生が共に学ぶ「医看融合教育」の具体的な検討が始まったのは開設2年目でした。看護学部教育センター内に

2 多職種連携教育

「医看融合教育検討ワーキング」が設置され、医学部教育機構との協議が重ねられました。その結果、まず両学部1年生を対象とした「医看融合ゼミ」の開催が決定されました。第1回「医看融合ゼミ」は2012年6月13日に実施され、医療専門職を目指して学び始めた看護学部生、医学部生が、「社会に期待される医療人」をテーマにゼミに臨みました。第九代学長 竹中洋 先生の基調講演では、臨床医としての35年間の経験を通じて患者・家族から学んだことを踏まえ、「共感とは何か」が問いかけられました。その後、学生たちは、両学部混合グループで「社会から自分たちは何を期待されているか」「どんな医療人になりたいか」「お互いに期待すること・協働したいこと」についてディスカッションを行いました。初めての試みでしたが、学生だけでなく教員にとっても相互交流の場となりました。同時に、患者中心の医療には職種間の理解と協働が不可欠であることや、学部段階で専門性と役割を学び、市民の信頼に応える生涯学習を始めることの重要性が共有されました。また同じ2012年度には、後述する医看融合カンファレンスもスタートしました。

さらに、この年には最高学年での教育についても検討が進み、2013年度に看護学部4年次生（1期生）と医学部6年次生を対象とする「医看融合教育Ⅱ」を実施することが決まりました。「医看融合教育Ⅱ」では、それまでの学びを発展・統合し、「それぞれの立場から対象中心の全人的・包括的医療を実現するために、専門性がどのように貢献できるか、また協働のあり方について意見交換する」ことを目的としました。第1回は2013年7月3日に開催され、学生たちは「地域包括ケアの現状と課題」に関する講演を聞いた後、グループに分かれて地域包括ケアパスの作成を行いました。

2014年度には学部開設の完成年度を迎えカリキュラム改変が可能となること、また医学部においても新カリキュラムの検討がはじまって

いたことから、この機に新規科目の検討が進められました。2014年度からは、1年次生対象の「医看融合ゼミ」は新入生オリエンテーションの学外合同合宿に組み込まれましたが、さらに、2015年度には、専門化・細分化が進む医療現場でチーム医療を推進するための基礎となる精神、思考、言語を学ぶ新規科目「医療人マインド」2単位（30時間）が設置されました。この科目は、その後の実績を踏まえた検討の結果、2017年度には1単位15時間となり、後半部の内容は新設の2年生科目「専門職連携医療論」1単位15時間に移されました。

このように、看護学部設置以来、医学部と看護学部の学生が共に学び合う「医看融合教育」は着実に推進されてきました。

2. 「医看融合教育」から「多職種連携教育」へ

こうした中、医療安全や地域包括ケアの推進により、チーム医療を前提とした教育の重要性は一層高まってきました。安全で質の高い医療を実現するためには、医師と看護師の連携だけでなく、薬剤師を含む多職種による協働が不可欠であることから、2016年の法人合併により関係が深まっていた大阪薬科大学の学生参加について検討が始まりました。2017年度には、最高学年で実施する「医看融合ゼミ」に大阪薬科大学6年次生20名が参加し、医療安全に関する事例検討で活発な意見交換が行われました。翌年には、1年次科目「医療人マインド」に薬学部生50名が加わり、さらに2年次科目「専門職連携医療論」ではチーム医療の重要性について三学部で議論するなど、本学における多職種連携教育（Interprofessional Education；IPE）の幕開けとなりました。

一方で、他大学では4年間にわたる段階的かつ総合的な教育プログラムの構築が始まっており、体系的なプログラムのあり方が本学の課題となりました。こうした状況をふまえ、本学では2019年度には専門職連携教育小委員会を設

置し、学部間の協働体制を整えるとともに、大阪医科大学と大阪薬科大学の大学統合（2021年）を見据えたカリキュラムの検討を本格化させました。なおこの小委員会は2021年度には多職種連携カリキュラム小委員会、さらに2023年度には多職種連携カリキュラム委員会へと改組されています。協議の結果、2022年度入学生から「多職種連携論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」が各学部に通じる科目として配置され、看護学部では1～4年次の各学年に多職種連携科目を置く現在の形が整いました。看護学部の多職種連携論Ⅲは、それまでの2年生科目「医療倫理学」を引き継ぎ、新たに開始される三学部合同グループディスカッションを組み込む形での科目としました。多職種連携論Ⅳは、3年生の旧科目「チーム医療論」と、それまで統合看護学実習の一部として行われていた4年生の医看融合ゼミ（多職種連携ゼミ）をあわせた科目となりました。

3. 2025年 多職種連携科目の現在

本学部の専門職連携教育は、他学部とのディスカッションを通じて多様な視点に触れ、自身のプロフェッショナルリズムを育むことを目的に、学年ごとに1科目を配置し、段階的な学びを提供しています。以下に、各科目の概要と学生の様子を紹介します。

1) 多職種連携論Ⅰ－医療人マインド（1年次・1単位15時間）

この科目は、医療専門職としての自職種および他の医療専門職の役割を理解し、医療人としての基本的姿勢・知識・態度を形成することを目的としています。授業では、病院や地域で活躍する医療従事者から活動の実際ややりがいについて講演を受け、現場のリアルな声に触れます。医学部と各学部をオンラインで結び、看護学部、薬学部がリアルタイムで中継しながら実施することで、学部間の交流を促進しています。学生のアンケートでは、「各職種の活動内

容が理解できた」「職業に優劣をつけていた自分に気づいた」「学習意欲が湧き、新たな目標ができた」「講師の体験談から将来像をイメージできた」などの感想が寄せられています。こうした学びは、学生の職業観を広げ、専門職としての自覚と学習意欲の向上に寄与しています。

2) 多職種連携論Ⅱ－医療と専門職（2年次・1単位15時間）

この科目は、多職種連携の基本を学ぶことを目的としています。チーム医療の基本概念を理解し、連携を推進していくために必要な多職種間の相互理解と信頼関係の構築を重視しています。授業では、医療の対象となる人々の病の体験を踏まえ、医療者としての役割について三学部合同チームによるディスカッションを行っています。

患者中心の医療とは何かを問いながら、患者や家族だけでなく、職種間での対話の重要性に気づき、互いに補完し合うことの必要性を学んでいます。こうした学びを通じて、学生は「患者の視点を意識することの大切さを実感した」「他職種との協働が医療の質を高めることを理解できた」といった気づきを得ており、将来の専門職としての協働力を養う基盤となっています。

3) 多職種連携論Ⅲ－医療倫理（3年次・1単位15時間）

この科目は、医療現場で起こり得るさまざまな問題を倫理的側面から考え、多職種連携の視点を学ぶことを目的としています。講義前半では、保健医療における倫理的課題とその解決に向けた基本的な考え方を学び、後半では倫理的課題を含む事例をもとに三学部合同チームでグループワークと発表を行っています。

同じ事例であっても、職種によって対象やその状況の捉え方、関わり方が異なることを実感し、患者・家族にとってよりよい医療を提供するためにチームで話し合う必要性を学んでいま

す。また、看護職としてのアイデンティティを
考える機会となり、チームの一員としての自己
の役割と責任を再認識することで、専門職とし
ての倫理観と協働力を深めています。

4) 多職種連携論Ⅳ－医療安全（4年次・1単位 15時間）

この科目は、チーム医療を推進するために主
要なスキルを学び、各専門職の協働のあり方や
効果的なチーム形成について理解を深めること
を目的としています。授業では、チーム医療に
関連する事例動画を用いて連携・協働について
ディスカッションを行い、さらに医療安全に関
する事例分析を通じて、チームとしての意思決
定や調整の重要性を学んでいます。

学生のアンケートでは、「専門職としての考
え方を明確にできた」「協働する各職種の役割
と責任を理解できた」「立場を尊重する重要性
を実感した」「多様な意見を共有し調整する力
が身についた」などの声が寄せられています。
こうした学びは、患者や家族にとって最善の医
療を提供するために、異なる視点を調整し合う
基礎的能力の育成につながっています。

以上のように、本学部では学年進行に応じて

医学部・薬学部とのディスカッションを重ね、
患者中心の医療を実現するためのチーム力の基
礎を学んでいます。その過程で、看護職として
のアイデンティティを形成し、専門職間の協働
の重要性を深く実感しています。

4. 願いを受け継ぎ、未来につなぐ多職種連携教育

本学部の多職種連携教育は、開設当初に掲げ
られた「医看融合教育」の理念を原点とし、15
年間の歩みを経て発展してきました。現在は、
医学部・薬学部との協働を通じて、患者中心の
医療を実現するためのチーム力を段階的に育成
する体系的なカリキュラムを整えつつありま
す。学生は、役割から始まり、連携・倫理・安
全へと学びを深める中で、看護職としてのアイ
デンティティを形成し、専門職間の協働の重要
性を実感しています。

今後も、医療の高度化や地域包括ケアの進展
に対応しながら、患者・家族の価値観を尊重
し、質の高いケアを提供できる人材育成を目指
して、連携教育を着実に充実させていきます。

2 多職種連携教育／高知実習

高知県での多職種連携地域医療実習の歩み ーともに支える医療のかたちー

在宅看護学分野

まつぎ かずこ いたう まり おおはし たかひろ ありよし まりな
真継 和子、伊藤 真理、大橋 尚弘、有吉真理菜

本学の多職種連携地域医療実習（高知実習）
は、2016年度に開始し、医学部・看護学部・
薬学部の3学部が協働して地域包括ケアの実際
を学ぶ取り組みです。初年度には、まず「高知

を知る」ことから始め、限られた社会資源のな
かで人々の暮らしがどのように支えられている
かに目を向けました。人々のつながり、環境と
のつながりに触れ、地域で生きるとはなにかを



学生自身が問い直したことは、その後の学びの土台となりました。2017年度には実習時間を拡充し、他学部と混成グループを編成して一人の療養者を受け持ち、支援計画を立案するという試みを始めました。短時間でも各職種の視点を持ち寄り、患者と家族の意思を尊重しながら最善の方針を探るプロセスを体験しました。ここで得た「他職種の視点からの新たな発見」と「自職種の専門性の活かし方」は、互いの役割を尊重しつつ、意見の違いや葛藤を調整する力を育てています。

2018年度は、平成30年7月豪雨（西日本豪雨）という有事を背景に、地域包括支援センターでの学びを通して平時・有事の支援の切り替えや柔軟な運営を考える機会となりました。家庭訪問では、療養者と家族が主体であることを実感し、支援においても地域特性を踏まえた発想の転換が求められることを共有しました。2019年度には退院後訪問や連携カンファレンスを通じ、療養者と家族、さらには各職種の強みを活かす支援と病院－地域のつながりの重要性を再確認しました。

2020年度の新型コロナウイルス感染症の急



速拡大による実習中断後、2023年度に実習を再開。住民の皆さまへの突撃インタビューや本山町地域包括支援センター、嶺北中央病院をはじめ各診療所などでの学びを通じ、地域の魅力とネットワークの力を再確認しています。

この実習の核心は、社会資源が限られるなかでも自助の力と多職種連携によりネットワークを強化し、点（病院・家庭）を線へ、線を面へと広げる経験にあります。混成グループでの事例検討は、他職種の視点を通じて見えない課題を可視化し、互いの役割の尊重、葛藤を乗り越えた合意形成、調整という連携の要を学ぶ場となっています。短い期間での実習ではありますが、学生は地域の実情に根差した実践知を蓄え、将来の医療を担う専門職として「最善とともに考える力」を着実に養っています。支えて下さっております高知県庁、嶺北中央病院、本山町地域包括支援センター、そして地域の皆さまに深く感謝申し上げます。



多職種連携カンファレンスの歩みと未来

看護学教育センター長

まつぎ かずこ
真継 和子

本学部における多職種連携カンファレンスは、医学部教育機構と看護学部教育センターの協議を経て、2012年度に開始した「医看融合教育」を基盤としています。「医看融合教育」は、医学部との協力関係なしには実現できないとの考えのもと、単なるチーム医療を表現するものではなく、大阪医科大学の新しい教育理念



として検討され具体的に教育カリキュラムに反映されるものとされました。その中で、看護学部3年次生と医学部5年次生による臨床実習でのカンファレンスを通して、専門性の違いやアプローチの違いについて発表しあい、チーム医療推進のための医看融合教育の重要性を認識する機会として継続して実施してきました。

当初は医学部と看護学部の協働を目的に、3年次生を対象とした「臨床実習での合同カンファレンス」を母性看護学・精神看護学領域で実施しました。合同カンファレンスは、各学部から事例紹介や治療・看護計画などの発表、質疑応答・ディスカッション、臨床指導者や教員によるコメント等で構成しました。カンファレンスを通して、同一事例を医学・看護学の視点から検討し、患者が抱える課題を共有することで、看護の役割や専門性の違いを理解する機会となりました。学生からは、「視点の違いに気づいた」「協働の重要性を実感した」との肯定



的な意見が多く寄せられ、継続の必要性が確認されました。

その後、合同カンファレンスの対象は母性看護学・精神看護学に加え、2019年度以降は慢性期成人看護学領域、急性期成人看護学領域へと拡大しました。さらに、2021年の大阪医科大学と大阪薬科大学の統合により、薬学部を含めた3学部での「多職種連携—臨床カンファレンス」へと新たなステージへと進化しました。看護学部生の9割以上が複数領域で経験を積むことが可能となり、学生からは「チーム医療のあり方を考える機会となった」との意見が多く寄せられています。本カンファレンスは、医学部・薬学部・看護学部の学生が、将来の医師・薬剤師・看護師として実践を通じて意見交換を行い、患者理解の視点を改めて深めるとともに、学部間の視点の違いや多職種連携のあり方について考える機会となっています。さらに、指導者である医師・薬剤師・看護師からのコメントによって、学生の学びが一層深まっています。

一方で、2020年度の新型コロナウイルス感染症流行による中止や診療科体制の制約などの課題もありましたが、他学部との連携は継続され、臨床カンファレンスの推進が図られています。これにより、実践的な学びを重視した教育が展開されています。

今後は、地域包括ケアを視野に入れた多職種連携教育の強化が求められます。また、学生が主体的に課題を設定し、解決策を提案する取り組みを進め、患者中心の医療を担う専門職としての資質を高めてまいります。

看護学部における看護実践発展実習の歩みと成果

がん看護学分野

鈴木 久美、南口 陽子、土井 智生、城山 敏江

本学看護学部は2010年の開設以来、看護実践を重視した教育を展開してまいりました。その基盤には、前身である大阪医科大学の理念として「国際的視野に立った教育・研究・良質な医療の実践を通して、人間性豊かで創造性に富み、人類の福祉と文化の発展に貢献する医療人を育成する」があります。看護学部ではこれを受け、「生命の尊厳と人権の尊重を基本に、人々の健康問題の創造的解決に向けて、柔軟な思考力と幅広い知識をもち、保健・医療・福祉を統合した看護実践能力を有する人材の育成」を目的として教育を進めてきました。

社会の変化に応じてカリキュラム改正を重ね、2012年度入学生から「看護実践発展科目」を新設し、その一環として位置づけられたのが「看護実践発展実習」です。2015年より、4年生の選択科目として本学大学病院で実施してきました。本学は大学病院を併設しているからこそ、看護基礎教育においても高度な看護学実習を実現できており、臨床と教育が密接に結びついた特色ある取り組みを展開しています。

本実習の目標は、3年次までに積み上げた学



経管栄養の準備
栄養剤の特徴や用いる器材の特徴を学びながら経管栄養の準備を行います。

習を基盤に臨床看護をさらに深め、重症度やケア度の高い患者とその家族を多角的に捉え、科学的根拠に基づいた看護実践力を強化することです。具体的には、①病態や検査データ・症状を統合し生活の視点を踏まえたアセスメント力の強化、②患者の状態に応じた看護技術の提供による安全・安楽の確保、③退院後の生活を見据えた支援、④多職種と連携しチームの一員として役割を果たす力の育成、の4点を柱としています。

学生の声からも、この実習の意義が伝わります。ある学生は「吸引や胃瘻管理、薬剤管理など、これまで経験できなかったケアを日々実施できた。臨床の場では即時の判断や患者への配慮が求められ、緊張感の中で大きく成長できた」と振り返ります。別の学生は「侵襲度の高い技術に不安があったが、指導者の助言を受け繰り返し挑戦することで技術を高められた。患者の背景を理解し寄り添うことで信頼関係を築き、個別性のある看護を実践できた」と語っています。これらの経験は、技術習得にとどまらず、看護観の深化や責任感の醸成につながって



持続点滴を受けている患者の移動に付き添っている様子
病棟のスタッフの一員として看護師と共に患者へのケアを行います。

います。

看護実践発展実習は、学生が「自分が担当看護師だったらどうするか」を主体的に考え、行動する姿勢を育む場となります。また、ケアを重ねることで患者との距離が縮まり、笑顔や感謝の言葉をいただくことも多く、看護師としてのやりがいを実感する機会にもなっています。こうした学びは、卒業後に直面する多様な臨床場面においても、患者一人ひとりに寄り添う看護を追求する姿勢の土台となるでしょう。

さらに本学大学院看護学研究科には、専門看護師やナースプラクティショナーといった高度実践看護師を養成するコースが設けられています。学部で培った基礎的・応用的な看護実践力をさらに発展させ、臨床現場でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指しています。学部と大学院の教育が連続性をもって構築されて

いることは、本学の大きな特色であり、看護教育の体系的な発展を支えています。

今後、看護を取り巻く社会的ニーズはますます多様化・複雑化し、医療の高度化やAI技術の進展、在宅医療の充実などに伴い、臨床での看護実践力はこれまで以上に求められるでしょう。患者や家族の生活や暮らしを支える看護は、単なる技術の提供にとどまらず、科学的根拠に基づきつつ人間の尊厳を尊重する姿勢が不可欠です。

本学看護学部は、大学病院を併設する強みを最大限に活かし、実践重視の特色ある教育活動を通じて、臨床現場に直結した学びを提供し続けます。これからも時代の変化に応じて教育を進化させ、学生一人ひとりが「看護専門職として社会に貢献する」という使命を果たせるよう取り組んでまいります。

3 特色ある実習／総合看護学実習（離島実習）

慢性離島実習：沖永良部島徳洲会病院での学び

慢性期成人看護学分野

とびたいとこ
飛田伊都子

1. 離島との歩み：開学以来続く学びの場

本学では開学以来、4年生の統合実習として沖永良部島徳洲会病院での離島実習を継続してきました。沖縄本島の約60km北に位置する沖永良部島は、豊かな自然と助け合い・支え合いの文化が今も息づく地域です。都市部とは異なる医療資源の限界と、それを補うための地域のつながりの強さが共存するこの島での学びは、学生に深い看護観をもたらしてきました。本実習開始以来、病院の皆様の厚いご支援により、多くの学生が看護の原点に触れる貴重な経験を

積んでいます。



病院前にて

2. 島の文化と医療が教える“生活者としての患者”

離島における医療は、病院、介護施設、訪問看護などが密接に結びつき、島民の生活を支える仕組みとして機能しています。島では家族を大切にする文化が深く根づき、病気や老い、死と向き合う場面でも家族が献身的に寄り添う姿が見られます。「少しでも長く生きてほしい」「苦しむ姿を見てられない」という家族の思いが延命治療の選択に繋がる場面も珍しくありません。学生はこうした文化的背景を理解したうえで、患者や家族の価値観を尊重した看護のあり方を考える必要があります。この地域性に触れることは、慢性期看護において“生活者としての患者”を理解するうえで極めて重要な学びとなっています。

3. 島特有の“顔の見える連携”から学ぶ看護師の役割

離島では多職種連携が非常に密接であり、学生は“顔の見える連携”を実体験します。医師や訪問看護師、介護職、行政担当者などが日常的にコミュニケーションを取り合い、患者の生活を支えるために迅速な調整を行っています。学生は患者に最も近い存在として、情報をつなぎ、多職種と協働する看護師の役割を肌で感じることができます。特に退院支援カンファレンスでは、学生が患者の思いを代弁し、生活を見据えた意見を述べる姿も見られ、看護専門職としての成長を促す機会となっています。

4. 急変搬送から学ぶ地域医療の現実

離島という地理的条件から、患者が急変した際には迅速な広域搬送体制が欠かせません。沖永良部島では、状態に応じてドクターヘリが要請され、患者の状態や天候などで利用が難しい場合には、自衛隊による搬送が依頼されることもあります。島民の命を守るために、医療機関、消防、自衛隊など多様な機関が連携して対

応する仕組みは、まさに離島医療の特徴です。学生にとって、こうした搬送体制を知ること



島外へ急変搬送

は、地域の特性を踏まえた医療提供とは何かについて理解する大きな学びとなっています。医療資源に限られる環境であっても、地域全体で命を支える体制が築かれていることを体感することで、看護専門職としての視野が大きく広がります。

5. 訪問看護での気づき：継続看護とグリーフケア

訪問看護での学びは学生にとって大きな意味を持ちます。利用者の生活の場に入り、家族の支えや地域住民とのつながりを目の当たりにすることで、「看護は病院で終わりではない」ということを実感します。利用者が亡くなった際には、家族だけでなく、長く関わってきた看護師も強い喪失を感じることがあります。学生はその姿に触れ、グリーフケアを含む継続看護の重要性を学びます。患者の人生だけでなく、家族の悲しみに寄り添う姿は、看護の本質を深く問いかける経験となっています。

6. 学生の声が示す実習の意義

実習を終えた学生からは、「慢性期では行動変容を促すだけでなく、患者の価値観を尊重することが大切だと気づいた」「意思疎通が難しい患者さんにも諦めず関わり続けることで、わずかな変化の意味を理解できた」「多職種と協働することで、よりよい看護が実現することを実感した」などの声が寄せられています。これらは、離島実習が学生の成長に大きく寄与していることを示すものです。

7. 15年間の感謝とこれからの展望

長きにわたり本学の学生を温かく受け入れてくださった沖永良部島徳洲会病院の皆様、地域住民の皆様にご心より感謝申し上げます。島の文化と地域医療の実際に触れながら、慢性期看護の本質を深く学べるこの実習は、本学の教育にとってかけがえのない教育になっています。これからも、地域とともに歩む看護教育の場として、さらに充実した実習へと発展させてまいります。



訪問看護に参加

3 特色ある実習／公衆衛生看護学実習

地域特性と保健師の専門性を学びの基盤とする公衆衛生看護学実習

公衆衛生看護学分野

くさの えみこ やまの ふみえ なかはら ようこ
草野恵美子、山埜ふみ恵、中原 洋子

公衆衛生看護学実習は、保健師を目指す学生が実際の現場で学びを深めるための重要な機会です。保健師は、看護職の一つであり、国家資格を有する専門職です。地域に暮らす人々の健康レベルの向上を目指し、多職種や地域住民と連携しながら、住民が主体的に健康づくりに取り組めるよう支援しています。

本学ではまず、実習に向けての学内演習を経て、産業保健活動や健康危機管理の1つである感染症対策を行う施設での1週間の実習（公衆衛生看護学実習Ⅰ）を行った後、保健センターや保健所といった行政での保健師活動を約1か月実践的に学びます（公衆衛生看護学実習Ⅱ）。いずれも4年生の実習となり、病棟等での看護学実習をほぼすべて学んだ後となります。

行政の保健師活動を学ぶ「公衆衛生看護学実習Ⅱ」では、実習に先立ち、対象地域の特性を把握する「地域診断」を行います。

病院で働く看護師が看護過程の中で「看護診断」を行うのと同様に、保健師を目指す学生も地域を対象に診断を行います。ただし、対象が「個人」ではなく「地域」となるため、扱うデータの種類や分析の視点が異なり、抽象度も高くなります。

4年生になると「対個人」の看護には慣れてきていますが、「対集団・対地域」となると、最初は戸惑うことも少なくありません。それでも、学生たちは試行錯誤を重ねながら地域のさまざまな情報に触れ、徐々に地域全体を見渡す視点や分析力を身につけていきます。地域診断



健康教育の様子



防護服着脱の演習

では、課題を見つけるだけでなく、その地域が持つ強みや魅力にも目を向けられるよう、教員として意識的にサポートしています。

このように、地域全体を対象とし、共通性の高い健康課題に取り組む活動は、保健師の大きな特徴の一つです。しかし、その基盤には「個別支援」があります。住民一人ひとりの困りごとに対して、健康面から予防的に支援を行う保健師は、個別支援においても多様な技術を駆使しています。実習では、家庭訪問や健康教育の実施、健康診査・健康相談などを通して、健康づくりのアプローチ方法を実践的に学んでいきます。

さらに、保健師は「個」と「個」をつなぎ、線から面へと広げていく存在でもあります。一人では解決が難しい健康課題に対して、地域住民が協働して取り組む「地域組織活動」と連携しながら、ヘルスプロモーションを実践していきます。また、不足する社会資源の創造や、健康政策への関与といった活動も保健師ならではの醍醐味です。こうした実践は保健師活動のとても“面白い”点であり、保健師の特徴的な専門性だと思います。実習の最後には各学生が実習を通して考える「保健師の専門性」を言語化し、ともすれば見えにくい保健師の特徴を可視化できるよう働きかけています。

最後に、本学での公衆衛生看護学教育での大きな特色である、自治体のご協力による教育環境の充実についてふれたいと思います。大学と協定関係にある地元・高槻市の保健師の皆様には、実習に至るまでに、2年生という初期段階から講義に来ていただき、できるだけ早期から生の保健師活動に触れる機会を頂いております。さらに、連携関係にある兵庫県における3市町の多大な協力をいただき、大学周辺とは大きく異なる地域特性・地域の強みを活かした素晴らしい保健師活動を学ぶ機会を頂いております。大変ご多忙の中、充実した実習環境、手厚いご指導をいただき、改めて感謝申し上げます。

これからも、地域での人々の生活に思いを馳せ、一人ひとりに寄り添いながら、個別支援の視点、地域全体を見通す視点のいずれも駆使し、地域社会全体の健康づくりに貢献でき、保健師活動のやりがいを感じることができるよう保健師を育てていきたいと思っています。

世界と看護でつながる：国際交流活動の軌跡—挑戦の15年—

国際交流委員長

とびたいとこ
飛田伊都子

大阪医科薬科大学看護学部は、2010年の創設以来、世界と看護でつながることを目指して国際的な視野を備えた看護職者の育成に努めてきました。本学が国際交流活動を本格的に開始してから15年が経過し、その間には国際情勢の変動、世界的パンデミックの発生、オンライン教育の急速な普及など、教育を取り巻く環境が大きく変化しました。こうした状況下でも、本学は多様な国・地域の大学と連携を深め、学生・教員双方に国際的な学びと成長の機会を提供し続けてきました。本稿では、2010年から現在までの国際交流活動の歩みを振り返りながら、その発展の軌跡、学生主体の学習の広がり、教員の研究交流、そして現在進行形で発展している国際的な取り組みについて紹介します。

1. 国際交流の基盤整備（2010年～）

2010年に看護学部が創設された当初は、国際交流の基盤づくりが中心となりました。国際的視野を持つ看護職者を育成することを目標とし、その実現に向けて教員は海外の看護教育機関との連携、ネットワーク構築、学内の国際理解教育の充実に取り組みました。国際交流推進委員会が組織され、学内シンポジウムや国際講演会の準備など、基盤整備が着実に進められました。初めは、学生や教職員が海外の教育制度、医療制度に触れる機会は限定的でしたが、国際交流への関心は徐々に高まりつつありました。学部全体に「国際的な視点は看護の専門性を高める上でも不可欠である」という意識が醸成されていき、これが本格的な国際活動の基盤となりました。

2. アジアとの交流開始：台北医学大学

（2012年～）

大阪医科大学は、2012年3月に台北医学大学（Taipei Medical University；TMU）との国際交流協定を締結しました。まず医学部間の交流が開始されましたが、同年10月にTMUから交流訪問団が来学された際、看護学部とも意見交換を行い、両大学看護学部間の交流を推進する方針を確認しました。同年12月、TMUから本学看護学部に対して2013年夏に学生を派遣したいとの申し入れがあり、具体的な検討を開始しました。2013年2月には、看護学部国際交流推進委員会の委員ら5名がTMUを訪問し、大学・関連施設を見学するとともに具体的な交流内容を協議しました。これをもとに、看護学部では中山国際医学医療交流センターとも連携しながら準備を進め、2013年7月、初めての海外学生受け入れを行いました。参加者はTMU看護学部の学生9名で、大学病院や各領域の協力を得て2週間のプログラムを無事終了しました。さらに2014年3月には、本学看護学部からTMUへ初の学生派遣（学生6名・2週間）を行いました。2014年3月25日、TMU看護学部長である林佳静（Chia-Chin Lin）教授らの代表団が本学を訪問され、7月の学生受け入れのお礼を述べられるとともに、今後の交流継続について協議を行いました。

（1）台北医学大学（TMU）との緊密な交流

TMUからの研修生受け入れは2014年度以降も毎年継続して実施されました。COVID-19パンデミック下の2020年度から2022年度にはやむを得ず中止となりましたが、2023年度から受け入れを再開して現在に至っています。研修

生の数は各年3～10名で、本学にとっても重要な国際交流プログラムとなっています。研修内容は、老年看護、地域包括支援、医療・福祉施設見学、学部授業への参加、大学病院での講義・見学など多岐にわたります。研修生は日本のケアシステムの実際を学ぶことができ、本学の学生との交流を通して互いの文化や価値観を理解し合いました。個々の研修生が最終日に実施した成果発表は、学部内でも高い評価を得ており、研修を通じて得た気づきや看護観の変化を丁寧に言語化してくれました。

(2) 本学からのTMUへの派遣

本学からTMUへの派遣も2014年度以降引き続いて行われ、2018年度までに計19名の学生がTMUを訪問しました。短期間ではありながら、海外の大学で学ぶ経験は学生にとって非常に刺激的であり、特に台湾の看護学生の学びの姿勢や、地域看護の枠組みに対する理解を深める機会となりました。

3. 北米との連携深化：ミネソタ州立大学マンケート校との交流（2018年～）

2017年、本学教員と元メイヨークリニックの国際交流担当看護師を介してミネソタ州立大学マンケート校（Minnesota State University, Mankato；MSUM）の Hans-Peter de Ruiter 教授を紹介いただきました。その後、2018年11月には de Ruiter 教授が来学し、学生交流や研究交流について本学教員らと協議するとともに、2回の講演を実施されました。特に学生向け講演では、アメリカの看護教育や保険制度が紹介され、看護学生同士の国際交流の重要性が強調されました。これは本学部生にとって国際交流への関心や意欲を高める貴重な機会となりました。その後も両大学間で国際交流協定の準備が着実に進められ、2019年5月に正式に協定が締結されました。

2019年9月、初めての派遣として3名の学生と本学教員2名がMSUMを訪問し、2週間のプ



ミネソタ州立大学訪問

ログラムを受講しました。そこでは世界的に有名なメイヨークリニック（ロチェスター）や、地域での社会的弱者支援の取り組みなどを見学する機会を得ました。学生は医療システムの違いを知り、看護専門職として求められる力について深く考える契機となりました。MSUMとの交流は、後にオンライン化される国際交流の基盤ともなり、国境を超えた学びを継続するための重要なネットワークが形成されました。さらに海外での学びは継続し、2023年には2名、2024年には1名、そして2025年にも1名の学生をMSUMへ派遣しました。これらの派遣では、MSUMの講義参加、現地学生との交流、医療施設の見学、看護教育カリキュラムの比較など、多角的なプログラムが実施され、学生は国際的視野を広げつつ、自己の看護観を深める貴重な経験を得ています。

MSUMからの派遣受入は、2024年に初めて実現しました。6-7月にMSUMの学生4名を受け入れ、TMUからの学生3名と合同での2週間のプログラムを実施しました。続いて2025年には1名の学生を受け入れています。

4. オンラインによる国際交流（CRISIIS）の展開（2020年～）

2020年、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、対面での交流は全面的に停止することを余儀なくされました。しかし本学はこの困難な状況を新たな挑戦の機会として捉え、

4 国際交流

オンライン国際交流を積極的に推進しました。MSUMが主催するオンライン国際学習プログラム Web International Module の CRISIIS に本学は2020年以降継続的に参加してきました。パンデミックを契機に始まったこのオンライン学習は、対面渡航が難しい状況にあっても、海外の教員・学生と深く学び合える新しい国際交流の形を提示してくれました。グループでのディスカッションは「家族の危機・転機 (crisis)」をテーマとするものですが、そこには、家族の心身のさまざまな病気、出産、死別・悲嘆など、人々のさまざまな経験が含まれます。ここでは看護専門職として求められる視点を、異なる文化や背景を持つ海外学生と議論しながら深めることができるため、参加学生の学びは非常に密度の高いものとなりました。学生たちは英語でのディスカッションに不安を抱えながらも、徐々に自分の言葉で意見を述べるようになり、回を重ねるごとに「共感」「文化理解」「倫理的感受性」といった看護の基盤となる力を育てていきました。これらのプログラムは、単なる語学学習や異文化理解にとどまらず、看護の本質に関わる深い学びを提供するものです。オンラインであっても、学生同士が強い結びつきを感じながら学び合える新しい国際交流の形として、本学の国際教育に大きな意義をもたらしました。



CRISIIS

5. 学部生による国際活動 (NEXUS) の飛躍 (2022年～)

NEXUSプロジェクトでは、外国人住民へのインタビュー調査や医療アクセスの課題分析を



NEXUS

通じ、「地域の中に存在する国際性」を可視化し、多文化社会における看護の役割を学ぶ実践が進められています。学生たちは、言語や文化、宗教、医療制度の違いが医療アクセスにどのような影響を与えるのかを、現場で外国人住民の声を直接聞き取りながら理解を深めました。この活動は、単なる地域ボランティアではなく、国際看護教育としての高い意義をもつ取り組みです。海外に渡航しなくても、地域の中に国際課題が存在し、日本の医療の中にも多文化看護が必要であることを、学生自身が実感をもって学んだ点に大きな価値があります。さらに、NEXUSで行われた調査の成果は、学生主体の研究としてまとめられ、論文化されました。学生が主体となって行った調査結果が、学術論文として公刊されたことは、本学の国際看護教育の深まりを象徴する成果といえます。この論文は、外国人患者に対応する医療体制に焦点を当てた点が高く評価され、学生たちにとっても手応えを感じる経験となりました。NEXUSの活動は、地域の課題を国際的な視座で捉え、看護の可能性を広げる学習として今後も発展が期待されています。

6. 欧州連携の幕開け：ベルギーのトマス・モア応用科学大学との交流 (2024年～)

2024年、本学はベルギーのトマス・モア応用科学大学 (Thomas More University of Applied Sciences; トマス・モア) と、本学と



ベルギー トマス・モア応用科学大学

して初となる欧州の大学との正式な大学間協定を締結しました。この協定は、これまでアジアと北米を中心として展開してきた国際交流が、欧州へと本格的に拡大する大きな転換点となりました。協定には、学生の相互派遣・受け入れ、教員間の授業連携、共同研究など、多層的な交流を可能にする内容が盛り込まれています。特に、欧州連合（EU）が運営する国際教育支援制度Erasmus+（エラスムスプラス）の活用が承認されたことで、学生の経済的負担を軽減しながら国際交流を継続的に推進できる体制が整いました。

トマス・モアとの協定締結後、本学は日本私立看護系大学協会（JANPU）の先駆的国際交流活動に対する視察調査助成事業に採択されました。これにより、2025年3月に本学教員2名がベルギーを訪問し、トマス・モアで教育内容や国際連携の運営体制について直接議論する機会を得ました。また、この視察ではベルギーだけでなく、オーストリアのSalzburg University of Applied SciencesおよびSt. Pölten University of Applied Sciencesも訪問し、欧州における看護教育の特徴、国際交流の仕組み、学生交換プログラムの可能性について幅広く意見交換を行いました。これにより、本学が欧州で連携可能なネットワークはさらに拡大しました。

協定締結から約1年後となる2025年夏には、トマス・モアから初めて欧州の看護学生2名を本学に受け入れることが実現しました。本学が

欧州から看護学生を受け入れるのはこれが初めてであり、学生たちは本学の看護教育や地域医療、日本文化に触れながら、充実した研修を経験しました。この受け入れは、欧州との教育交流がいよいよ実質的に始動し、本学の国際交流が新たな段階へ進んだことを象徴する出来事となりました。

トマス・モアとの交流を基盤に、視察で関係を築いたオーストリアの2大学との連携可能性も広がっており、今後は学生交流、共同授業、研究協力など、欧州全体を視野に入れた国際交流のさらなる発展が期待されています。本学は「世界と看護でつながる」という目標に向けて、欧州との実質的なネットワーク構築を着実に進めています。

7. International Dayの開催（2024年～）

2024年には、本学で初となる国際交流イベント「International Day」が開催されました。本イベントでは、米国・台湾・ベルギーなど多様な文化背景をもつ参加者と本学学生が交流し、文化紹介、英語での学生発表、ワークショップなど多彩な活動が展開されました。特筆すべきは、NEXUSの学生が中心となり企画立案から当日の運営まで中心的な役割を担い、学生主体で国際交流の場を創り上げた点です。教員はその挑戦を支える立場に関わり、まさに「学生と教員が共に創る国際交流」という本学の新たな国際交流モデルが示されました。さらに、学生が企画した書道・茶道・けん玉といっ



International Day

4 国際交流

た日本文化体験ブースでは、海外の参加者と本学学生が気軽に交流し、文化の違いを楽しみながら理解を深めました。食文化の交流として、中庭でお好み焼きを海外の学生と一緒に焼いて味わう取り組みも行われ、笑顔と会話が自然に広がる温かな交流の場となりました。

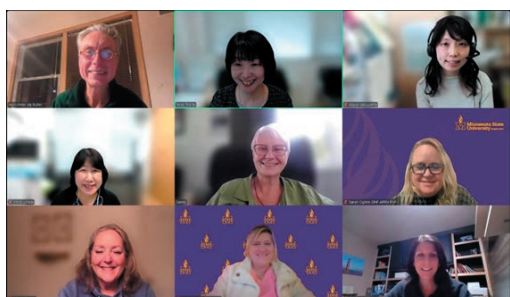
8. 教員の国際学術交流の発展

学生主体の国際交流が広がる一方で、教員による国際研究活動も大きく進展しています。特に、MSUMを中心とする教員との共同研究や、国際執筆グループへの参加は、本学の研究力向上と国際学術ネットワークの拡大に大きく寄与しています。本学教員は、認知症ケアや看護倫理を中心としたテーマに取り組んでおり、オンライン会議を通して研究計画の立案や研究手法の検討、データの分析方法、多文化社会における倫理的配慮や臨床実践との関連性などが国際的な視点で議論されています。この活動により、単なる国内研究にとどまらず、国際的な比較研究の視点を取り入れることが可能となり、本学の看護教育研究の質的深化が進みました。また、研究過程で得られる国際的な知見は、学生教育や現場の看護実践に還元されるなど、学内外への波及効果も大きいものとなっています。さらに、対面での研究交流も着実に進んでおり、2024年にはMSUMからDr. Stacey Van Gelderenが本学を訪問し、教育・研究に関する意見交換や今後の共同研究の方向性について協議しました。続いて2025年にはDr. Sabrina Dean Ehmkeが来日し、研究手法や教育実践の

共有、国際連携の在り方についてより深いディスカッションが行われました。これらの訪問は、オンライン交流に加えて対面での協働を実現したことで、相互理解と信頼関係を一層強化し、国際共同研究の推進に重要な役割を果たしています。

加えて、本学教員はミネソタ州立大学マンケート校が主催する国際論文執筆支援グループ International Writing Groupに参加し、海外の研究者と共同で論文執筆に取り組んでいます。このグループでは、複数国の研究者がオンラインで交流し、2週に1回のペースで継続的に議論を行い、国際学術誌への投稿を目指します。参加者はそれぞれの研究テーマや進捗状況を共有するところからスタートし、専門外の研究者にも伝わる論文の書き方、適切な投稿先ジャーナルの選定方法、論文構成の改善点、査読への対応方法など、投稿までの一連のプロセスについて具体的に議論が行われます。

このような国際的な共同執筆活動や来日交流を通じて、教員は国際研究コミュニティへの参加を深め、研究方法論や学術的表現力の向上、投稿経験の蓄積といった実質的なスキルを習得しています。さらに、若手教員にとっても国際的な論文作成の経験や海外研究者との協働経験は、今後の研究活動を支える重要な機会となっています。これらの取り組みにより、本学教員は国際誌への論文掲載という具体的成果を挙げるだけでなく、看護学部・看護学研究科における国際研究活動を継続的かつ安定的に推進する基盤を整えています。



教員の交流：Global Writing Group

9. 総括：世界と看護でつながる未来へ

この15年間、本学の国際交流活動は、アジアから北米、そして欧州へと連携先を広げ、オンライン教育を取り入れながら多様な形で発展してきました。学生は海外の文化・医療に触れ、異なる価値観を学び、国際的な看護観を育んできました。教員は国際共同研究や学会発

表、英語論文執筆などを通じて研究力を高め、学部全体で国際的な教育研究の基盤が確実に構築されてきました。国際交流は、単に海外に行くことではなく、「世界とつながる学びの姿勢」

を育てる取り組みです。これまで培ってきたネットワークと経験を礎に、本学はこれからも「世界と看護でつながる」未来に向け、教育・研究のさらなる発展を目指してまいります。

5 新入生合宿・研修

「未来を支える第一歩」新入生合宿・研修の歩みとその教育的意義

看護学学生生活支援センター長

池西 悦子

大阪医科大学看護学部では、開設初年度の2010年度より、看護学部独自の学外合宿を実施してきました。新入生が大学生生活の第一歩を踏み出すにあたり、看護職としての心構えを養い、教職員や在学生との交流を深めることを目的として実施されてきたこの合宿は、年々その形を変えながら発展してきました。

本稿では、2010年から2025年までの新入生学外合宿および合同研修の歩みを振り返りながら、その背景や教育的意義をたどってみたいと思います。

看護学部単独による学外合宿（2010～2013年）

第1回新入生学外合宿は2010年度、大阪府高石市の大阪国際ユースホテルで実施されました。新入生88名、教職員28名、ライフサポートクラブ員10名が参加し、「本学の特徴を知る」「看護職としての心構えを理解する」「相互理解のための話し方・聞き方を体験する」「参加者相互の交流と理解を図る」という4つの課題を掲げ実施されました。野外炊飯や信頼関係を築くアクティビティ、大学の歴史紹介、心肺蘇生法とAED講習など、体験型のプログラムを通じた学びは、学生の主体性を育む貴重な機

会となりました。

2011年度以降は学生生活支援センターが企画・運営を担い、2012年度には兵庫県篠山市のVIPアルパインローズビレッジで実施されました。在学生も参加するようになり、大学生生活紹介や交流会が加わりました。2013年度には在学生中心の運営体制が整い、学生の自主性を尊重した話し合いの場が設けられました。この時期の合宿は、看護学部の教育理念に基づき、専門職としての意識を育み、人間関係を構築することを重視した内容で構成されていました。特に、在学生が新入生を支えるピアサポートの仕組みが導入されたことは、学生同士の信頼関係を築くうえで大きな成果をもたらしました。



グラウンドにて：心を通わせるレクリエーション

5 新入生合宿・研修

医学部との合同合宿への移行（2014～2019年）

2014年度からは医学部との合同合宿として、ラフォーレ琵琶湖や淡路夢舞台を会場に1泊2日のプログラムが展開されました。「将来の医療職像」「学生生活の在り方」をテーマにしたグループ討議や救急蘇生体験が行われ、98.6%の学生が満足と回答し、医学と看護の両視点から考える機会が得られたという声が寄せられました。

2016年度以降は、グループワークを中心とした討論会が定着し、学生の主体的な発言や協働が促進されました。2018年度には医学部在校生がスタッフとして参加し、学生同士の交流がさらに活発化。2019年度には「より良き医療人になるための手引き作成」をテーマに実践的な討論が行われました。看護学部と医学部の学生が学部の垣根を越えて交流し、互いの専門性に触れることで、医療人としてのアイデンティティ形成に大きく寄与しました。こうした協働の姿勢は、将来のチーム医療を支える重要な基盤となるものであり、医療専門職の教育の一端を担う意義深い活動であったといえるでしょう。

コロナ禍によるオンライン研修（2020～2021年）

2020年度は新型コロナウイルス感染症が拡大した影響により、従来の学外合宿から「新入生合同研修」へと名称を変更し、Webexを用いた遠隔形式で実施されました。大学統合に伴い、薬学部も加わり3学部合同のプログラムへと拡充されました。通信環境の不安定さなどの



コロナ禍オンライン研修にて：画面越しに結ばれる、新しい仲間との絆



表彰式にて：互いの健闘を称え、達成感を分かち合う

課題もありましたが、全員が出席し無事にプログラムを完遂しました。

翌年度には、通信環境の整備や卒業生による講演企画の導入などが進められ、対面開催復帰に向けた体制が整えられました。オンライン教育が広く浸透した中で、対面形式への回帰が本場に最善なのかが問われる転換期でもあり、遠隔形式でも学生の主体性や学部間交流を維持する工夫が求められた時期でした。

年度別実施概要

年度	形式	実施場所	参加学部	主な内容
2010～2013	学外合宿	大阪・兵庫	看護学部	野外炊飯・AED講習・在学生交流
2014～2019	合同合宿	琵琶湖・淡路	医・看	グループ討議・救急蘇生体験
2020～2021	合同研修	オンライン	医・薬・看	Webex使用・卒業生講演企画
2022～2025	合同研修	対面・大阪	医・薬・看	感染対策・グループ討議・AED講習

対面研修の再開と定着（2022～2025年）

2022年度には感染予防対策を講じたうえで、3学部合同の対面研修が再開され、学生間の交流が活発に行われました。2023年度には学生の98%が対面開催を肯定的に評価し、教職員も各プログラムの意義を評価しました。2024年度、2025年度も対面形式で継続して実施され、学生の自発的な参加姿勢や医療人としての自覚を促す内容が重視されました。グループ討論やチューター教員との対話を通じて、学生が将来像を描きながら、学部間連携の重要性を実感する貴重な機会となりました。

2010年度に始まった新入生合同研修は、学部間の連携を深めながら発展を続け、今では導入教育の一環として、大学生活への適応支援と学生の成長を促す重要な取り組みとなっていま

す。形式や内容は時代とともに変化してきましたが、「医療人としての自覚」「学生同士の信頼関係」「学部を超えた協働の姿勢」という根本的な目的は今も変わらず息づいています。

近年では、医療の専門的知識や技術だけでなく、社会人としての自覚や人間形成を支える教育の重要性が高まっており、入学初期から学生の主体性を育み、多面的な成長を支える場としての意義が一層強く認識されています。

これまでの歩みは、学生たちの成長の軌跡であり、大学の教育理念を体現するものでもありました。今後も、新入生合同研修が学生一人ひとりの可能性を育み、大学の教育理念を体現する場として、着実に歩みを重ねていくことを願っています。



集合写真：医学部・看護学部・薬学部が共に歩み出す、医療人への道

健康寿命を支える学びの輪： 市民看護講座から見える地域とのつながり

看護学実践研究センター長

とびたいとこ
飛田伊都子

看護学実践研究センターでは、地域の皆さまの健康増進と看護への理解を深めることを目的に、2012年度より「市民看護講座」を毎年開催してまいりました。本講座は、大学病院看護部との共催ならびに高槻市の後援を得て行い、地域住民、医療関係者、本学教員・学生など多様な参加者が集う場として発展してきました。これまでの講座の歩みを振り返り、テーマ・内容・参加者の反応を整理するとともに、今後の展望について紹介いたします。

1. 講座創設初期の取り組み

第1回市民看護講座は、平成24年（2012年）11月17日に開催されました。「がんとともに自分らしく生きる」をテーマに、「がんになっても安心して治療を受けられるように」と「がんとともに生きる－緩和ケアとは－」の2講座を行い、がん患者や家族への看護・支援の方法を紹介するとともに、自分らしく生きるためのあり方を考える機会としました。参加者は81名で、アンケートでは85%以上の方から「良かった」と評価されました。

第2回（2013年11月2日）は、前年に引き続き「がんとともに自分らしく生きるⅡ」をテ

マに、低侵襲がん治療や抗がん剤治療を安心して受けるための工夫について紹介しました。参加者は161名で、95%が「良かった」と評価し、がん医療の最新情報や日常生活での支援方法を具体的に学ぶ機会となりました。

第3回（2014年11月1日）は、「がんとともに自分らしく生きるⅢ」をテーマに「がん患者の緩和ケアとがん看護専門看護師活動の実際」や「大阪医科大学附属病院における緩和ケアの取り組み」の2講座を行い、がん治療における緩和ケアの重要性や、専門看護師の役割について理解を深める機会としました。参加者は127名で、97%が「大変良かった」「良かった」と回答しました。

2. 健康寿命と生活習慣への関心を広げる講座

第4回（2015年11月7日）は「笑いの力で健康増進」をテーマに、「笑って、元気に、生き生きと」と「笑いは心と身体のリラクゼーション」の2講座を行い、笑いの効用や心身のリラクゼーション、笑いが健康に与える影響や生活の質を向上させる方法が紹介され、参加者にとって実生活に取り入れやすい内容となりました。



第2回



第4回

第5回（2017年3月18日）は「幸せな人生への第一歩『百歳まで自分の足で歩く』」をテーマとし、エクササイズを取り入れた参加型の講演により、健康寿命延伸の観点から生活習慣や運動の重要性を学びました。参加者は113名で、97%が「大変良かった」「良かった」と回答し、高齢者の自立支援や身体機能維持への関心を高める機会となりました。

第6回（2017年11月11日）は「ハハ歯の笑顔で快適生活～歯の健康を一緒に考えよう～」をテーマに、歯や口腔と全身の健康の関係や、日常生活のなかで実践できる正しい歯磨きの方法や健口チェックの方法について学ぶ講座でした。参加者は53名で、「口腔がいかに体全体に影響するかがわかった」といったコメントがあり、口腔ケアの重要性や日常生活への実践につながる内容として好評を得ました。

3. 子ども・シニア・生活習慣への広がり

第7回（2018年11月3日）は「子どもの安全、地域で見守り～誰でも子どもサポーター～」をテーマに、小児看護や災害時の対応について学ぶ講座でした。参加者は20～70歳代の41名で、全員が「大変良かった」「良かった」と回答しました。講座では子どもの心肺蘇生の実技を取り入れることで参加者の理解が深まり、日常生活での安全管理の意識向上に寄与しました。

第8回（2019年11月9日）は「何歳になっても鍛えられる！シニアに適したトレーニングで健康長寿！」をテーマに、食事・運動の観点から健康長寿を考える講座でした。参加者は118名で、97%が「大変良かった」「良かった」と評価しました。具体的な食生活や運動方法が示され、主体的な健康づくりへの意識を高める場となりました。

4. 医療・終末期・生活習慣病への展開

第9回（2022年10月29日）は「“自分らしい



第9回

いのちの終わりかた”をいつ、どうやって選択するか」をテーマに、エンドオブライフやアドバンス・ケア・プランニングについて学ぶ講座でした。参加者は20～80歳代の160名で、うちオンライン参加は53名でした。アンケートでは97%が「大変良かった」「良かった」と回答し、人生の最終段階について考える貴重な機会となりました。

第10回（2023年12月2日）は「生活習慣を振り返り考えよう！循環器病の発症・重症化をどう防ぐ？」をテーマに、循環器病の予防や日常生活での工夫を学ぶ講座でした。参加者は62名で、うちオンライン参加は6名でした。96%が「大変良かった」「良かった」と回答し、生活習慣改善の意識向上につながりました。

第11回（2024年12月14日）は「ロコモ・フレイルを予防しよう！～日常生活の活動維持・向上にむけて～」をテーマに、整形外科医の視点からロコモティブシンドロームやフレイル予防について学ぶ講座でした。参加者は80名で、約9割が「大変良かった」「良かった」と回答し、ロコモトレーニングや運動の必要性、オーラルフレイルへの理解を深めることができました。

第12回（2025年10月25日）は「地域のつながりで健康寿命を延ばそう」をテーマに、集いの場を作るつながりと健康の関係や、整形外科医の視点から健康長寿のためのロコモティブシンドロームの対策について実演も交えて学ぶ講座でした。参加者は92名で、9割以上が「大変良かった」「良かった」と回答し、すぐに実施

6 市民看護講座



第12回

できる運動やロコモ対策など、分かりやすい講演と資料により高い満足度を示しました。

5. 講座が地域にもたらした意義

12年間にわたり開催された市民看護講座は、地域住民が自らの健康や生活習慣を見直す機会を提供し、医療従事者との交流を通して健康支援の意識を高める場となりました。また、大学としての専門的知見を地域に還元する役割も果たしており、参加者からは「実生活にすぐ取り入れられる内容」「自分の生活を見直すきっかけになった」との声が多く寄せられています。さらに、オンライン参加を導入することで、遠方からの参加や多世代の参加も可能となり、講座の裾野を広げることができました。

参加者のアンケート結果から、毎回90%以上の方が「大変良かった」「良かった」と評価

しており、講座が地域住民の健康意識向上に寄与していることが示されています。特に、生活習慣改善、フレイル予防、ロコモ対策といったテーマは、日常生活に取り入れやすく、主体的な健康行動を促す機会となっています。また、医療関係者にとっては、地域住民の視点や疑問を直接知る場としても有用であり、教育・研究・地域貢献が一体となったモデルとして高く評価されます。

6. 今後への展望

市民看護講座は、がん看護・緩和ケアから生活習慣病予防、シニアの健康長寿、子どもの安全、終末期の医療選択まで、多岐にわたるテーマを取り上げ、地域住民の健康意識向上に貢献してきました。また、大学教員や大学病院看護部との連携により、最新の医療情報と実践的な支援方法を提供する場としても発展してきました。

今後は、地域での健康寿命延伸や生活習慣改善、多職種連携の推進などに寄与しながら、より多くの市民にアクセス可能な講座運営を進めてまいります。地域住民が健康で自分らしい生活を送るための学びの場として、講座は今後も持続的に発展していくことが期待されます。

カムカムサロンの歩みと地域活性化への取り組み

看護学実践研究センター長

とびたいとこ
飛田伊都子

カムカムサロン（以後、サロン）は、地域住民の健康寿命延伸を目的として、本学看護学部教員が中心となり展開している市民向け交流事業です。本事業は、高槻市の地域活性化モデル創出を目標とした私立大学研究ブランディング事業の一環として、オーラルケアとゲノム（遺伝情報）を切り口に開始されました。サロン名は、歓迎を意味する「Welcome（ウエルカム）」の「カム」と、咀嚼を意味する「噛む」を掛け合わせて名付けられ、参加者を歓迎するとともに、口腔ケアへの関心を象徴しています。

1. サロンの目的と初期の取り組み

基本的な目的は、地域住民に健康への関心を高めてもらい、日常生活における健康習慣の形成やフレイル予防につなげることです。初期のサロンでは、オーラルケアや健康に関するミニレクチャー、認知症予防体操などを全員に提供するとともに、血圧測定や血管年齢測定などを行い、自身の健康状態を理解し、生活に生かせるよう支援しました。また、口腔内細菌数の測定や足指力測定など、個々の健康リスクに応じた評価と保健指導も実施しました。さらに、日常生活や介護、家族の健康に関する相談にも対応し、地域住民が抱える多様な健康課題に寄り添う場としての役割を果たしました。

2018年10月から2019年11月末まで、サロンは本学キャンパス内で毎週火曜日に開催され、計55回の実施で延べ965名の参加がありました。参加者の年齢はほとんどが70歳以上で、参加のきっかけは講演会で配布されたチラシ、市の広報、友人の紹介などさまざまです。継続

的に参加する方も多く、開設以来ほぼ毎週参加される方が10名、月2回程度参加する方が9名、興味あるテーマに応じて参加する方もいました。以後、参加者の紹介により、毎月2～3名の新規参加者が増え、サロンの交流の輪は拡大しました。参加者からは、「毎日平凡に過ごしていましたが、週1回の講座を受講することで脳の活性や認知症予防につながり、健康に気を遣うようになりました」「楽しみにしており、用事がある時以外は参加したい」といった声が寄せられ、サロンは市民の交流の場として定着しています。

2. サロン運営の課題と学部内での合意形成

2020年度よりサロン運営が看護学実践研究センターの管轄となることから、2019年12月に翌年度のサロン運営に向けて学部教員を対象としたアンケート調査を実施（回収率41%）しました。その結果、運営目的の明確化、時間・人材・運営費の確保が課題として挙げられました。これまでの経緯を踏まえ、サロンの目的や運営主体、運用方法を学部教員に提示し、理解と協力を得ることができました。また、具体的な開催日程やプログラム企画に加え、2020年度より学内での事故や怪我に備えた保険加入手続きも整備しました。また「たかつきモデル」プロジェクトが2021年度で終了したことから、2022年度よりサロン運営は同センターの経費より支出しました。同センター員と他のすべての教員とで運営体制の合意形成を図ることで、持続可能なサロン運営の基盤が築かれました。

7 カムカムサロン

3. COVID-19禍における対応と工夫

2020年度はCOVID-19感染症拡大により対面開催が困難となり、当初予定されていた「青空健康フェスタ」は中止となりました。参加希望者から開催の要望が寄せられたことから、ステイホームでも取り組める体操を盛り込んだお便りを送付し、受け取った方から感謝の返信もありました。2021年度も感染拡大の影響で対面開催はできず、「カムカムサロン健康コラム」として熱中症や栄養に関する情報を郵送しました。

4. サロン再開とオンライン・対面形式での実施

2022年度は、オンラインおよび対面の2回開催となりました。オンラインでは「食事と運動で生活習慣病予防」の講話を行い、参加者から活発な質疑応答がありました。対面開催では「膝痛・腰痛予防」の講話を行いました。オンライン参加に不慣れな方へのサポートとして、事前に電話でZoom使用方法を伝えるなど、時間をかけた対応を行いました。毎回、事前予約制と健康状態確認を徹底し、参加者から次回開催への要望も多く寄せられました。2023年度以降は、看護学部全体のイベントとして地域交流・地域貢献を目的に隔月で継続開催されました。内容は、ミニ講話、健康チェック、健康相談など多岐にわたり、各分野教員が担当しました。2023年度は「フレイル予防」、2024年度は「防災」をテーマに奇数月に実施され、年6回

開催されました。参加者はオンライン・対面両方で募集され各回4名～12名でした。講演内容の評価にはクリッカーや自由記載式のアンケートを活用し、次回開催への改善に反映させました。2024年度には高槻市長寿介護課との連携により「高槻もてもて筋力アップ体操（もてきん体操）」を導入するなど、地域との協働体制も整備されました。

5. 高槻市との共催と安全管理体制の整備

2025年度よりサロンは高槻市との共催体制となり、偶数月は本学部、奇数月は市が担当する形式となりました。本学部が担当する回では、各分野の教員による健康講話のテーマを「高齢者の健康維持・増進に関する内容」とし、参加者が実践できる生活習慣改善や運動、栄養に関する情報を提供しています。市が担当する回では茶話会や介護予防マイスターによるもてきん体操を実施し、健康増進に役立つ活動を提供しています。安全管理については、身体的緊急時には本学病院にて対応し、さらに高槻市により参加者全員の傷害保険加入、暴風警報発令時の中止連絡を徹底しています。また、参加定員は従来の20名から25名に増やし、多くの希望者が参加できる体制を整えました。参加者からは、「体操が楽しい」「健康維持の意識が高まった」といった好評の声が寄せられています。



2023年



2025年

6. 今後の展望

サロンは、地域住民が健康への関心を高め、社会とのつながりを得る場として定着しつつあります。今後は、高槻市との連携協働をさらに強化し、持続可能な運営体制を整備するとともに、地域住民のニーズを把握した企画を進めていくことが重要です。また、参加者の声を反映したプログラムの充実や、学部教育との連携による後継事業の展開も期待されます。サロンを通じて、地域住民の健康寿命延伸や生活の質向上、地域活性化への貢献がより一層進むことが望まれます。サロンは、地域住民と学部教員が共に学び、支え合い、健康で生き生きとした生活を目指す場として、今後も発展していくこと



2025年

でしょう。地域の方々と大学が協働して創り上げるこの取り組みは、地域貢献型の健康教育モデルとして、他地域への展開の可能性も期待されます。

8 看護研究会

看護研究会の歩み：実践知と研究文化を育む学びの共同

看護学実践研究センター長

とびたいとこ
飛田伊都子

看護研究会は、2017年に第1回が開催されて以降、看護学実践研究センターが中心となり、本学教員、大学病院看護師、地域の看護職者、大学院生、そして本学部卒業生など多様な立場の参加者が集い、看護実践や研究について活発に意見交換する場として発展してきました。これまでの研究会の歩みを体系的に振り返り、どのような活動が行われてきたのかを整理し、その意義と成果、さらに今後の可能性について紹介いたします。

1. 研究会創設の背景と目的の深化

第1回研究会（2017年）は、看護学部開設から7年、大学院設置から3年という節目の年に

当たり、地域に根ざした看護実践研究を推進するという設立趣旨を具現化する場として企画されました。当初は「看護実践研究センター活動報告・研究活動報告会」として培ってきた取り組みをより発展的に捉え直し、実践に根ざした研究成果を地域と共有すること、そして議論と相互学習が促進される場とすることを目的としていました。

第1回から第6回までの目的は「発表の場の提供」から「研究文化の形成」「地域連携の強化」「実践と研究の往還を促す構造づくり」へと深化していったことが分かります。研究会は単なる年次イベントではなく、地域看護職者と大学が知識を交換する“ハブ”として機能し、

8 看護研究会

実践を研究へと昇華する「きっかけづくりの場」として確立されていきました。

2. 講演会のテーマ

これまでの看護研究会で行われた講演は、以下の通りです。

・第1回：地域文化とケア力

看護実践の背景にある文化的感受性や地域性の重要性が示され、地域と連携する大学としての使命を再確認する機会となりました。

・第2回：楽しい認知症とそのガクジュツ的考察

認知症ケアの新しい視点が共有され、認知症を「楽しむ」視点を取り入れた先進的内容でした。

・第3回：健康増進のための運動・身体活動・スポーツ

運動と健康増進分野との融合が図られ、他

領域との協働可能性を開く内容となりました。

・第4回：コロナ禍の今だからこそ必要になる心の問題に定位した質的研究の構築～理論から実践へ～

感染症流行下のケア課題に焦点が当てられ、質的研究を通じた実践理解が重視されました。

・第5回：研究の成果を社会で活かすまでの課題と工夫～高齢者の認知機能低下に関する研究を通じて～

最前線の介護予防研究をご紹介いただき、研究を発展させ、研究成果を社会で活かす上での課題や工夫などについて講演いただきました。

・第6回：ビッグデータを活用した産学連携研究の進め方

看護研究の新たな潮流として、データサイ



第1回 講演会での楽しそうな光景



第7回 研究交流会の様子



第2回 大盛況の会場



第9回 卒論を発表する学部生

エンスや企業連携を含む先端的アプローチが示されました。

- ・第7回：調査研究の進め方—質問票作成上のポイント—

調査研究の具体的な例が示されたことで、大変理解しやすく、研究活動に結びつく内容でした。また、量的研究に対する苦手意識の改善にも役立ったようです。

- ・第8回（2025年）：看護実践研究のために必要な医療統計の基礎知識

量的研究の進め方や統計解析の重要なポイントについて、非常にわかりやすく解説され、今後の研究に役立つ知見を多く得られる貴重な講演でした。

3. 一般演題による研究交流

- ・第1回（2017年）：演題数12題

大学病院看護部、本学教員、大学院生、地域病院看護師と、多様な立場からの発表が揃い、看護実践の広がりを示しました。急性期から在宅、老年、教育、管理と幅広い領域の研究が発表され、研究会の「間口の広さ」を象徴する回となりました。

- ・第2回（2018年）：演題数13題

認知症ケアや在宅看護、質的研究法を活用した研究など、テーマの深まりが見られた回でした。大学病院看護師の参加が増加し、若手看護師の研究参加が目立ち始めた点が特徴的です。

- ・第3回（2019年）：演題数18題（学生演題を含む）

学部4年生による初の演題発表が行われ、学部・大学院・臨床が連続する「縦の学び」が研究会の特徴として現れた回でした。研究指向の育成が進んだ時期といえます。

- ・第4回（2021年）：演題数4題（オンライン併用）

コロナ禍の影響により初めてハイブリッド形式が導入されました。精神看護、感染対

策、教育支援など、社会的状況を反映したテーマが増加し、オンライン参加の容易さから、これまで参加しづらかった看護師の参加も見られました。

- ・第5回（2022年）：演題数4題

前期高齢者男性の在宅支援ニーズや新人看護師指導者の経験、日本の大学生の避妊状況、コロナ下の乳幼児家庭の育児環境の変化などが報告されました。

- ・第6回（2023年）：演題数4題

母子同室の課題、PICS早期発見の教育効果、股関節鏡視下手術後の疼痛変化、高齢者の通院可能範囲の分析など、臨床現場の課題解決に向けた取り組みが紹介されました。

- ・第7回（2024年）：演題数9題

訪問看護や病棟看護における災害対策、情報共有、多職種連携、終末期ケア、高齢・がん患者支援などの取り組みと課題が報告されました。

- ・第8回（2025年）：演題数14題

がん患者やその家族のQOL・情報ニーズ、抗がん薬治療の有害事象や内服アドヒアランスに関する文献レビュー、産科・新生児・思春期障がい児ケアにおける実践的対応や育児支援の現状、看護師のメタ認知・ナレッジブローカリング・リフレクション研修の評価、さらには神経障害患者の障害受容過程や婦人科尿路失禁改善のための介入研究など、多様な看護・医療分野の研究が紹介されました。

このように、各回の演題数やテーマの変遷は、研究会が「臨床の知」と「学術研究」を結びつける場として定着し、深化してきたことを明確に示しています。

4. 社会的視点を取り込む研究会へ

第5回以降は、看護研究の社会的意義がより重視され、社会実装・産学官連携・ビッグデータなど、研究成果が社会にどう影響を与えるかが議論の中心となりました。これは、看護研究

が求められる役割の変化を敏感に反映した取り組みであり、研究会の先進性を示すものです。さらに、最近では社会的要請が研究会のテーマに反映され、研究会が地域医療の発展に実質的に寄与していることが示されました。

5. 研究会が育んできた価値

本研究会の積み重ねは、次のような価値を育ててきたように認識しています。

- ・研究文化の醸成：発表や討議を通じ、臨床実践を研究へつなげる視点が根づきました。
- ・地域連携の拡大：地域病院との教育・研究協働が深化し、地域完結型の研究支援体制が形成されました。
- ・キャリア形成支援：大学院進学の動機づけや若手看護師の研究意欲向上に寄与しました。
- ・実践知の可視化：臨床での創意工夫や判断を共有する機会を提供し、知識循環を促進しま

した。

- ・研究方法の多様化：質的・量的・ビッグデータ分析など、多様なアプローチを紹介し、研究の裾野を広げました。

6. 総括と今後への展望

大阪医科薬科大学看護研究会は、「大学が地域と協働しながら看護の質向上に寄与する」という使命のもと、「大学－大学病院－地域」をつなぐ知の循環拠点として立場を築いてきました。今後は、演題データの蓄積と分析、研究成果の社会実装、AI活用や多職種協働の深化など、さらなる発展の可能性が広がっています。研究会が育んできた学びの共同体は、大学と地域がともに成長し続けるための重要な基盤であり、今後も看護の未来を切り拓く場としての発展が期待されます。

9 リカレント教育

看護の未来を支える学び直し － OMPU リカレント教育の挑戦 －

看護キャリアサポートセンター長

まつぎ かずこ
真継 和子

大阪医科薬科大学看護キャリアサポートセンターは、文部科学省令和3年度「DX等成長分野を中心として就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業」採択を契機に、令和4年7月に開設されました。変化する社会や制度、複雑化する医療ニーズに応え、地域社会に貢献できる看護人材の育成と看護職のキャリア支援を目的としています。

2022年度は、最初の事業として「ティーラメイドカリキュラムにより潜在看護師の希望を

実現するリカレント教育プログラム」を開催しました。看護倫理や看護技術などの基礎科目に加え、ICTを活用した授業展開、ハイブリッドシミュレーターによる演習、臨地実習を取り入れ、看護実践力の強化を図りました。キャリアコーディネーターによる学習・復職相談など、きめ細やかなサポート体制も整備し、第1期生20名が復職への第一歩を踏み出しました。

2023年度は、文部科学省令和4年度「成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント



教育推進事業」に採択され、「エキスパートHOMEナースを目指す人材育成プログラム“OMPU・HOMEステーション学び場”」を開始しました。潜在看護師向け復職支援、訪問看護師向け基礎・専門コース、シミュレーション研修など7つのプログラムを展開し、地域包括ケアを担う人材育成を進めました。受講生一人ひとりのニーズに応える支援を重視し、専門看護師や認定看護師、看護学部教授陣の協力を得て、OMPUにおける看護の力を結集した学びの場を築きました。

2024年度は、人生100年時代に対応した学び直しの重要性を踏まえ、9つの研修プログラムを企画しました。前年度企画に加え、高齢者看護やエンド・オブ・ライフケアに関するELENEC-J高齢者カリキュラム、教育担当者向けセミナーなどを開講。リフレクションやグループワークを取り入れ、看護師自身の実践を意味づける学びを重視しました。修了生からは、「知識や技術の習得はもちろん、仲間ができたことで心強くなった」「研修を通じて地域の他施設との連携がしやすくなった」といった声が寄せられています。学びがキャリア形成だ



けでなく、地域連携の強化にもつながっていることを実感しています。

2025年度は、受講者獲得に向けてオンデマンド講座を新設し、時間や場所に制約されない学習環境を整えました。これにより、働きながら学びたい看護職や遠隔地の方々にも受講機会が広がっています。さらに、認定看護師教育課程2分野（がん薬物療法看護・緩和ケア）の2027年4月開設を目指し、準備・申請を進め、承認を得ることができました。これにより、専門的かつ高度な実践力をもつ看護師の教育体制が一層強化され、地域医療の質向上に寄与することが期待されます。

医療・看護を取り巻く環境は、超高齢社会、DX化、災害対応など大きな変革期にあります。当センターの課題は、看護職のニーズに合った研修を、より受けやすい形で提供し続けること、そして受講者の確保です。これからも看護職の声を大切にし、地域に根差した学びの場として、キャリアの多様化と自己実現を応援してまいります。

大学院看護学研究科教育概要と社会的要請に応える 教育のさらなる充実をめざして

大学院委員長

くさの えみ こ
草野恵美子

本学大学院看護学研究科は2013年10月に設置認可され、2014年度に博士前期課程・博士後期課程を同時に開設し、大学院での看護学教育が開始され10年が経過いたしました。初代看護学研究科長には林 優子教授（現在は本学名誉教授）が就任し、2014年6月には看護学研究科開設記念式典が挙行されました。今回の記念式典同様、宇宙を題材にした記念講演も行われ、これから行われる大学院での様々な研究が宇宙のように社会に広がっていく可能性を感じ、心が躍ったことを思い出します。

看護学研究科は、本学学則第1条にある理念「本学は、建学の精神及び学是（至誠仁術）に基づき、国際的視野に立った教育、研究或いは良質な医療の実践をとおして、人間性豊かで創造性に富み人類の福祉と文化の発展に貢献する医療人を育成する」および大学院学則第1条「研究者、教育者或いは医療人として自立して活動を行う、に必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする」をもとに、博士前期課程・博士後期課程において教育展開をしています。これまで多くの教育研究者や専門看護師等の高度看護実践者を輩出してきました。その数は2025年3月で110名にのぼります。各課程の教育概要と今後の展望について以下に述べます。

1. 博士前期課程の教育概要

博士前期課程では、「豊かな学識とグローバルな視点を基盤に、看護学の深奥を窮めることができる教育研究者及び高度実践看護専門職者を育成すること」を目的とし、「教育研究コー



ス」と「高度実践コース」（定員計8名）を設置し、下記のディプロマポリシーを掲げ、教育研究者や高度看護実践者を育成しています。博士前期課程では標準修業年限は2年であり、修了することにより、修士（看護学）の学位を授与します。

■ディプロマポリシー（共通）

- 1) 豊かな人間性と高い倫理観を基盤に教育研究・看護実践の場で倫理的に行動できる。
- 2) 教育研究者や看護職者の教育指導ができる高度な知識・技術を有し、論理的・批判的に思考できる。
- 3) グローバルな視点と多様な文化に対する見識をもち、看護学の発展に積極的に貢献できる。

教育研究コースでは、①専攻分野に関する広く深い知識をもち、教育・研究指導力を身につけている、②看護現象を論理的かつ科学的に探究するための研究遂行能力を身につけている、③看護学教育及び看護実践の質改善に貢献できるといったコース独自のディプロマポリシーのもと、教育研究者になるにあたって必要な教育学の基本を学ぶとともに、研究基礎能力の育成に力を入れています。本コースでは看護教育

学、看護技術開発看護学、人文社会学、移植、再生医療看護学、がん看護学、慢性看護学、精神看護学、老年看護学、臨床医学、母性看護学、小児看護学、地域看護学、在宅看護学、社会医学の14の分野で院生を受け入れています。

初めて本格的な研究に臨む院生がほとんどであり、特に研究計画を立てるプロセスでは指導教員と一緒に悩み、時には苦しみながらも、看護実践現場へ貢献できる研究となるよう、ブラッシュアップを重ねます。その後は教授会を経て倫理申請となりますが、倫理審査委員の先生方からの意見をもとに修正し倫理的な問題点がないか確認することはもちろんのこと、倫理審査の過程を経て、より洗練された研究計画になっていきます。その後はデータ収集となりますが、その方法は研究デザインによって違いますが、いずれの研究でもデータを取得する難しさはあり、そのための研究協力施設へのお願いなどや必要な予算の確保など、研究実施体制の構築プロセスの基本を学ぶことも、将来、自立的に研究を行っていくにあたって重要な学びであると思います。そして、分析、論文作成、発表会、審査を経て、修士号を取得します。教育研究コースの学位論文は、第1部の文献研究論文と第2部の本論文で構成されます。言うまでもなく大学院は受け身の姿勢で学ぶ場ではありません。そして他の誰もが明らかとしていない研究課題に取り組むわけですから、おそらくほとんどの院生にとって大学院での学びに予想の何倍もの苦勞を感じていると思います。しかしながら、これを乗り越えることで、臨床・現場での疑問を研究疑問として研究的手法を用いて科学的に解決していくことに面白さも感じられれば…と思います。

高度実践コースでは医療の複雑化・高度化、社会のニーズに応える高度実践看護師の育成を目指し、2014年看護学研究科開設時から「慢性看護学」「精神看護学」「母性看護学」「小児看護学」の分野で教育を開始しています。その

後、2018年には「がん看護学」、2020年には「老年看護学」においても育成を開始し、専門看護師（CNS）の育成を行っています。さらに2021年にはナースプラクティショナー（NP）（プライマリケア看護学）の育成を開始いたしました。高度実践コースの詳細については、他の章にてご紹介します。

2. 博士後期課程の教育概要

博士後期課程では、「博士後期課程は、豊かな学識とグローバルな視点を基盤に看護学の深奥を窮めることができ、国際社会に貢献できる自立した教育研究者を育成すること」を目的として、下記のディプロマポリシーのもと、看護学をより発展させ、その成果を社会に発信していくために、自立して研究活動ができる高度な研究能力を持った教育研究者や指導者を育成することを目指しています。博士前期課程同様の14分野で受け入れており、定員は3名です。博士後期課程では標準修業年限は3年であり、修了することにより、博士（看護学）の学位を授与します。

■ディプロマポリシー

- 1) 体系的に活動できる教育能力と高度な研究能力をもち、教育研究の開発に貢献できる。
- 2) 教育や看護実践の場において科学的根拠や研究的視点をもって提言ができる中枢的指導力や統率力を身につけている。
- 3) 学際的、グローバルな視点から専門的課題を探究し、看護学の知識体系の発展に貢献できる。

博士後期課程では、修了後は自立した研究者となることを目指します。研究はその1回では解決しないことがほとんどであり、将来的にどんな社会の課題を解決していくのかを念頭に置きながら、それまでの研究全体のプロセスを俯瞰しつつ、どのようなステップが必要なのか、そして博士後期課程の期間ではどのステップの研究課題に取り組むのか、といった研究構想力

が非常に重要であると思います。そして、その研究成果は当然のことながらオリジナリティが必要であり、そのオリジナリティと現場への還元を社会に認めてもらえる研究が求められます。

このことから、本学看護学研究科での博士後期課程の学位申請条件としては、本研究の前段階となる第1研究と本研究（第2研究）の2本以上の論文が基準を満たす学術誌に掲載（予定含む）されていることを必須としています。これに向けて、第1および第2研究の研究計画をたて、発表会での意見をもとに精練させて、教授会、倫理申請、論文執筆と投稿、学位論文の作成、審査、発表という流れとなります。

博士前期課程との大きな違いは、ステップをふんだ研究構想と学術誌のアクセプトを得るといった外部審査の要素が入ってくるかと思えます。標準修業年限は3年ですが、論文投稿と査読対応を考えると、査読期間にもよりますが、基本的には2年少しで本研究のデータ収集を完了させなければならず、計画的に取り組むことが必要となります。その努力に加えて、学術誌のアクセプトを得るというコントロールが難しい外部要因もあり、学位申請まで緊張感が続きます。しかしながら、無事にアクセプトを得て、審査を受ける頃には、「自分の研究」として自信を持ち、自分の分身のように感じているように感じます。

3. 看護学研究科での学びの特長

いずれの課程でもコース共通して、講義では基礎的知識の教授だけでなく、院生自身が主体的に学びを深め、その成果をプレゼンテーションしてディスカッションする双方向的講義が多く行われています。大学院は受け身で学ぶ姿勢では目標を達成できないため、院生は最初は苦労することも多いかと思いますが、これらの学びの積み重ねにより徐々に自信を高めているのではないかと推察しています。

また主指導教員1名と副指導教員2名（他分野1名を必ず含む）によるグループ指導体制をとり、多様な視点からの指導を行っています。また定員が少ない大学院ですので、各分野で必ずしも同期や先輩・後輩がいるとも限らず、多角的な視点からのクリティカルな議論や学び合うゼミ機能もグループ指導体制が補完していると感じます。発表会ではより教育的な質問を行い、研究科全体でその研究を支援しています。

研究の支援としては、他にも、学費が国公立大学並みであることに加えて、院生個人に研究費が支給されるといった経済的支援が特長の1つとして挙げられます。研究実施に必要な経費や学会や研修への参加などに充てられています。特に博士前期課程では研究をスタートさせる環境づくりに役立っていると思われます。

そして本学の院生はほとんどが社会人であり、予定する年限での修了を後押しすることを重視しています。仕事と学業、そしてプライベートの生活の両立をはかることは至難の業です。長期履修制度（標準修業年限と同じ授業料で1年延長が可能）や夜間・土曜開講の体制を整えています。ただ、それだけでは難しい現状があります。指導教員そして何より院生本人の「修了する」という意識を常にもつことを基盤としつつ、定期的なグループ指導や計画発表会（博士後期は中間発表会）での発表等を必須として「学修のマイルストーン」のように設定するなどの環境整備で、予定修業年限での修了を後押ししています。

4. 大学院教育のさらなる充実に向けて

開設10年がたち、大学院での課題も変化しつつあります。

まずは定員管理です。ありがたいことに、1回の入試でほぼ定員を確保していますが、博士前期課程はさらなる安定的な確保が必要と考えます。社会ニーズにあわせた分野設定なども検討が必要です。逆に博士後期課程は定員超過

が続いています。周辺他学の新設状況も鑑みつつ、定員増加の検討が必要と考えます。

次に社会のニーズの変化に対応できる教育課程の充実が挙げられます。具体的にはまず博士後期課程へのDNP（Doctor of Nursing Practice）コースの設置を構想しています。このコースでは、エビデンスを実装できる能力を養い、看護の質改善や組織の変革を担うことのできる高度実践看護師を育成するものです。博士後期課程は今や教育者・研究者になるためだけの教育課程ではありません。本学でも博士前期課程でCNSやNPといった高度実践看護師を要請していますが、この修了生がさらに研究的手法を駆使し、その成果を社会実装できるといった次なるステージへ踏み出す土台を提供できればと考えています。

また昨今、国が推し進めている「学部・修士5年一貫教育」を保健師教育において展開することも構想中です。この教育は大学院進学者を増やし、国際的に通用する高い専門性を身につけた人材輩出を狙ったものとされています。地域社会の健康ニーズはより多様化・高度化しており、学部での保健師教育だけでは不足する能力をどのように強化するかが課題です。そのための方策は様々あるかと思いますが、本学ではこの仕組みを活かし、大学院にて不足する保健師として必要とされる専門能力の強化と研究基礎力を身につけられないかと考えています。

いずれも教育の質担保を第一に、今後具体的な検討を進めていきます。これらの新たな教育展開の検討とともに、10年を節目にベースとなる現在の教育を見直し、より充実した大学院教育の発展に寄与すべく、大学院委員会としても尽力していきたいと思えます。



講義でのディスカッションの様子



論文発表会の様子

おわりに、これまでの10年間を振り返り、まずは本学で初めての大学院での看護学教育を開始するにあたりご理解・ご尽力くださった法人・大学をはじめとする関係者の先生方に感謝申し上げます。またこの大学院教育を持続的に運営するために多くの皆様に支えられています。院生の研究を行うためには研究にご協力いただく患者様・看護職・地域の皆様、倫理委員会・事務局などのご協力が欠かせません。そして高度実践コースでは、実習施設・実習指導者の皆様にもお世話になっております。そしてこの教育を縁の下で支えてくださる看護学事務課をはじめとする学務部や各事務部門の皆様、そして院生の研究指導だけでなく心理的支援も含めて昼夜ご尽力くださっている教員の皆様に改めてお礼申し上げます。今後ともどうぞよろしく申し上げます。

大学院看護学研究科博士前期課程高度実践コースの教育概要

大学院委員長

くさの えみ こ
草野恵美子

大学院看護学研究科博士前期課程には、主に教育研究者を目指す教育研究コースと高度実践看護師を目指す高度実践コースの2コースを設置しています。

専門看護師（Certified Nurse Specialist、以下CNS）は特定の専門看護分野において卓越した看護実践能力をもつ看護師です。教育課程の認定を日本看護系大学協議会（JANPU）が、資格認定を日本看護協会（JNA）が行っています。またナースプラクティショナー（以下NP）については、本学では「日本看護系大学協議会ナースプラクティショナー（JANPU-NP）」の認定審査受験資格を得ることを目指し、JANPUによる「プライマリケア看護」の教育課程の認定を受けています。

本学における高度実践コースでは以下のディプロマポリシーのもと、CNSやNPといった高度実践看護師を育成しています。

■高度実践コースのディプロマポリシー

- 1) 専攻分野において優れた臨床判断能力と看護実践能力を身につけている。
- 2) 多職種・組織と連携・協働し、より良いケアを行うために必要な高いコミュニケーション能力と調整能力、指導力を身につけている。
- 3) 看護実践上の課題を明確にし、研究的かつ組織的に課題解決ができる基礎的能力を身につけている。

CNSは、看護師として5年以上の実践経験を持ち、看護系の大学院で修士課程（博士前期課程）を修了して必要な単位を取得した後に、専門看護師認定審査に合格することで取得できる資格です（日本看護協会）。CNSの6つの役割

「実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究」を果たし、施設全体や地域の看護の質向上に貢献します。本学では2014年看護学研究科開設時から「慢性看護学」「精神看護学」「母性看護学」「小児看護学」の分野で教育を開始しています。その後、2018年には「がん看護学」、2020年には「老年看護学」においても育成を開始し、CNSの育成を行っています。

また本学で養成しているNPは、日本看護系大学協議会ナースプラクティショナー（JANPU-NP）ですが、その資格認定規程第3条によると、JANPU-NPは「保健医療福祉現場において病院・診療所等と連携して、現にまたは潜在的に健康問題を有する個人や家族、集団、コミュニティに対してケアとキアを統合し、一定の範囲で自律的に、治療的もしくは予防的介入を行い、卓越した看護を提供することが認められた高度実践看護師」とされています。求められる役割はCNSと同様、「実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究」の6つの役割があります。本学では2021年に育成を開始しました。

本学ではこれまでに、計21名の高度実践看護師を輩出してきました。内訳は次の通りです。

■これまでの高度実践看護師（CNS、NP）合格者（2025年12月現在）

慢性疾患看護専門看護師	4名
精神看護専門看護師	1名
小児看護専門看護師	5名
がん看護専門看護師	4名
老人看護専門看護師	4名
ナースプラクティショナー（JANPU-NP）	3名

(※科目等履修生として本学でCNS科目を修得した1名を含む)

なお、「がん看護学」分野では、現在、文部科学省「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」事業において、【正規課程】がんサバイバーの身体的・精神的・社会的ケアや再発予防ケアを担う看護師養成コースに4名の履修生を確保しています。この事業は、がん医療の新たなニーズや急速ながん医療の高度化に対応できる医療人養成を促進する必要性から、これらの状況を踏まえたがん専門医療人材を養成するため、優れた教育プログラムを開発し、大学間で連携し、開発・提供を担う拠点を支援するものです(文部科学省)。「がん看護学」分野では履修生の確保と教育の他、講演会の開催や研究推進等による人材育成を行い、社会に還元しています。

高度実践コースに入学すると、学内での講義・演習の他に、臨床現場での実習がありますが、教育研究コースとの大きな違いです。本学の場合、教育研究コースの院生と同様、多くは社会人ではありますが、実習があるため、基本的には在学中は休職する院生がほとんどです。大阪医科薬科大学病院のように、休職中の経済面を含めたサポートがある病院もあります。CNSの実習はその分野でのスペシャリストになるためのものであるため、当然のことながら、ハイレベルな到達度を求められます。CNSやNPの6つの役割「実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究」に基づき、各実習でそのテーマに応じた実習をすすめ、時には現場に働きかけます。2年生の7月には実習成果の報告会を行っており、自身が行った看護実践や実習目標の到達度、得られた学びについて発表し、参加者とともにディスカッションをしてリフレクションを深め、さらに良い看護へとつなげていきます。この内容を聞いていますと、このような看護を受けられると患者・家族としてはとても心強いだらうなと思うことが多々あり

ます。高度実践コースに入学してくる院生は、受験資格として本学では少なくとも3年以上のその分野での経験があることとしており、それ以上の経験を保有していることが多く、一定の実践は身につけています。しかしながら、高度実践コースで学ぶことにより、よりスペシャリストとしての力を身につけていくことはもちろんのこと、患者・家族や看護実践現場に対して、自分の看護がどのような波及をもたらすか、改めて自身の看護を振り返る機会ともなっているのではないかと感じています。

CNSやNPに求められる役割には「研究」もあります。本学では「課題研究」という科目の中でその力を身につけています。高度実践コースは実習もありますので、「課題研究」は教育研究コースの「特別研究」より単位数が少なく設定されています。学位論文としても教育研究コースは文献研究+本研究を求められますが、高度実践コースは本研究のみとしています。しかしながら本学の「課題研究」の学位論文の審査をしていると、「特別研究」と変わらないレベルの研究が行われていると感じます。実習等で多忙なスケジュールの中、研究を行うことで、自身の看護のエビデンス構築や修了後の現場での研究の展望につながる実感を得ることができているのではないかと思います。

博士前期課程での修了後のサポートですが、教育研究コースも論文投稿のサポートなどが続きますが、加えて高度実践コースでは修了後に資格認定を受けるため、担当教員は勉強会の開催などのサポートも行っています。合格したと



きは学内全体で共有するのですが、その修了生の授業での様子や取り組んだ研究、様々な努力が思い出され、本当によかったなと思います。ご指導の先生方には改めて敬意を表しますとともにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

大学院委員会としては、教育研究コースと同様、これらのカリキュラム運営、院生サポート、予定年限での修了支援を行うとともに、高度実践コースの運営として特徴的なものとして教育課程の10年ごとの更新が挙げられます。最初に認定された「慢性看護学」「精神看護学」「母性看護学」「小児看護学」はすでに1回更新しています。これから「がん看護学」、「老年看

護学」、NPの「プライマリケア看護学」の更新が控えていますが、粛々と進めつつ、教育課程を見直す良い機会とできればと考えています。

そして刻々と変化する社会のニーズを意識し、既存の教育にとらわれず、「どのように進化していけばよいか」「現場に貢献できているか」を常に念頭におき、さらに質の高い大学院教育を目指していきたいと思います。いつもご支援頂いている皆様には厚く御礼申し上げます。今後ともご支援賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

11 コロナ禍への対応①

コロナ禍への対応 —協働で築いた新しい学び—

看護学教育センター長

まつぎ かずこ
真継 和子

2020年春、新型コロナウイルス感染症の猛威は、看護学教育に前例のない影響を与えました。授業や実習の中止、感染防止対策の徹底など、従来の教育方法に通用しない状況に直面しました。学生の学びを途切れさせないことを最優先に、学部全体で協力し、実習施設や大学関係部署と連携しながら試行錯誤を重ねました。この過程で、ICTを活用した授業設計や感染対策の仕組み化など、危機を乗り越えるための工夫が新しい教育の可能性を広げました。

1. 授業での取り組み：ICT活用と柔軟な授業設計

2020年度は、緊急事態宣言により授業開始を一時見合わせ、事前課題を発送して学習の連

続性を確保しました。その後、オンライン授業への移行を急ぎ、オンデマンド教材の整備、教員向け研修、学生への接続テストを実施しました。パソコン環境の調査と貸与により、学修機会の公平性にも配慮しました。6月からは段階的に対面授業を再開しましたが、密を避けるため講義室間の映像・音声継を整備し、分散授業を実施しました。後期は、対面授業とオンライン授業（Zoom）を組み合わせたハイブリッド授業を導入しました。機器の不具合や通信障害が生じた際には、緊急アンケートにより学生・教員の声を集め、時間割や運用方法の見直しなど、柔軟な対応を重ねました。

2021年度は、感染状況に応じて「対面」「ハイブリッド」「前面オンライン」の3つの様式

を設計し、必要に応じて切り替えました。試験は監督体制を確保し、複数教室での分散実施を行いました。2022年度は、原則対面授業に戻しつつ、感染や濃厚接触時にはオンライン受講（Zoom）を認める柔軟な運用を継続しました。授業方針は毎月UNIPAで周知し、変更点や注意事項を早期に共有して学修の混乱を防ぎました。2023年度には、新型コロナウイルス感染症が第5類感染症に移行し、オンライン受講の特別措置も廃止しましたが、状況変化に応じた対応を検討し続けました。2024・2025年度も、感染状況を注視しながら予防策とタイムリーな情報発信を継続し、安心して学べる環境の維持に努めてきました。

こうした取り組みを通じて、ICTを活用した授業設計が定着し、オンラインと対面を適切に組み合わせる柔軟性が培われました。また、学習環境調査や運用マニュアルの作成など、学修機会の公平性を支える仕組みづくりの重要性を改めて認識しました。

2. 実習でのとりくみ：安全確保と協働による実習継続

臨地実習では、感染防止と教育の両立という難題に直面しました。2020年度は、健康観察や行動記録の義務化、感染対策物品の調達を徹底しました。緊急事態宣言による実習生の受け入れ中止時には、施設や病棟の変更を迅速に調整し、学内実習に切り替えるなど、学生への不利益が最小となるよう努めました。2021年度は、感染症対応マニュアルを改訂し、判断基準や報告体制を明確化するとともに、実習前検査や保健管理室への体調相談の仕組みを整え、受け入れ中止時の代替調整を行いました。2022年度は、施設要請に応じた抗原検査の導入とワ

クチン未接種者への対応を強化し、補習や追実習に実施により学修機会を保証しました。2023年度以降は、第5類移行に合わせて対応を簡素化しつつ、感染状況を注視しながら予防策を維持し、学生が安全に学べる環境の確保に努めました。

こうした対応に加え、多くの看護系大学で学内実習が主流となる中、本学では一部を除き臨地実習を継続することができました。これは大学病院をはじめとする実習施設の皆さまの格別のご理解とご支援があつてこそ実現したものであります。一方で、学内実習が必要となった際には、受持ちケースを施設から提示いただき、オンラインカンファレンスで看護計画を共有しました。実施段階では、模擬患者（学生）やシミュレーターを活用し、観察、アセスメント、ケアの実施、評価までの学習サイクルを担保しました。感染対策の徹底とともに、補習実習や追実習の体制も整え、学生の不利益を防ぐ対応を続けました。この過程で、実習施設との協働、柔軟な調整力、感染対策の仕組み化が教育の質を支えることを改めて学ぶことができました。

3. 学びと今後の展望

コロナ禍での取り組みは、教育の在り方を見直す契機となりました。ICT活用と情報共有の仕組み、施設との協働と安全管理の標準化は、学修の連続性を支える要点です。授業と実習の双方で得た経験を活かし、学生にとって意義ある学びを提供できるよう、さらに実習施設との連携強化を続けてまいります。この場を借りて、多くの方々のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

「危機の中で育まれた支援のかたち」

— 新型コロナウイルス感染症への対応と看護学部の支援活動 —

看護学学生生活支援センター長

いけにし えつこ
池西 悦子

2020年3月、新型コロナウイルス感染症の感染者数が全国的に急増し、4月には政府による初の緊急事態宣言が発令されました。大学では授業のオンライン化や登校制限が急速に進み、学生生活は大きく変化しました。対面での学びや交流、課外活動が制限される中、学生たちは戸惑いや不安を抱えながら、新たな生活様式への適応を余儀なくされました。このような未曾有の状況下で、学生生活支援センターは、学生が安心して学び続けられるよう、柔軟かつ丁寧な対応を重ねてきました。

初期段階では、感染拡大防止のための健康管理体制の整備が急務となり、健康観察票と行動記録票の作成・配布を早期に開始。実習期間中にはマスク着用と健康記録の提出を必須とするなど、感染防止に努めました。同時に、学生の精神的なケアも重要な課題となりました。登校制限が続く中、外出や友人との交流が制限されることによる孤独を感じる学生が少なくなく、特に一人暮らしの学生にとっては、体調不良時の不安や、誰とも言葉を交わさない日々が精神的負担となりました。こうした状況に対応するため、チューター制度が重要な役割を果たしました。教員が定期的に学生と連絡を取り、面談を通じて不安や悩みに寄り添いました。

学生が安全かつ安心して学内で過ごせるよう、学内環境整備にも力が注がれました。

手指消毒剤や非接触型体温計の設置、トイレ前の立ち位置表示など、細部にわたる感染予防策が講じられました。ポスターや案内表示による啓発活動も随時更新され、黙食の徹底やアクリルパーテーションの設置など、学生の行動変容を促す工夫が重ねられました。

保健管理室との連携も重要な役割を果たしました。陽性者や濃厚接触者への対応、ワクチン接種状況の確認、実習前の抗原検査など、医学的支援体制が整備され、学生の健康を多角的に支える体制が構築されました。

また、学生自身による主体的な取り組みも大きな力となりました。グループLINEを活用した情報共有や、総代・副総代を中心とした意見集約により、学生の声を大学側に届ける仕組みが築かれました。

学生同士のつながりを育む機会の確保も、重要な課題の一つでした。2020・2021年度の新入生合同合宿は中止となりましたが、「友達をつ



学内入口にて：対面授業に向けた、ソーシャルディスタンスの呼びかけ



学内入口にて：徹底した感染対策で学びの場を守る

くる機会がない」「他学部との交流を増やしてほしい」といった声に応える形で、2022年度からはオンラインによる新入生合同研修が開始され、2023年度には感染対策を講じたうえで対面での交流も再開されました。

2023年5月には、感染症法上の「5類感染症」への移行に伴い、大学の感染対策も転換期を迎えました。講義室や演習室の一部を自習室として開放するなど、学びの場は徐々に通常の形へと戻りつつあります。一方で、医療系学部にお

ける実習では、引き続き感染対策が求められ、柔軟な対応が継続されています。学生の安全と健康を守りながら、実践的な学びを確保するための取り組みは、今なお重要な課題として位置づけられています。

学生生活支援センターは今後も、学生一人ひとりが安心して学び、充実した大学生活を送ることができるよう、教職員や保健管理室との連携を深めながら、きめ細やかな支援を続けてまいります。

第5章

寄稿

看護学部での学びを通して、知識や技術だけではなく、患者に寄り添う姿勢の大切さを実感しました。実習や授業を通して、先生方や仲間から多くのことを学び、自分の看護観を形にしていくことができます。15周年という節目に在学していることを嬉しく思い、今後も学びを活かして看護師として成長していきたいです。

(2022年度入学生)

看護学部開設15周年おめでとうございます。本学は仲間と共に支え合い、時には切磋琢磨して高め合いながら学べる環境であり、充実した学生生活を送ることができます。また、先生方のご指導を受ける中で、自分自身の成長を日々実感しています。恵まれた環境の下で勉強できることに感謝しながら、これからも学びを深めていきたいです。

(2023年度入学生)

15周年おめでとうございます。本学での学びを通じて、看護学の知識や技術に加えて人として大切な姿勢を培っていることに、深く感謝しています。特に講義や演習、実習を通じて「その人らしさや願い」に着目することが必須であると実感しています。また、沢山の高性能な設備がある環境や、熱心に指導して下さる先生方の存在が日々の成長に繋がっています。支えて下さる方々への感謝を胸に、残りの学生生活をより実りあるものにしていきたいです。

(2023年度入学生)

看護を学ぶ中で、知識や技術だけでなく人に寄り添う姿勢の大切さを感じています。仲間と共に乗り越える経験が、自分の成長につながっていることを実感する毎日です。まだ学びの途中ですが、これからの大学生活を通して看護師としての力をしっかり培っていきたいです。

(2024年度入学生)

大阪医科薬科大学看護学部は、患者さん一人ひとりに寄り添える看護師を目指す私たちにとって理想の環境です。日々の学びの積み重ねが、私達の成長につながっていることを実感し、未来への希望が広がっています。

(2024年度入学生)

看護学部創立15周年・看護学研究科10周年おめでとうございます。本学で看護学を学べるのは家族、先生方、地域の方々の支えがあってこそだと感じています。人々の健康と暮らしを支えていけるような看護師を目指して、日々の学びに感謝し努力していきたいと思えます。

(2025年度入学生)

確立した医療知識と思考力を兼ね備えた看護師を目指し、本学で学びたいと思っています。医科薬科大学としての専門的な学びの環境や、国際的視野を重視した教育方針に魅力を感じています。人々の心に寄り添える看護を実践できるよう、本学で多くを学び、地域社会や医療現場に貢献していきたいです。

(2025年度入学生)

次世代への恩送り—看護学部15周年・
看護学研究科10周年に寄せて

小児看護学分野 教授

すずき みさ
鈴木 美佐

看護学部15周年、看護学研究科10周年を心よりお祝い申し上げます。

私は2017年より博士後期課程に在籍し、2022年からは本学小児看護学分野の教員として勤務しております。院生時代には、熱く惜しめないご指導をくださった先生方、共に学ぶ仲間や先輩方との出会いに恵まれました。大学院での学びを通して、看護実践の現場に立脚した問いを見いだす力、人間を多面的に捉える視座を培うことができました。そこで得た経験は、今の教育・研究・実践の確かな軸となっています。

博士後期課程でご指導いただいた泊祐子先生は、学部生時代から修士・博士と節目ごとに小児看護の奥深さと研究の面白さを教えてくださいました。博士後期課程入学間もない頃、研究テーマの選定に悩んでいた私に「真に明らかにしたいことは何か」と問いかけ、背中を押してくださったのは、当時の泊研究室は現在、私が使用しているこの部屋でした。研究者として、子どもに向き合い子どもの声を聴く覚悟が決まった、その場面を鮮明に覚えています。

また、本学での教育・研究、特に高度実践看護教育では、竹村淳子先生から多くを学ばせていただきました。竹村先生は私の新人看護師時代の大先輩でもあり、縁の不思議さと学びのつながりを感じます。

これまでを振り返ると、数多くの出会いといただいたご恩に支えられて歩んでこられたことを実感します。未熟さを感じることも多い日々ですが、これまでにお世話になった先生方からいただいた恩を次世代へと“恩送り”し、看護の学びと志をつないでいけるよう微力ながら努めてまいります。

学部15年、研究科10年の節目を新たな出発点として、看護学部・看護学研究科のさらなる発展を心より祈念申し上げます。

看護学部15周年・看護学研究科
10周年を祝って

臨床医学分野 教授

やすだ としと
安田 稔人

この度の看護学部15周年・看護学研究科10周年を心よりお祝い申し上げます。

私は2020年4月より整形外科学教室から医系教員として、看護学部へ赴任いたしました。赴任して5年半が過ぎ、現在は臨床医学分野に所属しています。看護学部の教育に対する姿勢は本当に素晴らしく、教員の皆様の熱心な指導、教育により、学生たちは一人前の看護師となって社会に巣立っていくのだと実感しています。本学看護学部卒業の看護師は、臨床の現場でもとても優秀だったのもよくわかる気がしました。看護学部の立ち上げの際は、いろいろなお苦勞があったとお聞きしますが、その当時を知る先生方も少なくなってきたと思います。できれば、看護学部へ在籍している間に少しでも、看護学部の歴史に触れる機会を持てればと思っております。そういう意味で、今後、開催される記念行事や記念誌で、当時のことを知ることができることを大変ありがたく思っております。看護学部開設後は大学院看護学研究科も設置され、多くの大学院修了生も輩出しています。看護学部の先生方は大学院生の研究指導にもとても力を入れておられ、私自身、教育だけでなく、研究に関しても看護学部で多くのことを学ばせていただきました。私は大学退職後には教員として教育活動をするのではないと思っておりますが、看護学部での学びを胸に臨床現場でこれからも看護教育に携わっていきたいと思っております。

看護学部がこの先、20年、30年、50年、100年とますます発展していくことを心よりお祈りして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。この度は誠にありがとうございます。

節目の年に思うこと



精神看護学分野 教授
やまおか ゆみ
山岡 由実

看護学部が15周年、看護学研究科が10周年を迎えるこの節目の年にあたり、2023年春の着任から3年目となった今、本学の一員として歩む責任の重みに身が引き締まります。着任当初から、看護学部の教員の皆さんが学生に向ける真摯な姿勢と熱意に触れ、深い感銘を受けてきました。また、大阪医科大学がこれからの社会に果たす役割を見据えて取り組み続ける姿勢は、広い視野から自分の役割を捉え直す機会にもなっています。

専門である精神看護学に限らず、分野を越えて意見を交わす機会も増え、価値観を共有しながら歩みを進める日々の中で、ものごとの捉え方も少しずつ柔軟になってきたように感じています。また、事務局の皆さんと仕事をご一緒する中で、協働の意味を改めて感じ、その大切さを実感しました。こうした関わりの積み重ねが、本学の確かな基盤を形づくっているのだと感じます。

医療系総合大学ならではの取り組みに触れる場面も多く、そのたびに新たな発見があります。医学部や薬学部の先生方との共同研究では、多様な専門性が交わる場だからこそ得られる刺激があり、本学が持つ可能性の広がりや、日々の対話を通して実感しています。

周年を迎える今、これまでの歩みに深い敬意を抱きながら、次の10年に向けて自分がどのように貢献できるのかを考えています。多くの方々との協力を大切にしつつ、本学のさらなる発展に少しでも力を尽くしていければと思います。

看護学部15周年・看護学研究科10周年を迎えて



基盤看護学分野 准教授
かわきた としみ
川北 敬美

本学へのお声かけをいただいたのは、出産のため休学を経て復学した修士2年目の冬、2010年のことでした。「基礎の助教を探しているらしいけれど、川北さんどうかな？」とのお話をいただき、大変ありがたいと思う一方で、乳児を抱えての勤務に不安もありました。面接の際、当時の基礎看護学教授・道重文子先生がにこやかに迎えてくださり、「私もそうやったのよ。近くに子どもを見てくれる人を探して、ご飯を食べさせてもらったりしてたわ。お金で解決できることはお金を出し」と温かい言葉をかけてくださいました。その励ましに背中を押され、今日まで歩んでくることができたのだと思います。

着任後は、同室や同分野の先生方に恵まれ、また、委員会活動などを通して多くの先生方からご指導をいただき、忙しくも充実した日々を過ごしてまいりました。病院の皆さまにも、より良い教育をとるに考え、研究の場を提供していただくなど、恵まれた環境で仕事をさせていただいております。周囲の理解と支えの中でこれまで乗り越えられたことに感謝し、改めて「人に支えられて働く」ことの意味を実感しています。

学生たちはいつの時代も誠実で、一生懸命に自らの成長と向き合っています。卒業後に実習先などで再会し、「先生、覚えていますか？懐かしいですね」と声をかけてもらえることが、教員として何よりの喜びです。

このたび、看護学部15周年、看護学研究科10周年を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。多くの方々のご尽力と温かなつながりの中で築かれた歴史に感謝し、これからも学生とともに学び、成長し続ける教育に力を尽くしてまいりたいと思います。



歓迎会の様子

初心を思い出しての再出発

急性期成人看護学分野
准教授たにみず なみ
谷水 名美

看護学部15周年・看護学研究科10周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私が最初に本学に在職したのは看護学部新設の時でした。新しいものを一緒に創り上げていく活気ある雰囲気の中で大学教員としての一歩を踏み出しました。初めてのことに戸惑い、悩むこともありましたが、唯一の大部屋である助教室では同僚の先生方と切磋琢磨し、刺激ある日々を過ごしたことが懐かしく思い出されます。

その後、博士後期課程への進学のために一旦退職し、学生の立場も経験しました。全国で活躍する多くの修了生の様子を見聞きし、本学のめざましい発展に目を見張るとともに、博士後期課程の第1期修了生として学位をいただけたことを大変誇らしく感じております。諸先生方や家族の強力なサポートのもと授業履修・論文作成に励みましたが、時間を忘れるほどに学問に向き合い、研究に没頭したあの日々を今でも時折思い出し、人としての幅も広がってくれたと感じております。

その後、他学の新設校に再び教員として着任しましたが、教員・研究者としての基盤を作った本学での経験が大変役立ったことはいまでもありません。新天地でも素晴らしい同僚に恵まれ、少しは成長できたのでは?とっていた矢先にご縁をいただき、本学に戻ってまいりました。開設当時のままの学生ユニフォームや緑あふれる美しい中庭を見ると感慨深く、実習で再会した卒業生は実習担当指導者として頼りになる存在となっており、大学での教育の喜びも感じました。謙虚さと誠実さに基づいた初心を忘れることなく、本学のさらなる発展のために、もてる力を尽くし、諸先生方、学部生・院生と共に再び邁進してまいりたいと思います。

看護の力を未来へ：看護学部15周年・看護学研究科10周年に寄せて

母性看護学・助産学分野
准教授ちかざわ さち
近澤 幸

看護学部15周年、そして看護学研究科10周年という記念すべき節目にあたり、心よりお祝い申し上げます。私自身、看護学研究科の修了生として、現在は母性看護学・助産学の教員として教育と研究に携わっており、この節目を迎えることに深い喜びと感慨を覚えています。

研究科での学びは、私の看護観を大きく広げ、実践に裏打ちされた理論的思考の重要性を実感する機会となりました。母性看護・助産の分野では、いのちの誕生に立ち会う責任の重さとともに、母子やその家族の一生を支え続ける専門性が求められます。研究科で培った力は、そうした実践に内在する問いを言語化し、学術的に探究する姿勢へとつながっています。

現在は教員として、学生一人ひとりと向き合いながら、「考え続ける力」と「支え続ける力」をいかに育むかを日々努めています。本学では、基礎力を養う日常的な学びに加え、学内外での多職種連携教育など、幅広い経験を通じて実践力を備えた看護職の育成に力を注いでいます。多様化・複雑化する社会において、どのような現場でも柔軟に対応できる力をもった学生たちが、本学から巣立っていくことを心から誇りに思います。そして私自身も、学生とともに学び続ける姿勢を大切にしていきたいと考えています。

この15年、10年の歩みのなかで、多くの卒業生・修了生がさまざまな場で活躍していることは、本学の誇りであり、次代への大きな励みでもあります。今後も、本学が看護の未来を切り拓く教育・研究の拠点として、さらなる発展を遂げていくことを心より願っております。

「出会いに育まれて」



精神看護学分野 講師

やまうち さいか
山内 彩香

看護学部15周年、大学院10周年を心よりお祝い申し上げます。2018年に本学に着任して以来、多くの方々との出会いを通して育てていただいたと感じています。

学生との出会いも、私にとって大きな財産です。精神看護を担当する中で、学生が患者さんと真摯に向き合い、悩みながら関わりの中に看護の意味を見だしていく姿に、胸が熱くなり、看護教育の尊さを実感してきました。大学院教育にも一部関わらせていただき、より良い看護実践を目指して探究を重ねる院生から多くの刺激を受けました。

教育に加え、さまざまな委員会にも携わらせていただきました。国際交流活動では、言葉や文化の壁を越えて懸命に理解しようとする学生たちの姿から、交流の楽しさと互いの違いを尊重しながら学ぶ合うことの大切さを改めて感じました。

日々の教育・研究・委員会活動の中では、分野内外の先生方から多くの助言や励ましをいただきました。2020年には、新型コロナウイルス感染症が拡大し、授業の組み直しやオンライン化、実習施設や物品の確保など、これまでにない課題に取り組む中で、先生方や実習指導者の方々と協力して学生の学びを継続できたことは、忘れがたい経験となっています。先生方と看護や教育について一緒に考える中で、看護への思いや教育の奥深さに気づくことができ、私自身の看護観や教育観を広げる大切な学びとなりました。

こうした多くの出会いと支えの中で、私はこの学部に育てていただきました。看護学部15周年・大学院10周年という節目を迎え、これまでのご縁に心から感謝するとともに、これからも先生方や学生と共に歩みながら、本学の看護教育が豊かに実り続けていくように力を尽くしてまいりたいと思います。

15周年・10周年に寄せて —教育の継承とその歩み—



公衆衛生看護学分野 講師

やまの ふみえ
山埜ふみ恵

大阪医科薬科大学看護学部15周年、大学院看護学研究科10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私は2014年に博士前期課程の一期生として入学し、同時に教員の道を歩み始めました。当初は大学という文化に戸惑い、悩むこともありましたが、諸先生方に導かれ、教育研究者としての姿勢を一から学ばせていただきました。

印象的なのは、コロナ禍の時期です。大学として何をすべきかを模索し、停滞することなく教職員同士でアイデアを出し合った日々は、今も記憶に残っています。あの困難な状況を丸となって乗り越えた経験は、看護教育の原点を改めて思い起こさせるものでした。

また、卒業生が今は保健師として後輩を指導したり、大学院のディスカッションで専門職の視点から意見を交わす姿は、とても頼もしく感じました。自分が関わった学生が看護職として羽ばたく姿に触れるたび、教育の成果と継続の重みを実感します。さらに、卒業生が保健師としての就職やキャリア相談に訪れることも多く「保健師になりたい」という種をまく役割の大切さを感じます。学生時代の興味関心が社会での実践へとつながる過程を見届けられることは、教育者としての喜びであり、今後の励みとなっています。

15周年・10周年という節目を新たな出発点として、本学が地域とともに歩み、看護学における実践・教育・研究の次世代を担う看護職の育成にいつそう寄与されることを心より祈念申し上げます。

節目に寄せて—教育者・研究者としての歩みを支えられて—

小児看護学分野 助教
くらはし りか
倉橋 理香

大阪医科薬科大学看護学部が創設15周年、看護学研究科が10周年を迎えるにあたり、心よりお祝いを申し上げます。

私は小児看護学の助教として着任して間もない頃、ようやく教育者としての仕事に慣れ始めた矢先に新型コロナウイルス感染症の拡大に直面しました。初めての授業は、誰もいない教室で反応のないパソコンに向かって行ったことを今も鮮明に覚えています。学生が教室に集うことができない状況で、教育をどのように保障するのか試行錯誤を重ねた日々は、大学教員としての原点であり、社会的制限の中で「看護学教育の本質とは何か」を問い続ける大切な機会となりました。

最近、臨地実習に赴くと、卒業生が後輩に丁寧に指導する姿や、子どもや家族、地域に真剣に向き合う姿に出会います。その姿は、看護専門職としての確かな成長を示すものであり、看護学部が積み重ねてきた歴史の確かさを実感し、誇らしく感じます。

また、看護学研究科の10年の歩みの中、私は2022年度入学生として博士後期課程に在籍しております。研究を進める過程で幾度も困難に直面し、まだ学びの途上ではありますが、多くの方々に支えられながら、研究者として一歩ずつ前進していることを実感しております。この大学で教育者として、また研究者として成長の機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。ここで得た学びを基盤に、小児看護学のさらなる発展に貢献していきたいと考えています。

看護学部15周年・看護学研究科10周年という節目にあたり、これまでの歴史を築かれた先輩方に敬意を表しつつ、次代を担う学生と共に新たな歴史を刻んでいけることを心より願っております。

看護学部開設15周年と大学院看護学研究科開設10周年の節目に寄せて

がん看護学分野 助教
どい ともき
土井 智生

大阪医科薬科大学看護学部開設15周年、大学院看護学研究科開設10周年という記念すべき年を、皆様と一緒に迎えることができることを大変うれしく思います。開学以来、教育・研究・社会貢献の三本柱を基盤に、多くの優秀な人材を育成し、地域社会および学術の発展に寄与してこられたことに、心より敬意を表します。15年・10年という歳月は決して短いものではなく、幾多もの困難を乗り越えつつ築き上げられた軌跡は、これまで本学に関わってこられた全ての方々との努力と情熱の賜物にほかならないと思います。

特に、本学の教育においては、時代の要請に応じた柔軟なカリキュラムの展開と、学生一人ひとりの成長を支える丁寧な指導が実を結び、これまで多くの卒業生・修了生が活躍してこられております。研究においても、基礎から応用に至るまで幅広い成果を収めてこられ、本学の存在感を一層高めています。さらに、地域社会や国際的なつながりも重視し、産学官との協働や社会貢献活動を積極的に展開してきたことも、本学の大きな特徴であり強みであると感じています。

15周年・10周年は一つの大きな節目であると同時に、新たな挑戦への出発点でもあると思います。これからの未来を担う人材像も多様化するなかで、本学が培ってきた理念と実績は、これからの発展に向けたたしかな基盤となります。これからも看護学部・大学院看護学研究科がさらなる飛躍を遂げ、明るい日本の未来の実現に寄与できるよう、微力かもしれませんが、私も精進してまいりたいと思います。

結びに、これまでの看護学部、大学院看護学研究科の歩みを支えてこられた歴代の教職員、在学生、卒業生、修了生、そして地域社会をはじめとする多くの関係者の皆さまに心からの感謝を申し上げますとともに、今後ますますのご発展を祈念いたします。

原点と歩み ～看護学部開学15周年に寄せて～



奈良学園大学 教授
にしその ていこ
西園 貞子

【在籍期間・職位】
2010年4月～17年3月
大阪医科大学 看護学部 講師

関西の伝統ある大阪医科大学に看護学部が誕生してから、15年。開学メンバーとしてそのスタートに関わったことを、今あらためて嬉しく、そして少し誇らしく思い返しています。当時の私は教員として3年目。年齢的には「若手」と呼ばれるには少し遅咲きのスタートでしたが、「新たな場で何かを創り上げたい」という不安と期待を抱きながらの船出でした。

新設の学部では、教育内容や学生支援のあり方、カリキュラム、さらには学部の理念づくりに至るまで、すべてが手探り。次々に委員会が立ち上がり、「何か始めなければ」「前に進まなければ」と、日々追われるように過ごしていた当時が、今では懐かしく思い出されます。それでも、学生たちの真剣なまなざしや、成長の瞬間に立ち会うたびに、「ここで看護を教える意味」が自分の中で少しずつ形になっていきました。忙しくもどこか温かい、かけがえのない時間だったと感じています。

この15年の間に、医療を取り巻く環境は大きく変化し、看護職に求められる役割もますます多様で高度なものになってきました。そうした中で、私があらためて実感しているのは、次世代を担う学生の育成に真摯に力を注ぐことの重要性です。この思いは現在の研究テーマにもつながっており、看護師の能力育成につなぐ教育プログラムの開発・実践に取り組む中で、「現場で本当に求められる力をいかに育てていけるか」と日々模索を続けています。

開学当初のあの熱量と仲間との絆が、今の私の原点であり、支えです。15周年という節目を迎えられたことに、心からのお祝いと感謝を込めて。これからの看護学部の歩みが、ますます実り豊かであることを願っています。

看護学部での10年を振り返って



森ノ宮医療大学看護学部
看護学科 講師
はら あきこ
原 明子

【在籍期間・職位】
2010年4月～20年3月
大阪医科大学 看護学部 助教

この度は、大阪医科薬科大学看護学部15周年、看護学研究科10周年、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。今回、寄稿のお話をいただき、私が在籍した10年を振り返る機会となりました。この場をお借りして感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

私は2010年、看護学部の開学と同時に基礎看護学領域の助教として着任いたしました。教員として第一歩を踏み出したばかりの私は、右も左もわからない状況で、目の前の講義や演習の準備をすることに精一杯でした。当時は一歩距離を置いて自分の教育を振り返ることも十分できていなかったと思います。

そのような中でも心に残っているのは、多くの先生方と出会い、学部運営や教育について学んだことです。学部開設後の初回のセンター会議や委員会では規約や細則を作成し、活動内容を一から創り上げていったことが印象に残っています。一つひとつの積み重ねが学部の歴史を築いていくのだと思いました。

学生との関わりでは、学生との向き合い方について悩んだこともありましたが、それぞれの学生の成長を見守るのは楽しかったです。時を経て、卒業生が大学を訪れてきてくれたり、実習先で頼もしい姿になって再会できたりしたことも励みとなりました。

また、2016年から2年間、田中忠彌国際交流基金により米国のオーガスバーグ大学へ留学の機会をいただきました。この経験は、異文化看護学を学ぶ契機になっただけでなく、海外から日本の文化や看護について考える貴重な経験となりました。改めて、感謝申し上げます。

節目を迎えた今、看護学部、看護学研究科がこれまで築いてこられた歴史に敬意を表するとともに、今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

静寂の奥に積もる知



愛媛大学大学院 医学系研究科 看護学専攻 教授
やまうち えいこ
山内 栄子

【在籍期間・職位】
2010年4月～15年3月
大阪医科薬科大学 看護学部 准教授

大阪医科薬科大学看護学部設立15周年、看護学研究科設立10周年、心よりお祝い申し上げます。

大学のなかで、私が密かに好きな場所がありました。それは、図書館の地下倉庫です。ある日、調べ物の途中で、大学図書館に古い雑誌が所蔵されていると知り、普段は足を踏み入れることのない地下へ向かいました。静寂に包まれた空間に並ぶ古書の中に、100年以上前の『The Lancet』や『Nature』がありました。書物たちは長い時を重ねてきた威厳をまもっていて、素手で触れるのがためらわれるほどでした。頁をめくると、紙の質感や古書独特の香りとともに、当時の研究者たちの思いや時代の空気が紙面から立ち上がってくるような感覚を覚えました。大学の歴史の厚みと、知の蓄積・継承という役割の重みを、改めて実感した瞬間でした。

大学を離れた後、看護研究雑誌を拝見する機会がありました。創刊から10年を経てもなお多くの投稿が集まっていることを知り、そこに知が創られ、蓄積され、継承されていく営みが息づいていることを感じました。そしてその営みは、様々な大学から集まった先生方の英知が、時間をかけてつながり合い、ひとつの教育・研究の場として形づくられてきた成果なのだと、深い感慨を覚えました。

当初は、異なる大学から集まった先生方それぞれの考え方や価値観に触れ、戸惑うこともありましたが、でも今振り返れば、それは多様な知が交差し、融合していく貴重な時間だったのだと気づきます。連日の議論や夜遅くまで続いた懇談も、今では懐かしく思い出されます。

これからの大阪医科薬科大学が、知の継承を大切にしながら、未来に向けて創造的な学びの場として、ますます発展されることを心より願っております。

多職種連携教育への期待



沖縄県立看護大学 教授
うりざき たかお
瓜崎 貴雄

【在籍期間・職位】
2010～12年
大阪医科大学 看護学部 助教
2013～16年
大阪医科大学 看護学部 講師
2017～20年
大阪医科大学 看護学部 准教授
2021～22年
大阪医科薬科大学 看護学部 准教授

大阪医科薬科大学看護学部が創設15周年、看護学研究科が創設10周年を迎えられましたこと、心よりお祝いを申し上げます。創設以来、教職員の皆様のご尽力によって、多くのジェネラリスト、高度実践看護師、研究者を育成され、看護学や看護実践の発展に大きく貢献してこられたことは、かつて在籍した私にとっても大きな誇りでございます。

私は学部創設時に、精神看護学領域の助教として着任しました。先輩諸氏のご指導のもと、大学教員として成長する機会をいただきました。なかでも印象に残っているのは、当時掲げていた「医看融合教育」に関する取り組みです。神経精神医学教室と附属病院の協力のもと、2012年度から精神看護学実習のなかで、看護学部生と医学部生が共に患者さんを担当し、合同カンファレンスを実施してきました。大学統合後は、薬学部も加わり、三学部の学生がそれぞれの専門的立場から査定や方針を示し、議論を深めるという実習が展開されています。学生たちは、患者さんの生活の質を高めるという目標を共有できることを体験し、他の職種を尊重して連携する姿勢を自然と身につけていました。学生のうちから、多職種協働を実践的に学べることは、貴学の大きな特色であり、強みであると感じております。

少子高齢化やグローバル化の進展、情報技術の発展などといった医療を取り巻く状況の変化に柔軟に対応していくためには、多職種が協働する力は欠かせません。貴学の教育は、未来の医療を支える礎であり、その重要性はますます高まっていくものと確信しております。最後になりましたが、貴学の看護学部と看護学研究科のさらなるご発展と、関係者の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

感謝



名古屋市立大学大学院看護学
学研究科 教授

くぼたまさかず
久保田正和

【在籍期間・職位】

2016年4月～21年3月

大阪医科大学 看護学部 准教授

2021年4月～24年6月

大阪医科薬科大学 看護学部 教授

このたび、看護学部15周年・看護学研究科10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私が大阪医科薬科大学に在籍したのは、2016年4月から2024年6月の約8年間になります。着任当時は直前まで臨床で働いていたこともあり、3年ぶりの教育研究職ということで、「感覚」を取り戻すのに時間を要しました。しかしながら、周囲の方々の手厚いサポートのお陰で、何とか仕事を軌道に乗せることができました。思い起こせば当時の老年看護学分野にはまだ大学院がありませんでしたので、博士前期課程の教育研究コースからCNSコース、博士後期課程を順に開設していきました。特にCNSコースにおいては、現教授の樋上容子先生と一緒に関係各所を回り、膨大な資料の作成に明け暮れ、一つのコースを作り上げる大変さを痛感しました。当時は現研究科長の鈴木久美先生をはじめ、多くの先生、事務の方にご支援をいただき、今でも大変感謝をしております。CNSコースは私の経験不足故、不安の中でのスタートでしたが、在職時に4名の老人看護専門看護師を輩出することができました。現在、4名ともCNSとして素晴らしい活躍をされており、お会いして話をする度に、我々の仕事は間違っていなかったと確信させてくれます。

大阪医科薬科大学は大学院生だけでなく、学部生の質も高く、感心させられることが多々ありました。元々持っている能力も高いですが、とにかく粘り強くひたむきに目標に向かって頑張ることができる学生が多いです。学生が成長していく姿を見て教育のやりがいを感じ、私自身の糧にもなりました。感謝しています。

今後も大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科がさらなる発展を遂げられますよう、心よりお祈り申し上げます。

大阪医科薬科大学での教育・研究の経験を振り返って



兵庫医科大学 看護学部
教授

ふかわあきこ
府川 晃子

【在籍期間・職位】

2015年4月～18年3月

大阪医科大学大学院 看護学研究科 博士後期課程

2017年4月～22年3月

大阪医科薬科大学 看護学部 教員

2015年からは大学院博士後期課程の院生として、そして2017年からは教員として、大阪医科薬科大学に在籍しておりました。特に院生として在籍していた時期は仕事と学業を両立する日々を送っており、指導教員の先生から熱心できめ細やかなご指導をいただきながら、なんとか研究の方向性を見失わずに前進することができました。限られた時間の中で学びを深める経験は決して容易ではなく、先生方や同期の支え、何より研究で関わった対象者の皆さまの温かいご協力があってなんとか進められていた状態でしたが、その過程で培った課題に向き合う力は、現在の仕事や研究活動においても大きな糧となっています。

さらに大阪医科薬科大学に在籍していた時期で、今でも鮮明に思い出されるのは、やはり2019年以降のCovid-19が社会に大きな影響を与えていたことです。当時は何をどうすれば学生さんたちの学びを維持していけるのか、そして教育や研究活動で関わる患者さんたちの安全を守っていけるのか、正解のわからない手探りの状態で必死で進めていました。授業や実習の形態も大きく変わる中、知恵を出し合って臨機応変に対応する必要がありましたが、教職員や学生に皆さんも一丸となって取り組んでいたなと感じています。振り返ってみればあれも良い思い出……とはいきませんが、困難な状況を乗り越える大きな経験になったと感じています。

振り返れば大阪医科薬科大学での経験は、教育や研究の楽しさだけでなく、どのような状況下でも学びや教育を続ける力と協働の重要性を私に教えてくれて、前向きに取り組む力を養ってくれました。これからも微力ながら多くの学生の支えとなれるよう、努力を続けていきたいと思えます。

看護教育の根を張る創設期に携わって



大阪医科薬科大学 名誉教授

とまり ゆうこ
泊 祐子

【在籍期間・職位】

2010年4月～20年3月
大阪医科大学 看護学部 教授

このたび、看護学部・看護学研究科の開設記念誌に寄稿の機会をいただき、創設期を振り返り懐かしい思い出に喜びを感じています。

最初の記憶は、京都駅ビルの和食店で佐野浩一先生（現学長）にお会いし、関西大学と共同学部設置案を検討中だが看護学部を設置すると伺った場面でした。その後、着任予定の教授の方々と1泊合宿を行いカリキュラムを検討し、そこで「実践と理論の統合」という科目を提案しました。それは、看護学実習の前後に理論（知識）を現前の事象に統合しやすくする演習と、実習後の討論により再構築する思考の道筋づくりを目的とした学士課程教育の神髄と考えためです。

研究科設置の準備に関しては、2012年9月27日、準備室委員の佐野学長、事務の前田将孝氏、初代学部長林優子先生と文部科学省を訪問したことが印象深く、緊張のあまり待ち合わせに一番乗りしたことを覚えています。佐野先生の細やかさを反映した文科省への頻繁な相談を重ねたおかげで、カリキュラム設計や出願資格を受けた入学への学習の保障、また、後期課程の正規の修業期間での修了を保障する制度設計ができたと思っています。具体的には出願資格を経た入学への事前学習の講義、専門看護師コースと研究者コースの特別研究の差別化、主副指導教員での定期的なグループ指導の設計、後期課程出願資格に筆頭論文2本以上の条件、博士学位論文の提出条件（日本学術会議協力学術研究団体に登録されている学会誌への原著での採択）の整備です。

専門看護師コースの実効性を高めるには附属病院との連携が不可欠であり、看護部長らと定期的な会議を通じて、実習中の休職制度等の仕組みが整いました。先日の祝賀会で当時の小野看護部長等と再会し、附属病院の積極的な協力があり実現した制度と改めて感じました。

教育センター長の折には、「医看融合教育」を段階的に行うシラバス作成に取り組みました。その一つが「地域医療実習」のプログラム作りと実現です。2016年の入学式後に医学部の鈴木富雄先生から大槻勝紀学長（当時）より今年中に実施のお達しと相談を受け、在宅看護学の真継教授と準備をして、高知県庁の協力のもと、大川村の病院・診療所・訪問看護ステーション等を視察し調整をしました。薬学部も入り、3学部の学生たちの顔合わせと事前学習、チーム作りを経て、8月4日に実習がスタートしました。地域と協働するこの取り組みは今も「多職種連携実習」として根付いていることに嬉しく思っています。

本学がこれからも多くの看護専門職の成長を支える場であり続けることを願っています。



大川村小松診療所内での6人の学生と引率教員、カメラマンは筆者

学部生・大学院生との学び合い



滋賀県立大学 人間看護学
研究科 特任教授

たけむら じゅんこ
竹村 淳子

【在籍期間・職位】

2010年4月～17年3月
大阪医科大学 看護学部 准教授
2020年4月～25年3月
大阪医科薬科大学 看護学部 教授
(計12年間)

看護学部15周年・看護学研究科10周年、誠にありがとうございます。これまでを振り返ってふと浮かんだ光景は、1期生の新入生合宿でした。一緒にカレーを作りながら、看護学部での学びや希望などを語り合った充実した時間でした。合宿は、学生と教職員が力を合わせた最初の行事でした。開設後の4年間はカリキュラムの基本方針に沿って、先生方と教育や学生指導の具体を検討していきました。とくに実習においては一人ひとりの学生と話をすることで、育てたい学生像が徐々に明確になってきたように思います。活発な学生、思慮深い学生など、それぞれの個性を目の当たりにし、教育は学生と共に作り上げるものだ実感しました。

2014年4月には看護学研究科が開設され、博士前期課程と博士後期課程の学生が同時に入学されました。看護の実践経験をもつ院生さんの研究テーマは多彩で、私自身も大いに刺激をもらいました。当時、教授でいらした泊先生が隔週で実施された前期課程・後期課程学生との合同ゼミでは、院生の研究や研究手法、拠り所になる理論の学習会が開催され、学び合う楽しさを教えていただきました。この合同ゼミは、隔週とはいきませんが、現在も形を変えて継続しています。大学院の教育においては、教え導くというよりも考えながら進めることで院生さんも自分も成長してきたように思います。

大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科は、これまで多くの優秀な人材を輩出し、円熟期に差し掛かろうとしています。看護学における実践・教育・研究がますます発展していかれることを祈念いたします。

中庭の「花ももの木」、すくすくと未来へ



敦賀市立看護大学看護学部
教授

ささきあやこ
佐々木綾子

【在籍期間・職位】
2012年4月～24年3月
大阪医科薬科大学 看護学部 教授

看護学部開設15周年、ならびに大学院看護学研究科開設10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。これまで学部・研究科の発展に尽力された多くの関係者の皆さまに、深甚なる敬意と感謝を表します。

私の最終講義でも触れましたが、ここで改めて看護学部棟中庭の3本の「花ももの木」についてご紹介いたします。学部創設を記念し、佐野学長・理事長、林優子元看護学部長、田中克子前教授の温かなご厚意により植えられたとお聞きしております。3本の木は、春には桃色・薄桃色・白色の可憐な花を咲かせ、秋には酸味を帯びた実を結び、四季を通じて私たちの目と心を楽しませてくれました。

私は、在職12年の間、母性看護学と助産学を担当し、とりわけ助産学教育に力を注いでまいりました。本学では4年間で看護師と助産師の国家試験受験資格が取得でき、4年次には専門科目を修めた後、大阪府下を中心に助産学実習を行います。

在職中最も苦慮したのは実習施設の確保でしたが、当時の産婦人科学教室教授であった大道正英前教授をはじめ、諸先生方のご協力を賜り、多くの施設をご紹介いただきました。心より感謝申し上げます。

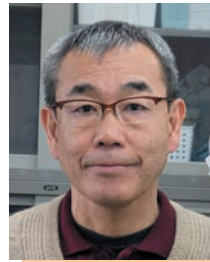
そして、学生たちは、助産学実習で分娩介助や妊産褥婦・新生児ケアを重ね、少しずつ助産師らしく成長します。その姿は、春に花を咲かせる花ももの木と重なり、毎年3月の卒業時期には深い感慨を覚えました。

この記念誌が刊行される頃、中庭の花ももの木は再び花を咲かせていることでしょうか。花と学生の成長を重ねながら、看護学部と大学院のさらなる発展を心より祈念いたします。



看護学部棟中庭の「花ももの木」

看護学部開設のころ



大阪医科薬科大学 医学部長
(生化学教室教授)

やの たかと
矢野 貴人

【在籍期間・職位】
2010～14年
大阪医科薬科大学 看護学部 教授

看護学部15周年・看護学研究科10周年おめでとうございます。看護学部開設から4年間にわたり専任教員としてお世話になり、その後、医学部に戻ってから兼任教員として看護学部・大学院で授業を担当しています。第1期生を迎えて以来、すでに約1,000名もの卒業生を送り出し、近畿地方有数の私立大学看護学部としての地位を確立された歴代の看護学部教員の皆さまに敬意を表します。

看護学部での4年間は私にとって大変貴重な経験であり、また思い出深い年月でもあります。医学部と看護学部の制度・気風の違いに戸惑いながらも、林優子先生、田中克子先生をはじめとするバイタリティーあふれる先生方に鼓舞されながら、なんとか務めることができたように思います。授業担当者として以外に、入試実務委員長、看護研究雑誌編集委員長などとして、開設間もない看護学部の立ち上げに果たして少しは貢献できたでしょうか。開設した2010年の夏はかなりの猛暑でしたが、全教員が手分けして、受験生募集のために近隣の高等学校を訪問したことも今となっては懐かしいです。

委員会の委員長の他、学科会議の議長に1年間任命されたこともありました。看護学部の教員は皆さん付度なく率直に意見を述べられ、それまで議長としての経験などなかった私としては、ずいぶん鍛えられました。以来、医学部でも数えきれないほどの会議で議長を務めてきましたが、それも看護学部での経験の賜物であります。

先にも記しましたとおり私は現在も看護学部で授業を担当していますが、顔見知りの先生がほとんどいなくなり寂しい思いもしています。当時若手であった助教・講師の先生方が今もどこかでご活躍しておられることを祈念しています。

大阪医科大学看護学部



大阪医科薬科大学病院
看護師
わたなべ ななこ
渡邊菜々子

2010年入学、2014年卒業

私は幼少期にけがをして、病院にたくさんお世話になりました。その経験から将来看護師になることを志しました。進路を考える際、看護学部の存在を知り、この大学で学びたいと強く思ったことを今でも覚えています。

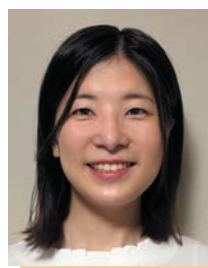
1期生88人の一人として入学し、先輩のいない中での授業や実習、ユニフォームのデザイン決め、アルバム作成など、多くの貴重な経験を積むことができ、楽しく充実した学生生活を送り、教職員の皆様や同級生の支えのおかげで無事国家試験に合格いたしました。卒業後は、英語を生かして医療に携わりたいとの思いからカナダへ約1年間留学し、Medical EnglishのDiplomaを取得しました。

帰国後、大阪医科大学付属病院に入職し、中央手術室に配属され現在11年目となります。手術室業務に加え、他言語対応スタッフとして、日本語を話せない患者さんへの支援や、海外の看護師・看護学生の院内見学の案内も担当しています。財団や、当院のお力添えのもと、メイヨークリニックやハワイ州のクリニックへ短期研修もさせていただきました。

すべての基礎は大阪医科大学看護学部で培われました。この経験を胸に、今後も看護師として成長を続け、医療に貢献していきたいと考えています。

この度は、このような機会をいただき誠にありがとうございます。大阪医科薬科大学看護学部15周年・看護学研究科10周年おめでとうございます。

大学生活を振り返って



たなか みき
田中 美妃

2012年入学、2015年卒業

この度は、看護学部15周年・大学院10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。今回、記念誌に寄稿の機会をいただき、大変光栄に存じます。

私の大学生活は、切磋琢磨できる同期生、熱心にご指導くださった先生方、そして看護師としての目標となる実習先の方々との出会いに恵まれ、充実した4年間でした。部活動ではライフサポートクラブ、管弦楽部、ESSに所属し、多くの学びを得ることができました。ライフサポートクラブでは一次・二次救命処置の知識・技術を高めるとともに、地域の方々へ講習会を行う中で、医療人が地域に果たすべき役割を学びました。管弦楽部では院内コンサートを通して音楽の力を実感し、チームで協働する姿勢を養いました。ESSでは他大学の学生とも交流し、大学内外の方々の志の高さに触れることで看護師としての目標を高める刺激を受けました。そして、実生活で活かすための英語を学ぶ事が出来、楽しむ対象となりました。大学生活において英語との良好な関係を築く事が出来た事が、私の人生をより豊かにするものになりました。

卒業後は附属病院に就職し、先輩や同期に支えられ、社会人としての多くの壁を乗り越えることができました。その後、語学留学を経験し、現在は臨床からは離れておりますが、医療関連の仕事においてこれまでの学びを活かしております。

大学で築いた人とのご縁は今も続いており、私の人生を豊かにしてくれています。これまで支えていただいた皆様への感謝の気持ちを胸に、今後も挑戦を続け、人として成長していきたいと考えております。最後になりましたが、大学・大学院のさらなる発展と、学生の皆様の実りある学びを心よりお祈り申し上げます。

患者さんに丁寧に関わることの大切さ



よしずみ さつみ
吉住佐侑美

2015年入学、2018年卒業

この度、大阪医科薬科大学15周年記念誌に寄稿の機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

大学生活は、授業や実習、課題、国家試験など、目まぐるしい日々で大変なこともありましたが、同じ夢を持つ仲間たちと過ごした時間は、とても楽しく濃密な4年間でした。その中でも大学在学中の一番の思い出は、3年次の領域別実習です。慢性期領域の実習で、ネフローゼ症候群の患者さんを受け持ち、自身で作成したパンフレットを用いて退院指導を行いました。毎日のカンファレンスや先生、指導者からのアドバイスを受ける中で、長期にわたって疾患と向き合っている患者さんの退院を見据えて、生きがいや価値観、生活スタイルを踏まえた個別的な看護が重要であるということ学びました。

大学卒業後は、大阪医科薬科大学附属病院の消化器内科病棟の看護師として4年間勤務しました。消化器疾患は、入退院を繰り返している患者さんや、生活習慣に大きく疾患が介入してくるため、退院後の生活に不安を抱えている患者さんも多く、学生時代に学んだ個別的な看護の重要性を痛感しました。実習とは違って患者さんに関わる時間も限られており、もどかしさを感じることも多くありましたが、患者さんとのコミュニケーションを大切に、常に丁寧に接することを心がけていました。丁寧に関わって患者さんを知ることが、「その人らしさ」を大切にした看護に繋がっていくと実感しました。

現在は健診センターに勤務の場を移し、病気の予防や早期発見に携わっており、関わる人も「病を抱える人」から「健康に関心を持つ人」が中心となりましたが、働く場所は異なっても看護の本質は変わらないという思いを胸に、「その人らしさ」を大切にしたい丁寧な看護を深めていくことができるよう日々精進していきたいです。

人とのつながりに支えられた学びの日々



大阪市 保健師
はせがわ ななこ
長谷川菜々子

2015年入学、2019年卒業

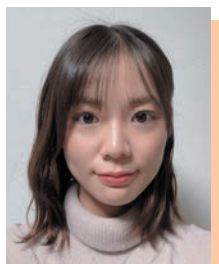
看護学部15周年、看護学研究科10周年おめでとうございます。私は6期生として平成27年に入学しました。卒業後は自治体保健師として勤務し、現在は働きながら母校の看護学研究科に進学し、大学院生として地域や職場に還元できるよう日々学びを深めています。

学部時代を振り返ると、地元を離れて初めての一人暮らし、学業や部活動、生活との両立に悩むことも多くありました。そんな中で、支えになったのは、どんな時も気軽に相談できる友人たちの存在でした。実習や国家試験の勉強、進路に迷ったとき、互いに励まし合いながら乗り越えた日々は、今でも大切な思い出です。卒業後も連絡を取り合い、近況を報告し合える関係が続いており、これからもずっと大切にしていきたい素敵な仲間に出会えたことを心から嬉しく思います。

また、先生方は学業だけでなく生活や将来についても親身に相談に乗っていただきました。社会人になってからもキャリアに悩んだ際には、先生のもとを訪ね、変わらず笑顔で話を聞いてくださる姿に何度も支えられました。大学院進学という新たな道を示してくださったのも先生で、この大学、この先生方のもとで再び学びたいという思いが進学の大きな原動力になりました。

仕事と学業の両立は容易ではありませんが、大学院では新たな仲間との出会いもあり、互いに刺激し合いながら学べる日々がとても充実しています。母校での学びを糧に、これからも地域に寄り添う保健師として成長していきたいと思っています。

青春時代に得たもの



大阪医科薬科大学病院 産科病棟 助産師
 わだ ゆい
 和田 結衣

2016年入学、2020年卒業

看護学部15周年記念心よりお祝い申し上げます。私は、この学び舎で恩師に出会い、勉学に励み、部活動を通じて一生の友人を得ることができました。

入学当初は将来の進路に迷いもありましたが、母性分野の授業を通じて、正常分娩であれば自身の判断で分娩介助を行うことができる助産師という仕事に魅力を感じ、助産師を志すようになりました。実習では現場での緊張感や命と向き合う重みを肌で感じながら、多くの学びを得ました。また、大学では医看融合教育に力を入れており、中でも ACLS シミュレーションやチーム医療教育に参加することで患者さんを多面的に捉える力が養われたことは、現在の助産師としての業務にも大いに役立っています。

多忙な学生生活を送りましたが、支えてくれる部活動の仲間が存在が大きな力になりました。私はバドミントン部に所属し仲間と部活動に励み、旅行に行ったり充実した日々を送ることができました。仲間の励ましと先生方のご指導のおかげで実習を乗り越え、看護師国家試験と助産師国家試験の2つの国家試験に合格できたと思っています。

現在は大阪医科薬科大学病院の産科病棟で助産師として勤務し、学生時代にご指導くださった先生方への感謝の気持ちを胸に日々多くの命と向き合っています。今ではかつてお世話になった実習指導者の立場となり、今度は自分が後輩の成長を支えられることに喜びを感じています。母校で培った学びと出会いが今の私の原点であり、助産師としての原動力です。素晴らしい仲間や恩師に出会えたこの学び舎での時間は、かけがえのない宝物だと感じています。

末筆ながら、この場をお借りして恩師や仲間、母校への感謝を申し上げますとともに、母校のさらなるご発展を心からお祈り申し上げます。



学内での演習風景

社会人を経て、新たな学士への挑戦で得た宝物



国立健康危機管理研究機構
 国立国際医療センター
 (執筆当時)

おがた けいこ
 緒方 恵子

2021年入学、2024年卒業

看護学部15周年・看護学研究科10周年の佳節に心よりお慶び申し上げます。そして記念誌への寄稿という貴重な機会を賜り、心より感謝申し上げます。

今春、大阪医科薬科大学の修了式で晴れ着に袖を通したその日は、私にとって13年前の文学士に続く2度目の学位授与式でした。文学部では英語とスペイン語を専攻し、多様な国の人々と多文化理解を深めた4年間でした。看護学部では看護師・保健師の2つの免許取得を目指し、臨床や在宅、行政、産業での医療に触れることができ、日々新たな学びを深め続けた4年間となりました。

私が看護の道を目指した動機は、文学部卒業後に勤務していたホテルで急病の外国人ゲストの対応を担った経験からでした。接遇に加え、自身に医療や看護の知識があればもっとできることがあったのではいかと実感したのです。9年間の社会人経験を経ての入学で13歳異なる同級生ができ、初めは互いに戸惑う部分もありましたが、共に演習や実習、試験や卒論に励み、多くの時間を共に努力して国試まで駆け抜けた友人達は、私にとってかけがえのない存在となりました。

看護の学びとともに、2年次からは国際交流委員会の先生方とSDGsを学び実践するグループ「NEXUS」を発足し、初代リーダーを任せていただきました。グループ名ネーミングの際、私は「Nursing(看護), Education(教育), X(掛け合わせる), Universal(全員の、全世界の), Sustainable cities and communities(住み続けられる街づくりを)」という意味を込めて、徹夜で考えに考えた「NEXUS」を提案しました。「これでいこう!」と決まった時の先生方やメンバーの笑顔がとても嬉しかったことを今も覚えています。この活動では調査研究も経験させていただき、先生方と学生の共同研究論文が英文で完成し2025年5月にJ-STAGEに掲載されました。2026年3月にはNEXUS初のHome Coming Dayも予定されており、尊敬する先生方や共に活動したOG・現役のメンバーと交流が続けられることに喜びを感じています。

卒業後は急性期病院の特別個室病棟で、新人看護師として先輩看護師や多職種スタッフ、患者様から多くのことを学ばせていただきました。そして2026年からは、在学中より目指していた産業保健師の道に進む運びとなり、また新たなチャレンジに心を躍らせています。その中で私の支えになっているのは、人として、医療人として、看護職として大切な沢山のことを教えてくださり、いつも励まし続けてくださった大阪医科薬科大学の先生方、大学職員の皆様への感謝と母校への誇りです。人生の宝物となる時間を過ごした大阪医科薬科大学での4年間。「至誠仁術」の精神を、これからも自身の心に、手に、瞳に込め、目の前のお一人おひとりの力となり、笑顔を生み出せる自分となれるよう、成長し続ける医療人でありたいです。

大学院での学びと今につながる実践



大阪医科薬科大学病院
看護部所属 看護師長・
専門看護師(兼務)
ふじさわ ゆりこ
藤澤由里子

看護学研究科 2014年入学、2016年卒業
療養生活支援看護学領域・精神看護学(高度実践
コース)

私が大学院進学を決意したのは、看護師として働く中で、ケアの中で感じる疑問や迷いに対して、自信をもって語れる看護実践ができていないのではないかと感じていたからです。そして、パトリシア・ベナー氏の「理論と実践が育まれたとき、専門性は実現される」という言葉に感銘を受けたことも大きな動機になりました。

大学院生活で最も印象に残っているのは、指導教員からの教えであり、私の看護観や管理観の礎となっています。指導では一貫して、「物事の表面的な事実だけにとらわれることなく、その背後にある本質や揺るがない根拠を問いつける姿勢」の大切さを学びました。「物事の本質」「揺るがない根拠をもつ」ことは、現在の私の看護実践や管理業務における思考の主軸となっています。

また、多様な専門領域をもつ同期の存在は、私の視野を大きく広げてくれたかけがえのない財産です。研究や実習におけるディスカッションでは、自分一人では思いつかない視点が多く、狭くなりがちだった思考が解放され、新しい学びを得ることができました。院生室での語り合いは、専門性を高め合う場として、最良の学習環境でした。

現在は、大阪医科薬科大学病院の精神科病棟および外来にて、看護師長兼精神看護専門看護師として、病棟・外来の管理運営、看護師の教育、チーム活動(身体拘束最小化・自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援・認知症ケア・虐待防止など)に携わっています。大学院生活での学びや経験は、日々の看護実践の中で確かな力となっており、ご指導くださった先生方、同期の存在があってこそ、今の私があることに深く感謝しております。母校の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

多くの学びや出会いをもたらしてくれた大学院



医療法人啓友会 高槻うの花
訪問看護ステーション
管理者
みぞべ よしえ
溝部 由恵

2018年入学、2020年修了
地域家族支援看護学領域 在宅看護学分野

看護学部創立15周年看護学研究科10周年おめでとうございます。

私は訪問看護師として活動していますが、臨床経験を重ねる中で、何か物足りなさを感じるようになっていました。そんな時、大学院のことを知り、授業についていけるかという不安はありましたが、学ぶことでこの物足りなさの理由がわかるかもしれないと思い、入学を決意しました。

大学院では課題と研究に日々追われ、仕事との両立は想像以上に困難でしたが、多くの学びを得ることができました。授業では自分の考えを言語化することが難しく、これまで感覚や経験に頼って看護の実践を行っていたと振り返る機会となりました。また、大学院に入る前は、看護研究は無関係だと思っていましたが、研究を進めていくうちに、研究と実践は一体であり、両者が結びつくことでより良い看護が提供できることを学びました。そして、私が感じていた物足りなさは実践と理論の統合、つまり経験を裏付ける知識や理論の不足だったのだと気づくことができました。

大学院修了後も訪問看護師として活動を続けていますが、得た知識によって自分の看護にしっかりと基盤が築かれ、実践に自信を持てるようになりました。また、スタッフに対しても、看護を言語化して伝えることが以前よりできるようになったと感じています。

そして、大学院では多くの院生や先生に出会い、授業では多くの意見交換を通じて自分の看護観を深めることができました。一緒に悩み、励まし合いながら課題に取り組んできた仲間とは、今でも勉強会をしています。私にとって勉強会は日々の看護を振り返り、明日から頑張ろうと思える大切な時間となっています。

自分の看護を振り返り、学ぶことで自信を持たせてくれたこと、学び続けることの大切さや面白さを教えてもらい、出会いをもたらしてくれた大学院に感謝しています。

看護現象を構造的に捉える： 専門看護師の使命



関西電力病院 がん看護専門
看護師
い だ ま み こ
飯田真実子

2022年入学、2024年卒業
療養生活支援看護学 がん看護学分野

大阪医科薬科大学 看護学部創立15周年、ならびに大学院看護学研究科開設10周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

在学中は、鈴木久美先生、南口陽子先生をはじめ、多くの先生方から心温まる熱心なご指導を賜り、深く感謝申し上げます。貴学では、がん看護専門看護師として複雑な看護現象を構造的に捉え、看護理論を適用して深く考察することで、目の前の問題を適切に把握する高度な思考の重要性を体得いたしました。これは、複雑な臨床現場において、患者さんにより良いケアを提供するために不可欠な思考の枠組みです。

特に鈴木先生には、時間を問わず熱心に指導していただきました。振り返れば入学当初、目の前の問題を適切に捉えられず、深く悩む時期がありました。そのような時、ご指導の終盤で「あなたが成長するためだったらいつでも協力する」という力強いお言葉をかけていただけたことは、私の最大の励みとなり無事に卒業へと導いてくださいました。

この言葉と先生方から受けた教育のおかげで、私は今、臨床現場で専門看護師として尽力できています。先生方から授けていただいた高度な知識と思考の枠組みは、実践するには難しさもありますが、今後もこれを忘れず、日々精進し、患者さんとチームのために考え実践していく所存です。

貴学での学びと経験は、私の看護人生の揺るぎない礎です。貴学がこれからも日本の医療・看護の質向上に貢献し続けられることを心から願っております。

大阪医科薬科大学 看護学部・大学院のさらなる発展と、教職員・学生の皆様のご健勝を心より祈念申し上げます、祝辞とさせていただきます。

仲間と育んだ看護研究の軌跡



兵庫大学看護学部看護学科
准教授
な か む ら と も こ
中村 朋子

2018年入学、2021年卒業
地域家族支援看護学領域 母性看護学

入学当初、同期生8名と科目履修生2名、計10名でのスタートでした。年齢も背景も異なる仲間達と、互いに支え合いながら学びを深めた日々は、今でも鮮明に思い出されます。

ロジャースの英語読解に頭を悩ませ、看護科学のパラダイム転換についての発表、英語でのポスターセッションに挑戦したことなど、どれもかけがえのない経験でした。学びの合間に開かれた同期会では、研究の悩みを共有し、励まし合いながら絆を深めることができました。また、仲間の結婚や出産、卒業式などの節目には、喜びを分かち合い、門出を祝えたことは、今でも心に残る温かな思い出です。とりわけ、仲間が出産した子どもが成長していく姿は、私達自身の歩みと重なり、ともに成長してきたような感覚を抱かせてくれます。その子の成長を見守ることは、私たちが歩んできた年月の証であり、仲間との絆を深く感じる瞬間でもあります。

特論やゼミ、中間発表を通して、自身の研究テーマに真摯に向き合い、副指導の先生方や皆様からの助言を受けながら試行錯誤を重ねた日々は、看護研究の奥深さと魅力を実感する時間でもありました。とりわけ、佐々木先生のもとでの学びは、研究者としての基盤を築くうえで大きな支えとなりました。加えて、博士課程での研究を通じて、自分の研究がまだ途上であることを痛感し、卒業後もその問いを追い続けています。私の研究課題である「予防が可能な子宮頸がんの罹患を防ぐこと」に関しては、現在も継続して取り組み、看護の実践と研究の両面からアプローチを続けています。

この10年という節目に、看護学研究科での学びが、私の看護実践と研究の土台となっていることを、改めて深く感じております。

“学術”を超えた人生の節目となった 看護学博士後期課程での学びと出会い



医療創生大学 教授

はせがわみきこ
長谷川幹子

看護学研究科 2016年入学、2019年修了
移植・再生医療看護学領域（博士後期課程）

私は、臨床における看護経験のなかで「患者の苦しみに、私たち看護師はどのように寄り添えるのか」「人が人を見るとはどういうことなのか」といった「答えのない問い」と出会ってきました。こうした問いを深めたいという思いが私を哲学へと導き、哲学を携えて再び看護の世界へ戻ることを決心し、看護学研究科博士後期課程の門戸を叩きました。

「哲学での学びを看護実践に活かし、看護学の発展に寄与したい」という願いから、私の研究では、哲学的視座、特に現象学や実存哲学を土台としながら、ケアの意味を問い直すことを試みました。理論的な探究の中で臨床経験に裏打ちされた感覚との間にギャップを感じるが多々ありましたが、この葛藤こそが看護における実践と理論の懸け橋になると信じて歩み続けました。

そのなかで、人の存在に深く関わる「ケア」という営みを単なる行為としてではなく、関係性や相互作用、沈黙の中にある感情の動きにまで目を向けることの大切さに気づきました。このような哲学と看護の双方からの学びを得ることができたのは、赤澤千春先生や小林道太郎先生をはじめとする先生方が専門性の違いにとらわれず、私の問いや姿勢を尊重し、ときに厳しく、ときに親身に、研究者として人として、私を育ててくださったからだと思っています。先生方のご指導には常に感謝の思いでいっぱいです。

また、学友たちの存在は何よりの支えでした。仕事と家庭、博士後期課程を同時進行させることは非常に難しいことでした。ゼミ準備、研究発表前の不安、失敗した時の落ち込み……それらすべてを共有し、励まし合いながら過ごした時間は、何物にも代えがたい財産です。

この博士後期課程での学びと出会いは、私にとって“学術”を超えた人生の節目でした。今後も看護実践と哲学的思索を往還しながら、看護教育や臨床実践の現場において、哲学的思考を内包した看護実践のあり方を提案し、より豊かなケアの創造に貢献していきたいと考えています。

第 6 章

資 料

看護学部看護学科

1, 入学者数の推移

年度	入学者数
2010年度	88
2011年度	88
2012年度	88
2013年度	92
2014年度	88
2015年度	89
2016年度	85
2017年度	94
2018年度	86
2019年度	87
2020年度	89
2021年度	93
2022年度	88
2023年度	89
2024年度	85
2025年度	97
入学者数合計	1426

2, 看護学部 卒業生数の推移

年度	卒業生数
2013年度	85
2014年度	83
2015年度	85
2016年度	93
2017年度	89
2018年度	84
2019年度	84
2020年度	87
2021年度	82
2022年度	82
2023年度	86
2024年度	89
卒業生数合計	1029

3, 看護師、保健師、助産師国家試験 受験者数、合格者数、合格率の推移

看護師国家試験

年度	受験者数		合格者数		合格率		全国平均	
	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	全体
2013(平成25)年度 第103回看護師国家試験	85	—	84	—	98.8%	—	95.2%	89.8%
2014(平成26)年度 第104回看護師国家試験	83	—	83	—	100%	—	95.5%	90.0%
2015(平成27)年度 第105回看護師国家試験	85	—	85	—	100%	—	94.9%	89.4%
2016(平成28)年度 第106回看護師国家試験	93	—	91	—	97.8%	—	94.3%	88.5%
2017(平成29)年度 第107回看護師国家試験	89	1	89	1	100%	100%	96.3%	91.0%
2018(平成30)年度 第108回看護師国家試験	84	—	84	—	100%	—	94.7%	89.3%
2019(令和元)年度 第109回看護師国家試験	84	1	84	1	100%	100%	94.7%	89.2%
2020(令和2)年度 第110回看護師国家試験	87	—	86	—	98.9%	—	95.4%	90.4%
2021(令和3)年度 第111回看護師国家試験	82	1	82	1	100%	100%	96.5%	91.3%
2022(令和4)年度 第112回看護師国家試験	82	—	82	—	100%	—	95.5%	90.8%
2023(令和5)年度 第113回看護師国家試験	86	—	86	—	100%	—	93.2%	87.8%
2024(令和6)年度 第114回看護師国家試験	89	—	88	—	98.9%	—	95.9%	90.1%
合格者数合計			1024	3				

保健師国家試験

年度	受験者数		合格者数		合格率		全国平均	
	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	全体
2013(平成25)年度 第100回保健師国家試験	83	—	80	—	96.4%	—	88.8%	86.5%
2014(平成26)年度 第101回保健師国家試験	83	—	83	—	100%	—	99.6%	99.4%
2015(平成27)年度 第102回保健師国家試験	49	—	46	—	93.9%	—	92.6%	89.8%
2016(平成28)年度 第103回保健師国家試験	33	—	33	—	100%	—	94.5%	90.8%
2017(平成29)年度 第104回保健師国家試験	33	1	33	1	100%	100%	85.6%	81.4%
2018(平成30)年度 第105回保健師国家試験	27	—	27	—	100%	—	88.1%	81.8%
2019(令和元)年度 第106回保健師国家試験	35	—	35	—	100%	—	96.3%	91.5%
2020(令和2)年度 第107回保健師国家試験	37	—	37	—	100%	—	97.4%	90.4%
2021(令和3)年度 第108回保健師国家試験	33	—	33	—	100%	—	93.0%	89.3%
2022(令和4)年度 第109回保健師国家試験	37	—	37	—	100%	—	96.8%	93.7%
2023(令和5)年度 第110回保健師国家試験	33	—	33	—	100%	—	97.7%	95.7%
2024(令和6)年度 第111回保健師国家試験	34	—	34	—	100%	—	96.4%	94.0%
合格者数合計			511	1				

助産師国家試験

年度	受験者数		合格者数		合格率		全国平均	
	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	既卒	新卒	全体
2013(平成25)年度 第97回助産師国家試験	5	—	5	—	100%	—	97.6%	96.9%
2014(平成26)年度 第98回助産師国家試験	4	—	4	—	100%	—	99.9%	99.9%
2015(平成27)年度 第99回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.8%	99.8%
2016(平成28)年度 第100回助産師国家試験	7	—	7	—	100%	—	93.2%	93.0%
2017(平成29)年度 第101回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.4%	98.7%
2018(平成30)年度 第102回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.9%	99.6%
2019(令和元)年度 第103回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.5%	99.4%
2020(令和2)年度 第104回助産師国家試験	7	—	7	—	100%	—	99.7%	99.6%
2021(令和3)年度 第105回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.7%	99.4%
2022(令和4)年度 第106回助産師国家試験	7	—	7	—	100%	—	95.9%	95.6%
2023(令和5)年度 第107回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.3%	98.8%
2024(令和6)年度 第108回助産師国家試験	6	—	6	—	100%	—	99.3%	98.9%
合格者数合計			72	0				

4, 看護学部卒業生の主な就職先・進学先

年度	主な就職先
2013年度	大阪医科大学附属病院 (36人) 大阪市立大学医学部附属病院 (7人) 淀川キリスト教病院 (4人) 滋賀医科大学医学部附属病院 (4人) 他
2014年度	大阪医科大学附属病院 (37人) 大阪大学医学部附属病院 (5人) 京都大学医学部附属病院 (5人) 大阪市立大学医学部附属病院 (4人) 他
2015年度	大阪医科大学附属病院 (35人) 大阪大学医学部附属病院 (4人) 国立循環器病研究センター (4人) 淀川キリスト教病院 (4人) 他
2016年度	大阪医科大学附属病院 (45人) 国立循環器病研究センター (5人) 大阪医科大学三島南病院 (3人) 淀川キリスト教病院 (3人) 他
2017年度	大阪医科大学附属病院 (51人) 新阿武山病院 (3人) 大阪国際がんセンター (1人) 大阪市立総合医療センター (1人) 他
2018年度	大阪医科大学附属病院 (51人) 愛染橋病院 (2人) 大阪市 (2人) 大阪精神医療センター (2人) 他
2019年度	大阪医科大学附属病院 (51人) 大阪市立大学医学部附属病院 (5人) 大阪市 (3人) 京都大学医学部附属病院 (2人) 他
2020年度	大阪医科大学附属病院 (51人) 大阪赤十字病院 (4人) 京都市 (3人) 高槻赤十字病院 (1人) 他
2021年度	大阪医科薬科大学附属病院 (53人) 大阪公立大学医学部附属病院 (2人) 関西電力病院 (2人) 大阪市 (2人) 他
2022年度	大阪医科薬科大学病院 (50人) 大阪公立大学医学部附属病院 (3人) 大阪市 (3人) 大阪府済生会中津病院 (2人) 他
2023年度	大阪医科薬科大学病院 (51人) 京都大学医学部附属病院 (2人) 大阪母子医療センター (2人) 大阪公立大学医学部附属病院 (2人) 他
2024年度	大阪医科薬科大学病院 (53人) 大阪市立総合医療センター (4人) 大阪大学医学部附属病院 (3人) 国立循環器病研究センター (2人) 他

年度	主な進学先
2013年度	語学留学 (2人)
2014年度	和歌山県立医科大学助産学専攻科 (1人)
2015年度	路加国際大学大学院 (1人) 愛仁会看護助産専門学校 (1人) 他
2016年度	和歌山県立医科大学 (2人) 他
2017年度	大阪大学大学院 (1人) 岡山大学養護教諭特別別科 (1人) 他
2018年度	岡山大学大学院 (1人) 大阪大学大学院 (1人) 他
2019年度	和歌山県立医科大学 (2人) 他
2020年度	金沢大学養護教諭特別別科 (1人) 東京都立大学助産学専攻科 (1人) 他
2021年度	大阪大学大学院 (1人) 大阪ハイテクノロジー専門学校 (1人)
2022年度	—
2023年度	東京医療保健大学和歌山助産専攻科 (1人) 宝塚大学助産専攻科 (1人)
2024年度	愛仁会看護助産専門学校 助産学科 (1人)

5, 各期卒業生の寄贈品

卒業年度	卒業期	寄贈品
2013年度	1期生	ホールクロック 1台
2014年度	2期生	賞状盆 1枚
2015年度	3期生	ガーデンテーブルセット 1式
2016年度	4期生	ガーデンテーブルセット 1式
2017年度	5期生	アンティークミラー 1枚
2018年度	6期生	木製チェア 8脚
2019年度	7期生	ダストボックス 1台
2020年度	8期生	鏡
2021年度	1期生	—
2022年度	2期生	掛け時計
2023年度	3期生	屋外用テーブル・チェアセット
2024年度	4期生	デジタル時計



2016年度 第4期卒業生寄贈品



2020年度 第8期卒業生寄贈品

6, 看護学部棟および看護学部研究棟における主な改修工事

卒業年度	寄贈品
2005年度	・看護学部棟 竣工
2010年度	・看護学部研究棟 竣工
2012年度	・男子学生更衣室の新設、女子学生更衣室および中会議室の拡張 ・実習室1~5の改修（セルフトレーニングルーム、機材保管庫）および実験室の整備
2013年度	・看護学部棟玄関前に公示用掲示板を設置 ・学部長室を研究室2室（現：207・208）に改修 ・教室1・2（現：講義室3）の可動式間仕切り撤去 ・実習室1・2に壁面収納棚を設置 ・会議室3を心理実験室兼面談室に改修 ・看護学部事務室の改修（キャリアサポートルーム、看護学実践研究センターの新設） ・コピーコーナーおよび旧キャリアサポートルームを研究室（現：大学院研究室2）に改修
2014年度	・看護学部棟1階研究室1、4、5（現：教員研究室L102・L102）の照明増設 ・看護学部棟講堂下の多目的室を大学院研究室（現：大学院研究室1）に改修 ・大学院研究室1・2と4・5を教員室2室（現：教員研究室L101・L102）に改修
2016年度	・看護学部棟 学生用Wi-Fi設備導入
2018年度	・講堂に座席表示プレートを設置 ・看護学部棟1階講堂下に、多目的室1・2を新設 ・講義室3にノート型PC95台と授業支援システムを導入 ・看護学部棟各トイレにジェットタオル設置
2019年度	・看護学部棟1階学生ホールの照明機器改修 ・看護学部2階情報処理室PC更改
2020年度	・看護学部棟各トイレのバリアフリー化 ・看護学部棟（講堂含む）外壁タイル補修工事
2021年度	・看護学部講堂および講義室3・5、情報処理室のデジタル化整備
2023年度	・看護学部講堂 天井耐震化工事（第1期） ・講堂と講堂から看護学部棟2階の渡り廊下における屋上防水工事
2024年度	・看護学部講堂 天井耐震化工事（第2期） ・講義室3に看護学教育システムの導入（教育研究サーバ・PC95台等） ・空調全熱交換器整備（54台）

7, 看護学部教員数の推移

各年4月1日時点

年	教授	准教授	講師	助教	助手	計	備考
2010年	9	4	4	9	0	26	
2011年	10	4	3	9	0	26	
2012年	12	5	5	10	0	32	
2013年	12	6	7	9	0	34	
2014年	13	6	8	7	0	34	
2015年	13	4	9	8	0	34	
2016年	12	6	10	7	0	35	
2017年	12	6	7	8	0	33	
2018年	13	9	3	9	0	34	
2019年	13	10	5	9	0	37	
2020年	13	10	6	11	0	40	
2021年	14	10	5	10	0	39	
2022年	15	8	4	11	0	38	
2023年	15	9	5	10	0	39	助教：特務助教1含む
2024年	14	9	6	9	5	43	助手：特務助手1含む
2025年	14	8	7	8	6	43	助手：特務助手1含む

1, 教育研究コース・高度実践コースの出願者数、合格者数および入学者数の推移

<博士前期課程（入学定員8名）>

年度	教育研究コース			高度実践コース			入学者数合計
	出願者数	合格者数	入学者数	出願者数	合格者数	入学者数	
2014年度	5	5	5	5	5	4	9
2015年度	11	10	9	1	1	1	10
2016年度	8	7	7	3	2	2	9
2017年度	6	4	3	4	2	2	5
2018年度	8	6	5	1	1	0	5
2019年度	6	6	5	4	1	1	6
2020年度	9	8	8	4	3	3	11
2021年度	6	2	2	8	7	6	8
2022年度	5	4	4	9	6	5	9
2023年度	4	3	3	6	4	4	7
2024年度	7	6	6	4	4	4	10
2025年度	3	3	3	2	2	2	5
合計	78	64	60	51	38	34	94

2, 修了者数の推移

年度	教育研究コース	高度実践コース
2015年度	4	1
2016年度	6	2
2017年度	8	0
2018年度	3	3
2019年度	4	0

年度	教育研究コース	高度実践コース
2020年度	6	1
2021年度	9	2
2022年度	3	5
2023年度	3	4
2024年度	3	2
修了者数合計	49	20

3, 高度実践看護師（CNS、NP）に認定された修了生

確定年度	専門分野	認定者数
2017年度	慢性	1
	精神	1
	小児	1
2019年度	慢性	1
2020年度	慢性	1
	小児	2※
2021年度	がん	1
2022年度	がん	1
	老年	1
2023年度	慢性	1
	老年	1
	小児	2
2024年度	プライマリケア（JANPU-NP）	1
	がん	1
	老年	2
2025年度	プライマリケア（JANPU-NP）	1
	がん	1
認定者合計		20

※科目等履修生として本学で高度実践コース科目を取得した1名を含む

看護学研究科看護学専攻博士後期課程

1, 出願者数、合格者数および入学者数の推移

<博士後期課程（入学定員3名）>

年度	出願者数	合格者数	入学者数
2014年度	8	5	5
2015年度	11	8	8
2016年度	7	6	5
2017年度	6	6	5
2018年度	8	8	8
2019年度	7	5	5
2020年度	6	3	3
2021年度	6	4	3
2022年度	5	4	4
2023年度	6	5	5
2024年度	6	6	6
2025年度	7	5	5
合計	83	65	62

2, 修了者数の推移

年度	修了者数
2016年度	2
2017年度	8
2018年度	4
2019年度	5
2020年度	5
2021年度	8
2022年度	4
2023年度	2
2024年度	6
修了者数合計	44

編集後記

記念誌の創刊号を皆様にお届けすることができまして、メンバー一同感慨もひとしおでございます。編集作業は学部創設時の古株教員と新参の教職員の混成チームでつたない力を合わせて参りましたが、なによりも本学への熱い思いのこもったご寄稿を頂いた先生方のお陰様と感謝し、厚く御礼申し上げます。コロナ禍では3密すべてが禁でしたが、われわれ同志は気持ちの上で密集かつ密接にかかわり、決して密封せずに、仲間の交流が一層盛んになっていくことを祈念しております。将来この記念誌が未来の世代へのつながりにもなることを願っております。

大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科
記念誌ワーキンググループ

グループ長 土手友太郎

大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科
記念誌ワーキンググループ

グループ長 土手友太郎

メンバー 小林道太郎 樋上 容子 南口 陽子 上久保 純

大阪医科薬科大学看護学部15周年 大学院看護学研究科10周年記念誌

2026年4月 発行

編集 大阪医科薬科大学看護学部・看護学研究科
記念誌ワーキンググループ

発行 大阪医科薬科大学 看護学部
〒569-0095 大阪府高槻市八丁西町7番6号
TEL (072)684-6782
FAX (072)684-7282
(大阪医科薬科大学 看護学事務課)

制作 株式会社 知人社



Osaka Medical and Pharmaceutical University
Faculty of Nursing 15th Anniversary
Graduate School of Nursing 10th Anniversary

